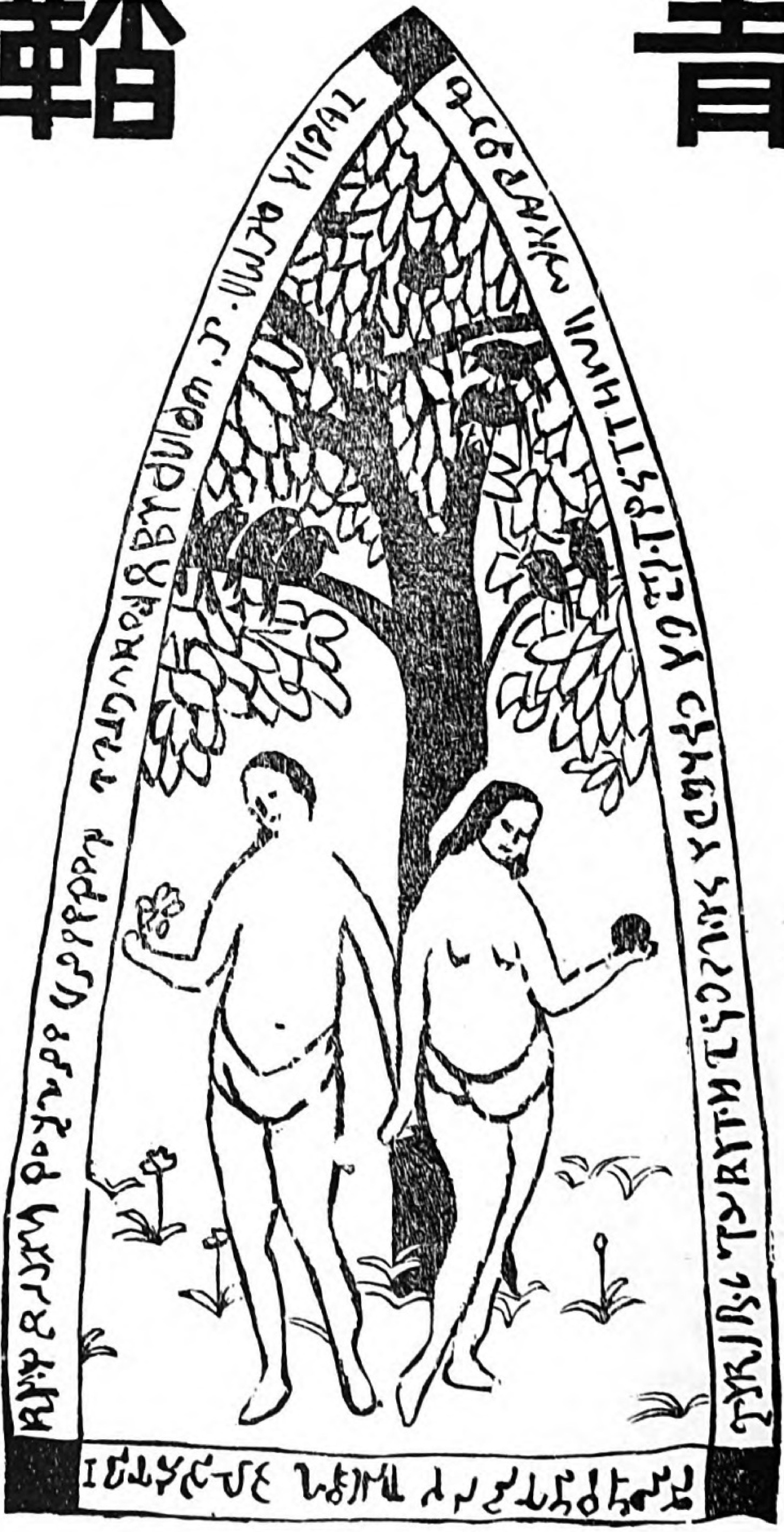
青鞜



10

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜 十月號內容

イワノフ……（戯曲）……………………………一……チエホフ 夏葉譯
灯たば細めて……（短歌）……………………………三一……岡本かの
夕霧の中の街の灯（短歌）……………………………三六……柴田かよ
旅の歌……（短歌）……………………………三九……岩淵百合
壁の影……（日記）……………………………四七……マツコア 野枝譯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

朝霧……………（小說）……………………………六七……杉本正生

藝術と春…………（小說）…………………………一〇五……加藤みどり

戀愛の進化…………（論文）………………………一二六……エレン、ケイ　らいてう譯

藝術座の初演を見て……………………………………一三四……木　兎　女

編輯室より…………………………………………………一三六……同　　　人

寄贈書籍及雜誌……………………………………………………………

靑鞜社規則と靑鞜社補助團規約……………………………………………

イワノフ（四幕劇）――チエホフ作

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

イワノフ（四幕物）——チエホフ作

第三幕

イワノフの書齋。机の上には書類や、書物や、公文の狀袋や、其他細々したるものや、連發銃やら順序もなく、たゞ雜然と置いてある。書類の傍には洋燈や、水入があつて、又其處らにウオツカの壜や、鯡を入れた皿や、パンの喰り缺片や、胡瓜などがある。壁には地圖や、額面や、鐵砲や、拳銃や、鎌や、カザツクの馬の鞭や、其他が掛かつてゐる。時は正午。

第一齣

シヤベリスキイ伯。レベデフ。ボルキン。ペートル。

シヤベリスキイ伯とレベデフは机の兩側に並んで、ボルキンは舞臺の眞中に、椅子の上に馬乘りに跨がつてゐる。ペートルは戶の傍に立つてゐる。

レベデフ。佛蘭西の政治は至つて判然したものだ。いつでも一定してゐる……彼等は自分の欲するところを知つて居るのだ。詰り彼等は獨乙人を窘しめりやいゝんさ、其れ切りなものだ、だが、獨乙の方ではまた全然別な方針よ、彼等にや佛蘭西以外にまだ〳〵澤山眼の上の瘤があると云ふものだ……

シヤベリスキイ伯。那樣ことがあるものか！……俺の考ぢや、獨乙人も臆病なら、又佛蘭西人も臆病さ……お互に隱の中で、豆（譯者註指にて豆を見せるのは相手を輕蔑するの意。）を見せるばかりで、喧嘩は遣り得ないのさ。

ボルキン。いや、僕に云はせると、まあ全體何の爲の喧嘩だね？ 何の、軍備でござれ、萬國會議でござれ、軍事費でござれのと、えゝ？ 僕なら其の換りに奈何すると思ふかね？ 聞き給へ、僕なら恁うだ、まづさ、國中の犬を驅り集めて、處でいゝかね、其犬共に皆狂犬の毒をうんと植へるのさ、さうして置いて、其犬どもを敵國に追つ放すのさ、奈何だね、そら其の爲に敵の奴等は皆恐水病に罹つて了ふんだらう。

レベデフ。（笑ふ。）見るところ、頭はどうも小さいが、素晴しい計畫が其中に藏はれてゐるものだねえ、億萬の計畫が、まるで大洋の魚類の如しだ。

シヤベリスキイ伯。巧いなあ、全くだ！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

レベデフ。あゝ笑はせるよ君は、ミシエル●ミシエルキチ！（笑ふのを止めて。）いや、奈何だね諸君、たゞもうヂヨミニ（譯者註。スタニユコーキチの「海上生活」と云ふ作中にある酒飲の人の名がヂヨミニと云ふのである。）ヂヨミニと云つてる計りで、ウオツカのことは全で忘れられたぢやないか、Repetatur！（譯者註。遣り直さうの意。）三つの杯にウオツカを注ぐ。）さあ、健康を祈ります……（飲んで食べる。）鯡はどうも酒の肴には持つて來いだね。

シヤベリスキイ伯。いや胡瓜の方が遙に勝つてるなあ……まあ世界開けて以來、甚麼に學者達がさまぐ\なことを考へても、この一つの鹽漬の胡瓜にまさつたものは考へ得なかつたらう。（ペートルに。）おい些と來な、あのなあ、もう少し漬けた胡瓜を持つて來な、それからな、あの臺所へ行つて云ひ付けてくれ、葱入の饅頭を四つ揚げるやうにな、さうして熱いところを早くだ。

（ペートルは退場。）

レベデフ。それからね、ウオツカには河鮫の鮞が美味いよ、たゞそれにや料理の遣方が大にあるんだ。まづねえ、其鮞を四半斤取つて、それに葱の青い奴を二つ、それから其れに橄欖油を少したらして、よく混合せる、あゝそりや素敵だよ……さうしてそれに又少しレモン水を落したら……おゝ、そりや實にどうも、結構だねえ！其匂と來たら、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あつ、もう息が詰る。

ボルキン。それからねえ、ウオツカの後に最も可いのは、黄顙魚のフライさ。だがこれも矢張大にその遣方があるんだて。ようく、まあ洗つてだね、それからパン粉に包んで、から〳〵になるまで鍋で燒くのよ、歯で嚙むと、そりやもう、はり、はり、はりつてね………

シヤベリスキイ伯。いや、昨日のバヾキナの所の酒の肴は美味かつたねえ、菌料理さ。

レベデフ。ざうだつたらう。

シヤベリスキイ伯。特別製の料理なのでね、葱にさ、桂の葉を入れてね、それにまたいろ〳〵の味を加減してな、其鍋の蓋を開けた時と云つたら、ふうと蒸氣が立つかと思ふと、ぷーんと可い匂がしてなあ、それこそ何んとも言ひやうがなかつたね！

レベデフ。奈何だね？ Repetature 諸君！（飲む。）健康を祈ります………（時計を見る。）大方この分ぢやもうニコラーシヤには會はれまい、もう僕は出掛る時だ。さう云へば君の話ぢやバヾキナの所で菌料理の御馳走になつたとかだが、此の邊ぢやまだ菌は出ないねえ、そりや左に右、君はまた奈何云ふ譯なのかい、此の節さうちよく〳〵マルフートカの所へ出掛けると云ふのは？

シヤベリスキイ伯。（顋でボルキンを指して。）この人が俺に彼女を世話をしやうと言ふのさ……

レベデフ。嫁にかい？　君は何歳だね？

シヤベリスキイ伯。六十二歳。

レベデフ。ほう、最も適當な年輩だマルフートカとは、誠に好一對だね。

ボルキン。いや、マルフートカ其物は何れでもいゝのですさ、たゞそのマルフートカの財産が、これがその第一の目的なんです。

レベデフ。さう云ふことを望んでゐたのか、マルフーシヤの財産をね……まあ、雁のお茶でも召上れだ。

ボルキン。よし、よし、まあ見給へ、首尾よく結婚をして懐がうんと煖つたら其時こそは、甚麼雁のお茶でもござれ、飲んで見せるだらう、指を銜へんやうに用心爲給へ……

シヤベリスキイ伯。だが此の人はそれを眞面目で遣つてゐるのかね、俺が此の人の云ふことを聞いて結婚をすると信じてゐるのかい……

ボルキン。ぢや奈何たつてえのです、ぢや何ですか、君はまだ極つたとは思はんのかね？

シヤベリスキイ伯。さあ、こりやちつと氣でも振れたかな……何時俺がもうそんなことを極めたと云ふのかい？　いや、はや、飛んでもないわ！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ボルキン。そりや大きに有難う……大きに有難う樣だ！ ぢや君は僕に脊負投げを喰れたんですな？ そら、結婚をするのだ、それ止めるのだと……譯が解りやしないなあ、ねえ僕はもうちやんと先方へ間違ひのないことを誓ひましたんですぜ！ それでも今更貴君は結婚をしないと云ふんですか？

シャベリスキイ伯。（肩を縮める。） 冗談ぢやない……呆れた人間だ！

ボルキン。（躍起となつて。）這麽場合に何んだつて正直な婦人を誑すのですか、彼女はもう伯爵の位で夢中になつて、寢るのも、食ふのも忘れてゐます……奈何してこれが冗端ごとですか？ こりや正直なことぢやないでせう？

シャベリスキイ伯。（指をピチリと彈く。） さあ？ では一番この馬鹿を遣つて見やうか、えゝ故意とさ！ 遣つて見やうか、全くよ、誓つてだ……いや、面白いことがおつ始まるだらうよ！

（リヽチフ登場。）

第二齣

レベデフ。いよう、エスクラプ先生、今日は……（リヽチフに握手して歌ふ。）『救へよドクトル、死ぬのは死ぬほど恐ろしい……』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

リヲフ。ニコライ・アレキセエヰチはまだお歸りにならんのですか？

レベデフ、未だ、僕もゝう彼を一時間以上も待つてゐるのですがね。

（リヲフは我慢が出來ないといふやうな歩調で舞臺を歩く。）

レベデフ。時に君、アンナ・ペトロウナの工合は奈何ですかい？

リヲフ。可くないです。

レベデフ。（溜息をして。）些と俺もお見舞して來ても可いですかなあ？

リヲフ。いや、お出にならん方が可いでせう、今、多分眠つてゐられるやうですから……（間。）

レベデフ。誠に惡氣のない、氣立の優しい……（溜息をする。）あのシユーロチカの丁度誕生日の晩、彼の女が俺の所で氣絶して倒れた時、俺はその顔を見て、あゝ可哀さうに、もうどうも長くは生きられないなと思つたのだ、だが全體奈何したことなのか、何か彼の女に惡いことでもあつたのか、譯が解らん。あの時は、それ、と云つて俺も駈着けて見たが、彼の女はもう眞青になつて、床に倒れてゐる、其側にニコラーシヤは床に跪坐いたまゝで、これも色を無くしてゐるし、シユーロチカはまるで涙ぐんでゐると云ふ始末さ、其れからもう一週間ばかりといふものは、俺もシユーロチカも、何だか全く放心して了つたものゝやうな風でゐたよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

シヤベリスキイ伯。（リチフに。）あゝ若し大先生、俺は一つ先生に御質問致したいのですが、な、この婦人の胸の病氣には、其の、若い醫者樣が、何でも屢々來るのが藥であるとは、そりや全體甚麽學者の發明ですかね？　こりやどうも大發明だ！　如何にも大發明だ！　さうしてこれは何れに屬してゐるのかね、對症療法（アルロパチー）とやら、或は同種療法（ホメオパチー）とやら？

（リチフは挨拶をしやうとしたが、急にさも〳〵輕蔑するやうな態度で退場した。）

シヤベリスキイ伯。あのまあ輕蔑の眼付と云つたら奈何だらう……

レベデフ。君の舌は鬼でも引いてゐると見えるよ！　何んだつて君はまた彼を那樣に辱しめるのだ？

シヤベリスキイ伯。（躍起となつて。）ぢや何で彼は噓を言ふのか？　やれ肺病だ、やれ望がない、やれ死んで了ふ……這麽噓を云ふぢやないか！　俺は那樣ことは大嫌だわ！

レベデフ。何故又君は彼が噓を云ふと思ふのか？

シヤベリスキイ伯。（立つて歩く。）俺はまた今日人間が、さう急に、何の譯もなくつて死ぬなんてことは。到底信じられんものな、えゝもう這麽話は止しにしやう！

第三齣

コスイフ。（息をはづませて駈入つて來る。）あ、ニコライ・アレクセエキチはお出ですか？　今日

は！（急いで皆と握手する。）家ですか？

ボルキン。いや留守です。

コスイフ。（椅子に掛る。また直ぐ立上る。）そんなら左様なら！（手早くウオツカを一杯引掛けて酒の肴を頬張る。）どれ他へ行かう……用があつて忙しいんで……酷い目に遇つちやつた……やうやく倒れずに恁うして立つてゐるんで……

レベデフ。何處から風が此處へ吹着けたのだね？

コスイフ。バラバーノフの處から。昨夜はもう一晩中骨牌を遣り通して、やうやく今濟んだ所なんです……いや、すつかり負けつちやつた……あの又、バラバーノフと云つたら全で靴屋だ、其拙さ加減は！まあ聞いて下さい、僕は始終ハートを持つてゐたんですね……（彼は其側から飛上つて離れた所のボルキンの方を向いて。）彼はダイヤで行くんでせう、すると僕は矢張ハートで行く……彼は又ダイヤで行く……さうして取込み無しで。（レベデフに。）所で四のクラブの札が出た。僕の所にや一と、お供附きの女王と、それから一と、スペートの三枚札で十と、……

レベデフ。（耳を塞ぐ。）降參だ、降參だ、もう止めておくんなさい！

コスイフ。（伯爵に。）ねえ貴君、一と、お供附きの女王と、クラブの一と、スペートが三枚

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

で十……

シャベリスキイ伯。（手で突退けて。）もう聞きたくないよ、歸らつしやい、え、さつさと！

コスイフ。所が俄に災難よ、スペートの一がまづ第一に打たれた……

シャベリスキイ伯。（机の上から連發拳銃を取つて。）さあ、お出なさい、出なきあ打ちますぞ！…

コスイフ。何の譯なのだ……奈何云ふ譯で誰にも話が出來ないんだ、濠太利亞にでも住んでゐるやうに、一般の利害關係もなけりや一致共同といふこともない……皆各々がてん〲ばら〲だ……さあ、歸らう……もう時だ。（庇帽を取つて。）時は貴重だ……

……（レベデフに手を出す。）なしだ！……

（コスイフは出て行つたが、戸の所でアウドーチャ・ナザーロウナに突當つた。）

アウドーチャ・ナザーロウナ。（叫ぶ。）えい、このおつちよこちよい、人をまあ突飛したよ！

皆。そら、そら、在らざる所なきものゝお出だ……

アウドーチャ・ナザーロウナ。おや皆様此處でしたか、私はまた家中を彼方、此方探しましたよ。今日は、皆様、まあよろしう召上れ……（挨拶する。）

レベデフ。何御用でね？

アウドーチャ・ナザーロウナ。旦那少々要事でね！（伯爵に。）伯爵閣下、其の要事と云ふのは

實は貴方にねえ少々。(頭を下る。) 宜しくと有仰いましたよ、さうして御機嫌を伺ふやうにつてね……それからまだお言付けが御座いますのさ、若し貴君樣が今晩お越しになられませんならば、あのお方はもう眼を泣潰して了うだらうと仰つてゝ御座います、さうしてね、可成人の居ない所で內證でお耳に入れて呉れと云ふお賴みなのでしたが、だつてねえ貴方樣、何んにも內證になんぞ致すことは御座いませんわねえ? 皆もう此處ぢや家々の者も同樣なのですもの、何も鷄でも盜むのぢやあるまいしねえ、お芽出たいことなのですから、立派に表向きの、其上に本統の愛とお互の承諾で取極つたことではありませんかですからね、そら私なんぞも平生は御存じの通り、ぽつちりとも頂かないんですが、恁云ふ貴方場合にはもう場合が場合ですから、是非一杯頂戴致しますよ!

レベデフ。俺も飮まう。(注ぐ。) なあ、古いお婆さん、變りはないかね、俺が三十の時にあんたはもうお婆さんだつたつけがなあ……

アウドーチヤ・ナザーロウナ。えゝ〳〵、ですからねえ、此の節ぢやもう自分の拾ふ年の數も何だか無茶苦茶になつて了ひましたのさ。二人目の亭主もゝう片附けて、三番目の亭主でも持てば持てるが、でも貴方誰もゝう持參金なしぢや貰つてくれてがありませんや それに八人の子供と來てゐるのですからね……(杯を取る) どうぞ神樣のお名によりて、

この我々の始めかけましたことの、滞りなく成就せんことを！ さうしてこのお二人の睦しいお生活を見て、我々は甚麽によろこびませう、どうぞ末長くお互に愛し愛されまするやうに………(飲む。) おやこれは强いウオッカだ。

シヤベリスキイ伯。(大笑をしてレベデフに。) ねえ君、全く滑稽極るぢやないか、皆で眞面目になつて俺がやつてゐると思ひ込んでゐる所がさ………驚たねえ！ (立上る。) 然し實際一つ遣つて見やうかねえ、この馬鹿げたことを、なあバーシヤ？ 故意とさ………さうださあ、この老ぼれ犬、食へ！ なあ、あ、バーシヤ？

レベデフ。下らんことを云ふものぢやないよ、えゝ、君や我々はもう今は死ぬことを第一に考へなけりやならん、マルフーシヤだの、財產だのと云ふ那樣騷は、もう疾うに側を通り過ぎて了つたのよ、もう我々の時代は過ぎたんだよ。

シヤベリスキイ伯。いや、俺は遣つて見やうよ、全く誓つて遣つて見やう！

(イワノフさリヲフ登場)

第四齣

リヲフ。僕に是非どうか僅五分間でも構はんですから、割いて頂きたいですがな。

レベデフ。や、ニコラーシヤ！ (立つて彼の側に行き、彼を接吻する。) いや、御機嫌よう………俺

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は君をもう一時間も待ち通したよ。

アウドーチヤ・ナザーロウナ。(頭を下げて挨拶をする)旦那樣今日は！

イワノフ。(苦り切つて。)諸君又僕の書齋で酒店を開きましたな！　あゝ、僕はもう百度も皆にさうして呉れんやうに賴んでゐるぢやありませんか………(机の側に行く。)そら、書類にウオツカを打掛けた……食殘け……胡瓜………厭になつちまうなあ！

レベデフ。許して下さい、惡るかつた、ニコラーシヤ、惡いことをしたねえ………許しておくんなさい。所で、俺は友達として一つ要件をとつくりと聽いて貰ひたいんだがね…

ボルキン。僕も矢張。

リヲフ。ニコライ・アレクセエヰチ、僕も少し要事が君にあるのですが？

イワノフ。(レベデフを指して)此の人も丁度要事があると言ふんですから、貴方はどうぞ暫くお待ち下さい、後程まで………(レベデフに。)何の要事です？

レベデフ。諸君、俺は少し內々で相談をしたいのだが、どうぞ相濟まんがねえ………

(伯爵はアウドーチヤ、ナザーロウナと、その後からボルキン、次いでリヲフと皆退場。)

イワノフ。パーシヤ、貴君は幾らでも自分で飲むのは構はんがね、そりやもう貴君の病氣なのだから據ない、が、たゞどうか叔父にや勸めないで下さい、彼は前には決して酒は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遣らんかつたのだから、毒なのです。

レベデフ。（驚いて。）さうかい。俺は知らんかつたよ………俺は些とも氣が着かんかつた……

イワノフ。飛んだことなんです、それこそあの年寄小供は直ぐ死んで了ひます、貴君にや別に奈何でもないことですが、そりや僕にとつちや困るんだから……で、其の要事と云ふのは？（間。）

レベデフ。さうさ、だがねえ………何だかどうも言出し惡くゝつてなあ、誠に恥しい次第なのでね………ニコラーシャ、俺は赤面の至りだ、舌が固つて動かん、君察しておくれまあ、俺の位置をね、この俺といふ人間は全く其縛られた奴隷なんだよ、やくざな雑巾だ………許して下さい俺をな………

イワノフ。何のことですか？

レベデフ。妻の奴が俺を寄越したのさ………なあ、どうぞ友達と思つて許して下さい、錢を、その利子をなあ、彼奴に拂つて了つてくれ！　すつた、もんだで俺はもう喲られたり、踏蹴られたり、いや、もう、散々な目に遇はせられたのさ、何卒まあ君、彼奴の手から、ちつとも早くさつぱりとなつて下さい！………

イワノフ。パーシャ、知ての通り、僕の所にや今金が些ともないんだが。

レベデフ。知つてるよ、知つてるよ、だが奈何すればよからうなあ？　彼奴は待つことは出來んと云ふんだし、若し裁判沙汰にでもなると、第一俺や、シユーロチカが、君に合せる顔がないからな。

イワノフ。僕こそ何ともお恥しくつて、土の中へでも入りたいやうな次第ですが、然し……然し何處から錢を取らうか？　何か貴方にお考へでもあつたら敎へて下さい、何處から取つたものでせう？　たゞ一つ僅に望と云へば望のやうなのは、それも秋まで待つて頂かんければならないのですが、秋になつてから小麥を賣つて了はうと思ふのですが。

レベデフ。(叫ぶ。)彼女は待たれんと云ふのだ！　(間。)

イワノフ。貴君の位置も酷からうが、僕の位置は猶更酷いです。(歩みながら考へる。)何にも可い思案は浮ばん……賣るものすら一物もなしだ……

レベデフ。ミリバフの所へでも行つて訊いて見ちやどうだらう、彼の男はたしかお前さんに一萬六千圓も借金があるのぢやないか。

(イワノフは望のないやうに手を振る。)

レベデフ。それぢやねニコラーシヤ……だが君は惡くはとらんと思ふが奈何だらう……この年寄の醉漢にまあ恁云ふ道樂をさしてはくれまいかね！　友達として……なあ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

俺を友達として見ておくんなさい、え、いゝか……大學時代にはそら、俺もお前さんも同じ自由主義……理想も、趣味も、皆同一だ……然もモスクワ大學の二人とも出身だ……Alma mater（譯者註母校の意）（紙入を取出す。）俺の所にね、これはその極く大切にして置いた、秘密の、誰一人家でも知らない金なのだが、これをまあ取つて置くがいゝよ……（金を財布から取出して机の上に置く。）外見なんざあ決して張らんが可い、友達と思つてなあ……若し俺がお前さんだつたら、俺は直にこの金を取るよ、本統だ……（間。）さあ、机の上にあるから千百圓、さうしてねえ、君は今日直ぐに彼女の所に行つて、皆きれいに手渡して下さい、それ返すぞジナイダ・サキシナ！ つてね、だが待ちなさい、其の俺から金を借りたとは、決して決して云はんでおくれ、樣子にも見せちや困るよ、え、いゝかな！ でないと、それこそ、この俺が又あの總具利のジャム奴から、甚麼目に遇はされるか知れたもんぢやない。（イヷノフの顏付を凝と見て。）さうかい、さうかい、それぢや止すよ！（机の上からまご〱と金を懐に入れる。）止さうよ！……なに俺はたゞ冗談に爲て見たのさ……勘辨して下さい、ねえ何卒な！氣を惡くしたかね？

（イヷノフ手を振る）

レベヂフ。さうさなあ……（重い息をする。）君に取つちや今は隨分苦痛な悲慘な時だよ、人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

間と云ふものは、まあ、サモワルのやうなものさ、何時でも冷たい棚の上に立てられてばかりはゐられない、時には火を其中に入れられることもあるんだ、チイ……チイ！てねえ、いや餘り感心しない比較やうだつたねえ、だがもうこれより外にや俺の智慧嚢を絞つても、巧い譬は出て來んわ………(溜息を吐く。)だが、不幸はまた、よくその人間を固めるものでな、だから俺はニコラーシヤ、お前さんをさう氣の毒とも思はんのさ、何時かは君だつて其不幸から切り拔けられると思ふからね。臼に碾かれて粉が出來ると云ふのは其處だて。然し周圍の奴等こそ、考へれば哀れな奴等だ、殘念な奴等ぢやないか………だが、奈何して、何處から這麼下らん嘘八百の風説が立つのだらう、甚麼に此の郡內では君のことを、種々な風説を立てゝゐると思ふ。まるで檢事でも取調べに來なければならんやうな騷だらうぢやあないか………君をそれ人殺しの、やれ生血取の、盜人のと云つてゐるのだ………

イワノフ。なに、那樣ことは僕にや何でもありません、だが、あゝ頭が痛んでどうも……

レベデフ。矢張りいろ／＼なことを考へ過ぎる爲だらう。

イワノフ。いや別に何も考へやしません。

レベデフ。さうだ、ニコラーシヤ、君は那樣ことをくよ／＼思はんで、人の風説なんかに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

や嘘でもしてゐればいゝんだ、さうして俺の家へ話しに來るがいゝよ、シューロチカはお前さんを愛してもゐるし、よく解つてもゐるし、又ね君の人格をも重じてゐるよ。彼女は誠に正直な、善良な人間だ所謂その、母に似ず、父に似ず、通り掛りの偉い人に些と似たと云ふ奴だ。時によると全くさう思ふね、這麼鼻の先の眠れた飲助に、這麼寶娘が本統にあるのだらうかとね、まあ、出掛るさ、彼女の許へ來給へ、さうして面白い話でもしたらいゝだらう、さうすれば屹度氣分も引立つだらう、彼女は本統に賢い、誠のある人間だよ……

イワノフ。バーシャ、どうぞ君もう僕を一人にして下さい………

レベデフ。解るよ、解るよ……（まごまごしながら時計を見る。）俺は解るさ。（イワノフを接吻する。）左様なら、俺はまだこれから學校の成擧式に行かなければならんのだ。（戸の處に行つて猶立停りながら）利口な奴よ……昨日さ、俺はシューロチカとこの嘘八百の風説について話をしたのさ。（笑ふ。）さうして彼女は奈何だらう、教訓を云出したよ『お父様、螢の夜に光るのは、たゞ夜の鳥に容易く見付けられて、食はれる爲にあゝして光るやうなものですねえ、さうして可い人間も、詐と、口に戸がたてられないお喋りの世間の人に食物にされる爲に、矢張丁度光つてゐるのですねえ。』だつてさ、奈何だらう？　偉大な天才ぢや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ないか！ ジョルヂザント！……
イワノフ。パーシャ！（彼を引止めて。）全體僕は奈何したのでせうな、近頃は？
レベデフ。俺は自分でもそのことを君に聞かうと思つたのだが、實は遠慮をしてゐたのさ、どうも解らないよ、一方から見ると君は種々の不幸に負かされたかのやうでもあるし、又一方から云ふと君は那樣人間ではないと知つてゐるが……無論不幸は君を負かすなんてことは出來んと知つてるが、然し何だかさうだなあ、ニコラーシャ、それとも又違ふやうな、いや何だかどうも解らんなあ！
イワノフ。僕は自分でも解らない、或は多分……いや本統はさうぢやない！（間。）ねえ、先にあのそら僕の所にゐた、貴方も知つてるセミョンと云ふ下男ですがね、丁度麥打の頃に女達の前で自分の力を自慢して、背中に麥の袋を二俵擔いだのです、すると、それで此の男はとう〳〵脫腸して了つたんでせう、さうして間もなく死んで了ひましたが、ね、思ふさ、僕も丁度這麼風に自分の精力を脫腸して了つたやうなものです。中學から大學に、それから農業や、學校經營、其他種々の計畫……他人のするやうには何事もすべて爲なかつたのです、宗敎上の事でも、妻を娶るのでも人のやうにはしないし、物に酷く熱中し過ぎたり、冒險なことをしたり、錢は、貴方の知つてる通り、左から右へ

撒散して、まあ僕のやうに這麼幸福であつたものも、這麼煩悶をしたものも、まづ此の郡内では僕を措いて他には無いでせう。これらはバーシャ皆僕にや俵でした……背中に皆持上げはしたもの丶、プキリと云つて背骨が折れたのです。僕のやうなものは二十代でもう豪傑になり、何でも始める、何でも遣る。さうして三十代になつて、もうばつたりと疲れて了つて、何にも役に立たなくなる。此の疲れをですなあ、この疲を貴方は奈何解られますか？　いや、ひよつとしたら、或はこれはさうぢやない……さうぢやない、さうぢやない！……さあ、もうお歸りなさいバーシャ、君にも僕はもう厭になつたらう。

レベデフ。（元氣よく。）解るかね君？　こりや周圍が皆お前さんを食つて了つたんだらう！

イワノフ。馬鹿らしいバーシャ、そりや舊い言草だ、まあ行き給へ！

レベデフ。いやさう言やあ全く馬鹿らしいさね、自分でもさう氣が着いた、いや、どれ行かう行かう！（退場）

瀬沼夏葉譯

灯をば細めて

——岡本かの——

今宵もまた病める女のかたはらにおとなしふ寝にかへりたまひぬ

我がまこと足らざるかはた汝がまこと足らざるかこの戀のはかなさ

いざせめて思ふ男と十年ほど添ふ我を見て逝きもせば亡母

亡き母を憶ひ泣くのみ君置きて誰をばしのぶ我にかあらん

君戀ふる心のかげに亡母憶ふ稚き情つねにひそめる

すべて身も心も投げてすがらんと願へども救ふものゝ來らず

我が許へまことふたたびかへり來し君かやすこし面變せる

この淋しき人の世を行く道づれとなりてたまへや戀ならずとも

何事を君おもへるやかたはらに默して我は虫の音を聞く

うれしさかかなしさかはた知らねどもつとより添ひてさしぐみにけり

つととりし手のつめたさよ再會の秋の夕の風うらがなし

我が窓に夕秋風の訪ひ來れば遠き旅宿にあるごとさびし

枕邊に近き虫の音止みもせん灯をば細めて低く語らん

さしなれしつげの小櫛も前髪に冷たさ泌みて
秋深みけり

我がためになげき呉るゝもふたつみつあるら
んしげき虫のもろごゑ

かすかなるひびきをたてて秋の夜の欄干をす
べる細き金簪

我が袖の菊のもやうの濕るまで汝が涙をば拭
ひけるかな

絶えてはまたはてなく續く秋の夜のこほろぎ
の音と汝がすすりなき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夕靄の中の街の灯

——柴田かよ——

君はまた
もだしたまへり如何せむ
しよう事もなく袖をまさぐる

コスモスに
光るあしたの露の色
家の手入れもわびしやな、秋

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小氣味よく
瓦斯が火をよぶ、朝からの
重き心もとみに消えたり

夕風が
葭の葉裏に音たてて
辷れり、水に白はへのとぶ

こつこつと
馬がませ木を蹴る音も
虫啼く頃となれば哀しき

新らしき
疊の上にちらばれる

ぬけ毛もわびし秋の雨ふる

湯あがりの
かろき心に夕がほの
はな見てあれば思ふことなし

まへがみの
少しゆるきを氣にしつつ
灯すころに紫蘇の實をつむ

灰まみれの
虫が火鉢の黒柿の
ふちを這ひ居り、身に泌む夜風

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

逢ひにゆく
森の細みち萩を吹く
さら／＼風の輕しなつかし

なめらかに
辷る指さきおしろいを
淡くつけたる湯上りの肌

やはらかく
白粉の香がただよへる
蚊帳にも秋は唇づけに來し

すさみゆく
心かなしくみつめたる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文鳥の眸の人なつつこさ

石がきの
石のはざまに紅く咲く
松葉牡丹に忍びよる秋

夜にいれば
机をならべむつましく
水菓子などを喰みつ物よむ

かにかくに
蚊帳はなつかし寝みだれの
うら羞かしき心を包めば

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やはらかき
秋の日ざしが鏡臺の
水白粉の壜に流るる

冷え冷えと
素足の指に縺れよる
秋が誘へるちいさき憂

夕靄の
街の灯のなつかしく
小犬をつれて歩きまはれる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

旅の歌 ——岩淵百合——

夜汽車

夜の十時三人四人におくられて旅立つこころ
悲しかりけり

灯にわかれ君に別れてかなしくも烏羽玉の夜
をわが汽車はゆく

陸奥へ旅するこころ彼の遠きシベリヤの野を
想はするかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

おほかたは眠れる夜の停車場の驛夫の聲のあはれなるかな

停車場の灯のみが赤しわが汽車は暗よりやみを北へ走れる

ハーモニカ吹く少年と只二人起きてありけり物想ふ子は

少年は節面白くハーモニカ吹きて愁をなくさめにけり

旅なればかくもかなしく想へるやかのともし火もこのハーモニカも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せまりくる旅の愁にただ君を想ひてありぬさ
すらひの子は

世馴れたる香具師の息子がくちずさむ小唄に
さへも涙さそはる

ある青年に

あきたらぬ「時」を悲しと想ひけり夜明けのいろ
の福島の驛

いちはやく列車をいでしわが友のこゝろ姿を
かなしみにけり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みちのくの夜明のいろに惨ませしわがかなし
みとさいさゝかの雨
いそがしく人に交りて君ゆきし福島の驛かな
しかりけり

馬追の兒と海と

ポプラの葉ややにゆらけば川の水少し波立つ
みちをゆくかな
いちはやく秋のあはれを知りにけり君に背き
てさすらへる子は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

馬追の子よ少年よ汝もまたかのうすべにの花を好むや

一握の砂のぬくもり犇々と旅のあはれを想はするかな

捨てられし女のごとく只一人知らぬ海邊に戀をかなしむ

鷗さへのがれし濱をさまよひて涙なかせばくれ方となる

狂ほしく戀をかなしみこの海を捨てゝ去りたる白き鷗よ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

浪に浮く戀の鷗の亡骸を想ふ夕はかなしかり
けり

砂の上に悲しき歌をわれかきぬ旅のこころを
慰むるため

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

響の影 ―マツコアー―

翌朝

昨夜われは「アヴー」の曲を聞きぬ。われは傍に人の姿見んことを恐れてわが眼を開くことを敢てせざりき。軈てわれは夢見ぬ。春の夜なり。園の草葉には露宿りぬ。月光靜かに蒼白し。遙かに激しき悲しみに耐へざるが如く歔欷せる女の聲聞えぬ。そは流るるが如き鶯(ナイチンゲール)の鳴音に打交りて夜の空氣に顫へぬ。若き灌木の芽には溌溂として生命鼓動しぬ。わが心も共々波うちぬ。草木の群はかの悲しめる女より生命の乳を吸へるがごとし。彼女の聲は次第に衰へゆきぬ。その時月光は更らに物凄く輝き渡りぬ。若嫩(わかば)は新らしき力を得てその頭を擡たげぬ………曲(メロデーイ)はいつしか止みぬ。かくしてわれは目醒めぬ。

　終日われは窓に倚りて外面を打眺めぬ。風少しく高し。空は陰欝に曇りぬ。折々短かく太き木々の風に搖めくがみえぬ遙かに遠く黑き白楊(ポプラ)の群はわが方に向ひて頻りにうなづきぬ。今日は珍らしき響あり。そは地上を吹き拂ふ風の音にして木々はその鋭く冷やかなる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を呻き悲しみぬ。

今し一羽の鳥窓硝子に飛び來り、したたか其の翼を打ちぬ。われは窓の戶を開きてわが室に迎ひ入れんとしぬ。されど戶外より堅く鎖されたれば容易くは開かれず。かの哀れなる鳥は間もなく地上に落ち行きぬ——恐らくそのまま死したるならん。

黃昏なり。柔かき綿雪頻りにわが窓をうちぬ。かの地上の鳥の死骸にも白きものかかれるなるべし。

またしても、樂（ミユージツク）、樂樂。

外面は全て白色をもて蓋はれぬ。

われは地上に巨なる女の姿を見ぬ。數哩に亘りてその四肢を延ばし仰向に橫たはりぬ、彼女の足わが方に向ひぬ。眞白なる衣その體を包みぬ。巨大なる胸の曲線は日の光りに照りはえて純白なる美の極致を顯しぬ。われは彼女の面を見ること能はざれどその瞳はわが方を瞶めつつわれを招けるを知る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昨夜われ床上に横たはれる時わが樂の音遽かに止みぬ。靜寂の氣あたりを領しぬ。かの白き姿わが傍にあり。その時われは數哩かなたより彼女の聲をききぬ。彼の女はわれに向ひて語りつつあり。

「卿は樂の島さして旅しつつあり。水暗黑にして深ければわれ卿を導かむ、卿かの島に達するの時太陽は初めて卿の爲めに輝やかん」

「窓に居倚りて卿の前に顯はるる人生の活畫を靜かに眺め給へ。書に供なひて必ず樂の音を聞き給ふべし。世界は卿の前に展かるべし。」

かくして其の聲は何處ともなく消え去りぬ。

われは再び全身雪に蓋はれつつ輝やける女の姿を見ぬ、われは時の過ぎ行くをも知らで窓に倚りてなにものをか待ちぬ。

…………………………

全てかかる事は何を意味するにや? われは語る能はず、されど聽てわれは全てを知ることを得ん。かの聲はわれの樂の島に辿りゆきつつありと告げたるにあらずや? 然なり、やがて、やがて、太陽は吾爲めに輝かん。

*　*　*　*　*　*　*

野は一面に人の姿もて被はれぬ、空中に微妙なる樂の音きこえぬ。

中央に一個の塔立てり。其の高さ幾許なるやを知らず、高く高く雲のあなたに聳えぬ。雲に蓋はれたるあたりは暗黑に包まれて定かに見分けがたし。

白き姿われに觸れぬ。われ等は忽然として野に下りぬ。

群集の騷擾と喧囂はその極に達しぬ。わが聞きたる樂の又もや亂れ噪ぎぬ。人々は彼處此處に呻きつつ押し合ひぬ。或者は倒れぬ。群集は多數にして相互に爭ふことすらもなし得ざりき。

されど塔の周圍は廣き明地（スペース）ありて未だ何人も其處に至らず。否、至ることは能はざりしならん。

われ等の過ぎ行く時群集はわが前に融けゆくがごとく思はれぬ。かくしてわれ等の行く處には必ず一條の道ひらかゝぬ。軈てわれ等は明地（スーペス）に來りぬ。群集のざよめきは次第に微かになりゆきぬ。われ等は遂に塔の直下に立ちぬ。白き姿は遙かに塔上の方を指さしぬ。われ等は共に昇り初めぬ。

われ等の昇れる時、著しき曲節（メロディー）はわが耳に響き來りぬ。——明らかにして純潔なり。われ等は次第に高く攀昇りぬ。曲節も同時に高まりぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今しわれは振返りて塔下を見下ろしぬ。朦ろげながら人々の群、小虫の蠢蠕たるがごとくわが眼に映じぬ。

われ等は尚も高く高く昇りて雲の上に出でぬ。われを廻る光は眩ゆく曲節は高く朗らかに響き渡りぬ。

われは塔の頂上に渾身の力を振ひて努力せる建築者の姿を認めぬ、渠が双眸は神秘しき光に輝きぬ。渠は程なく渠の事業の最後の王冠を塔上に冠らしぬ。その時樂の音は愈々澄み渡りて一層强く高く響きぬ。

時しもあれ、渠の全身はわななきあなやと見る間もあらせず跟蹌めきながら遙かなる塔上より倒懸に落下しぬ。白き姿われを導きぬ。

われ等は急轉直下の勢を以て地上に降りぬ。樂の音何處ともなく消え失せぬ。かくてわれ等は廣き明地を過ぎて野に出でぬ。其處には彼の群集あり。

今や暫時何處にか飛散して、人々は塔の頂きを仰ぐことを得ぬ。頂きは眩ゆきばかり光り輝きぬ。人々は手の舞ひ足の踏む處を知らず。歡聲しかすがにあたりの空氣を震ひ動かしぬ。實にかの建築者の事業は驚くべき美を發現しぬ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人々の耳に響き來りぬ。そは遙かかなたより來る叫喚のごとく響きぬ。

その時雲は再び塔を包みぬ。騷擾と喧囂とは依然として續きぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

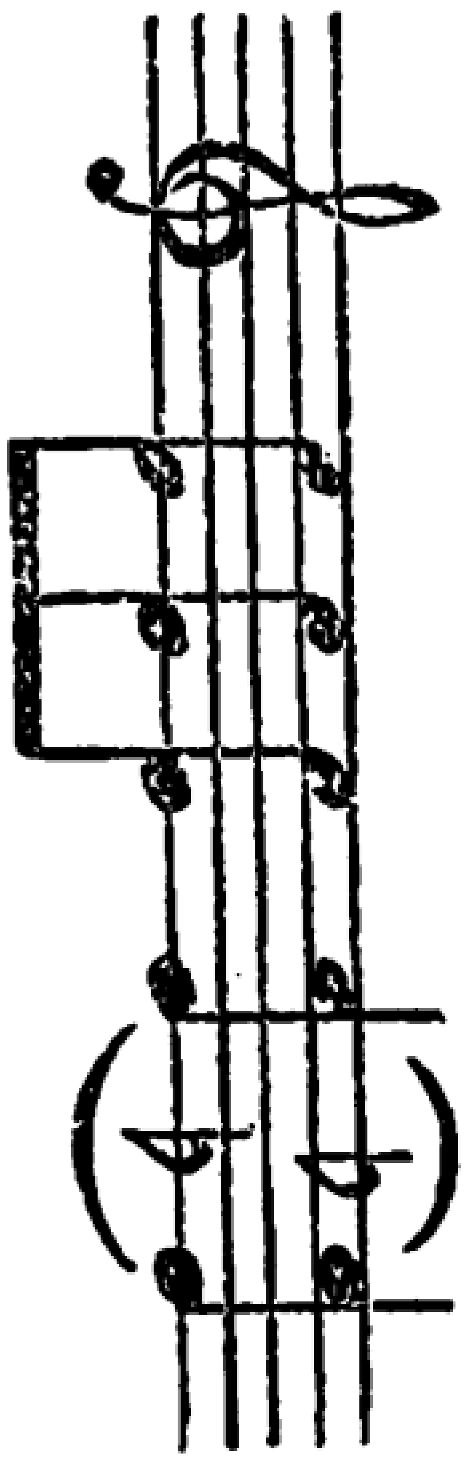
空はいつしか消え去りて彼處此處に白き斑點を止めぬ。

附添ひは又もやわが室に來りぬ。渠はわが見ることを得る唯一人の人なり。渠はわれの求めし鏡をば持ち來らず。われは怒に耐へずして若しこの次に持ち來らずは渠の命を斷つべしといきまきぬ。渠は必ず持ち來るべしと告げて去りぬ。わが毛髮の亂れたることよ。われは渠の來る迄にわが髮を束ね、衣を正さん。わが姿の鏡に映ずる時われはわが美しき元の姿を見ることを得ん……

跫音きこゆ此方に近づきつつあり。わが全身わななくこと頻りなり。われはわが姿を見分くることを得るや？

われ獨り鏡に對す。最早われは再びわが姿見んことを欲せず。われ物書ける時鏡をば伏

音譜



せ置けり。裏は象牙にて銀の組文字（モノグラム）浮き出でたり。何人の鏡にや？　病院に屬せるものとも覺えず。恐らく患者の所有せるものならん。

われは隣室の人の跫音すら耳にせず、室々の戸は堅く閉されたるならん……

鏡は尙ほわが傍にあり。われは再びそをとりあげんと思はず。寧ろこのままにして物書かん。われは夜會の服裝せる可憐なる少女の大なる姿見の傍に立ちつつこの小さき楕圓の鏡をば手にしつつあるを見る。大なる姿見には彼女の後姿映じつつあり、フト彼女は微かに首を傾斜けつつ振向きぬ。小さく眞白なる指先は寶石入りの留針（ピン）をば挿しつつあり。彼女は挿し終りて小さき鏡に映ずる可憐なる姿に自から見惚れぬ。あるかなきかの微笑彼女の面を掠めて過ぎぬ。

何故にわれはかくのごとき事思ふにや？

初めわれは自からを認むること能はざりき。われは亂れたる毛髮の中に萎縮せる頭をみたるのみ。われは無意識にわが髮を捉み片手にそを卷きぬ。顏はいと憔悴（やつれ）れ果て頭のみ重くみえぬ。その時われは又蜘蛛の糸の如き靑き脈とそここに黑き綴布（はぎ）のごときものある白き膚を見ぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鏡面に映れるは他にあらず自からの顔なることを認めたるときわれは激しき苦痛の壓迫を覺えぬ。かの何物をか瞶むる巨なる眼は果してわれのそれにや？　われも一度は美はしかりしものを。われは誠に病めり、されどわが顔に昔の面影を全く認むる能はざるに至るべしとは。かの鏡面の姿こそわれの一小部分にてはなきかと思はれぬ。われはまた深き想に沈みぬ。

さなり。鏡面に映じたるはわが姿なり。その形狀と色彩もさることながら內に隱れたる意義を發見せんと只管に務めたるがごとくわれは思ひぬ。恰かもそはわれの嘗て見たる多くのものの中の唯一ッを顯はせるがごとく、惟はれぬ。壁上の姿またも映りぬ。反映は兩つながらわれにとりて重要なるもののごとく見えぬ。われはまたわれの完全なる姿は鏡面のわれに示せるものよりは以上の意義を有するがごとく感じぬ。

その時塔上より微妙じき樂の流、斷續してわが頭に入り來りぬ、われは何故とは知らずわが堅く握れる髮をば知らず〱わが手より放しぬ。

われは曆日を知らず。されど春の來たりつつあるを知る。われはわが窓に近き樹によりてそを知ることを得。萬物は新らしき生命を以て皷動し初めぬ、われはかの不眠の夜に於

てなせしごとく感じつつあり。百鳥は暗の空にかれ等の樂しき歌を唱ひ初めぬ。ああわれ奈何で失望するを得ん。われは樂の島に向ひつつあるにはあらずや。——暗黒なる水底をくぐりて光にまで——？

この頃の黄昏こそ怪しけれ。微かなる光は時の間に消え失す。われは窓に倚りて最後の光地平のかなたに沒し、暗闇あたりを領して萬物を包み終るまで茫然と眺めつくす。われは眼界より一物の逸し去るをさへ恐れ只管に眼を見張りて逃すまじと瞶む。この時斷續せる施律（メロディー）は絶えずわが周圍に彷徨ひぬ。そは恰かも流れの堅く氷りて結晶せるにも似たり。白き姿われを導きつつあり。

* * * * * * *

オオ母よ、此夜太陽の紅に炎ゆることよ！　猛烈なる光線は矢のごとく西空より遙かなる天上に放射せられ、赫焉たる紅球は煤けたる灰色の冠を戴けり。空の寂寞は折々鳥の歌によりて破られぬ。かれ等は絶えずわが窓に近き樹の枝をかなたこなたに飛びかひつつあり。廣漠たる野には何等の生氣浮動せるなく、遙か彼方の地平線に白楊の並木の折々震へつつあるを見るのみ。

黒雲は日を蓋ひて怪しき夢幻の形を追ひつつ偉なる赤球に纒ひて放るるべくも見えず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今し大なる黒き樹の枝となりてわが窓の方に其の葉を擴げんとするかと見れば忽ちにして怪しき大鳥と化し翼を虚空に搏きぬ。

日は今や殆んど沒しぬ。雲は尙もその變化を極めつつその輪廓次第に朦ろげになり行きぬ。見よこたびは巨大なる獸猿の姿となりぬ。ああ今や唯僅かに紅を帶ぶ金色の微かなる光漂よへるのみ……

あたりは暗し。されどわれは尙ほかの猿の姿を見る。

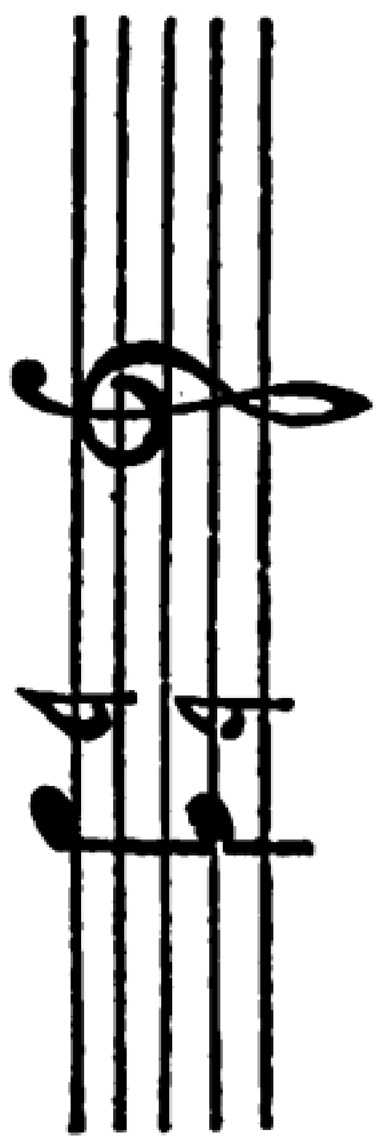
樂わが耳底に鳴り響けり。

……　……　……　……　……　……　……

オオかれ等の攀ぢ登ることよ、一大深林は忽然としてわが前に顯はれぬ。われは數多の猿の枝より枝に群れ集へるを見る。かれ等の眼は綠に輝やけり。或者は地上に屈み或者は樹上にありて白き齒を露き出しぬ。眼の轉ずる處猿の群ならざるなし。また或者は長き尾を枝に絡ませ體を左右に搖り動かしつつあり。中には樹と殆んど等しき程巨大なるものありて全身長き毛にて包まれぬ。されど小なるものその大部を占めぬ。空中には混亂錯雜せる音響あり。かの搭上より來る樂の如き旋律は絕へて聞ゆることなく、唯だなにとは知らず唯一の音調全てを通じて響きつつあり。他の諸音は時に叫喚に變じ或は低き呻きに或は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

平たく堅き音に變ずれど、唯その一つのみ絶えず變らずして響けり。



他の諸音はこの音調の周圍を廻轉してその中に融合せり。「猿は倚ほ攀ぢ登りつつあり。無施律(ノーメロディー)、無施律(ノーメロディー)、唯在此音調而已(オンリジスワンノート)。

* * * * * * *

終夜われは一睡だも貪らず、耳に響き來る同一の音調を聞きぬ。夜正に明けんとす。萬象朦げにわが眼に映じ來りぬ。われは窓硝子に顏おし當てて明かにものの形を見究めんと試みたれど次第にその形薄れゆきて遂に又見えずなりぬ。冷やかなる鈍色の光地上を匍ひつつあり。雛の影見えぬ。その形一樣ならず、彼處此處より集り來れるがごとく見ゆ。褐色の小枝のごときもの暗黑の中より顯はれ來りぬ。曙光今や空に流れぬ。森羅萬象は地平線上に頭を擡げつつある旭日の邊に懸る巨大なる灰色の雲に呑まれつつあるがごとく見ゆ。

わが白楊(ポプラ)は金色の背景に對し薄き黑線を劃せり。かの諸音は囁きのごとく微かになり、只かの唯一の音調のみ聞えつつあり。されどそれもいと覺束なげなり。

この音調は如何なる意義を有するや、われは解すること能はず。われは唯だあるものを認む。されどわれの到底解き能はざる處にしてわが姿の鏡中に映ずるを見てなにとは知らず毛髪を堅く握れる手をば弛めしめたるものを説明せんとするに似たり。

われは物思ひに疲れぬ。われかの島に近づきつつあるにてはなきか？　われはさなりと信ず。されど尚ほ暗黒全てを蓋ひてわが眼に映じたる萬象の意義を洞察すること能はず。

何人もわが室に來らず。唯われのみ此の世に存在せるがごとく思はる。われは獨りわが創造（クリエーション）とわが眼に映ずる諸象（ピクチユワ）と共に生く。それ等は全てこの世の人々の見る幻と異るところあらず。オオ！　終焉の時果して來るべきか？　われはその意義を知らんことを願ふ。必ず意義あるべし。然りあらざるべからず……

われは玩具を持ちて戯れんことを欲す。かの幼き折わが持ちたる剛き鬣の白き小馬は今いつれぞ。われはかの馬を抱きて昔の如く戯れんかな……わが母は——われは母を殺したるなり。母は悲しみに絶えずして正に死せんとす……われはせんすべなし、死に給ふな、母君、死に給ふこと勿れ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが窓側の樹に愛らしき花咲きいでぬ。日毎にその形大きくなり行くを見る。景色綠に變りつつあり。日も暖かになりゆくめり。

やがて、やがて、秘義はわが前に展かるべし。白き姿われをかの發見の島（アイランドオブディスカバリー）に導きつつあり。其處に光あるべし……

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以前のごとき光景なり。されど樹々は次第に綠の衣着け初めぬ。

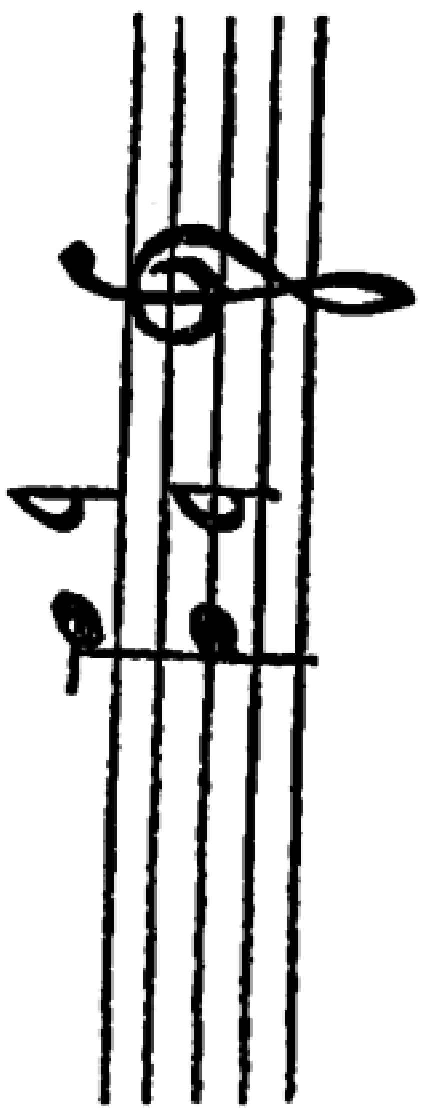
其處に凄じき奔流の響あり。太陽赫焉として萬象燒けんとす。

疾風何處ともなく吹き起り、多數の獸蠢めける地上を掃ひていづくともなく過ぎぬ。

白き姿われを導き獸の群をよぎりて過ぎぬ。

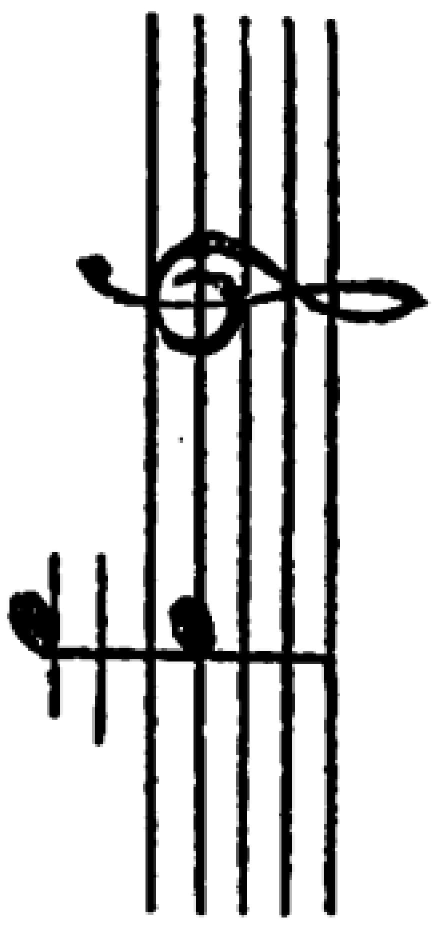
われは歩みつつ森よりどよみ渡れる烈しき響を耳にしぬ。わが全身は震慄なき深き調を發しぬ、わが心遙かに狂ひ出で野獸のごとく樹皮を咬まんと喘せりぬ。其の時巨大なる瀑布のごとき大音響わが耳に響き來りぬ。風は咆哮しぬ。全てこれらの諸音はわが全身より發する音調に融合しぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



その時冷やかに濕れる敷布のごときものわが前にひらめきぬ。われは再びわが室に自からを見出しぬ。かの姿わが傍にありしを知れり。

窓外を眺むるにかの樹と木次第に鬱蒼として深林に蠢ける獸の形もまた巨大になり行けり。われは猶ほ甚深なる響きを耳にしぬ。前よりは更に深く深く全てを通じて響き渡りぬ。



その時眼前の光景は忽然として消え失せぬ。今は只窓傍のかの小さき花の姿のみわが眼に映じぬ。

初めわれはその花の全景を蓋ふ許りに巨大なる形となりたるもののごとく想ひぬ。されどそは再び縮少して元の形にかへり行きぬ。

* * * * * * *

わが眼前の光景の變りゆく毎に諸々の音の響きいづくともなく來りぬ。されどかの塔上より流れ來りし旋律は逝ひて再び歸り來らず。世界はわが前に開展せられぬ。人類の高遠

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

より……まで……誰かよくそを語り得るものぞ？　樂の音つづく。

偉なる意義に近づきつつあり。されどわれは弱し。かの島に達するに至らずして死せんことを恐る。偉なる秘義倘開かるることなくして殘りぬ、……われはわが弱きを扶け、力を與へられんことを祈るべし。神あらば神にてもよし、唯だ一瞬時、かの島に達する時、地はわが肉體をとり去らん。

今日われは再びわが窓外にかの巨大なる花を見ぬ。わが眺めつつある間に無數の美しき花と變じて野より野を被ひぬ。無限の色彩は日光にふるえぬ。そこにまた蜂蝶の群數かぎりなく飛びかひぬ。空には強き香り漾ひぬ……かの姿わが傍にあらず。何等の音響なく、光景は何等の意義をも存せず。そはただ束の間をわが前に閃めき忽ちにして消え去りぬ…

今し飢に痩せたる一匹の猫わが窓下に來りぬ。全ての獸には皆共通なる點あるこそ今更ながらいぶかし。頭、鼻、眼、口、四肢、胴、ああ畢竟われとかの痩猫との間には大なる差異あるべしとも覺えず。かの猫は蹌めきつつ數歩を搬び、止まりては四邊を見廻はしぬ。やがて猫は籬に近づき刺もやあると片足にて觸りその下に這りぬ。緑なる飢えたる眼もてをり／＼わが方を窃み見ぬ。

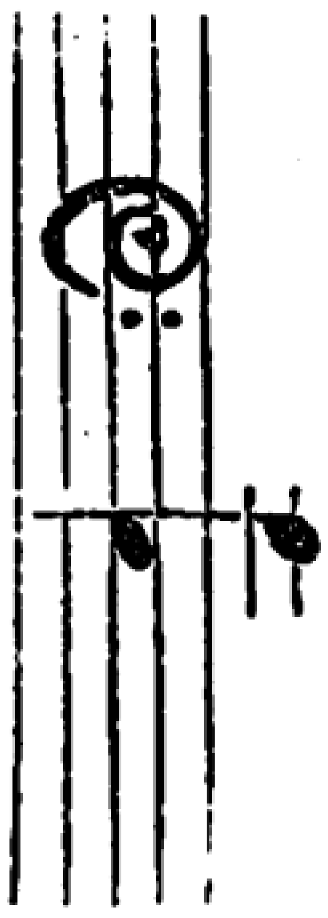
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われはよくその感情を知れり。毛も大方抜け去りたるその體は見る影もなく生氣なき尾は低く垂れぬ。尾の先は地上の冷氣をば鋭く感ずるもののごとし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

影再びわが傍に在り。地の面は裸形にして空氣清く澄みぬ。そこに無數の太陽を集めたるごとき巨大なる光あり。

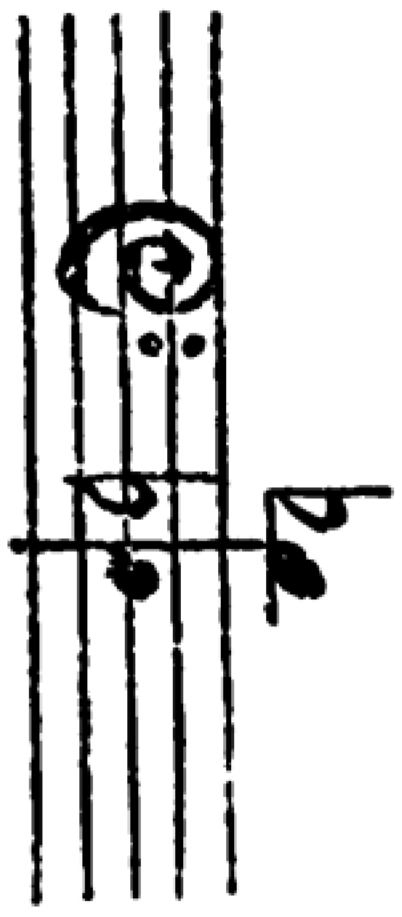
地の面搖めけるがごとし。巨なる蛇の群かしこここに匍匐し輾轉す。眼路の限り錯綜せる蛇群の畫ける曲線を打眺めつつある間に影は次第にわが傍に近づきぬ。われは深き調べを耳にしぬ。



＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

われは白き姿のわれに觸れたるを覺えぬ。かくしてわれ等は眩ゆき光の中に漂ひぬ。漂ひてわれ等は高きより高きに昇り、遂に影のなにものかを指示せる處までいたりぬ。さ、見下ろせば遙かなる脚下に漫々たる水清らかに澄み渡り、幾千萬とも知れざる異様なる魚游泳しぬ。その色彩千變萬化なり、かの調尙ほわが耳に響きつつ時々低く低く沈み

ゆきぬ。



再びわれわが室に自らを見せし時殆んどかの島に着したる如く感じぬ。されど尙ほ諸音の中に含まれたる意義を明かにせんこと覺束なし。われは又諸音に供ふ樣々の光榮を見たり。然れども全體を通じて何等の意義をも發見する能はず。依然として解決せらるべき秘義の伏在せるを認む。わが初めより耳にせる諸音を合すにも樂節としてそを說明せんは餘りに無謀なり。

飜つて諸音を檢するに其處に和絃（コード）を造るべき整然たる秩序備れり。來るべき次音は初音の階調を形造らんが爲めのみ。さなり。そは短和絃（マージヤーコード）なり。而してわれはそれに對する解決を耳にせず。わが眼前を刹那に過ぎ行きしかの光景は集りて何等の意義をわれに提供することもなく愈々遙かに人類が高遠より退き墮するがごとく覺えぬ。

空氣壓するがごとし。草は強き日光に燒け爛れつつあり、虫の羽音聞ゆ。かれ等は窓側

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の花に群れ集ひぬ。數千の蠢々たる群は刹那にその數を增加しつゝ、花の中央は黑色に變ぜられぬ。

わが眼はまた遙かに一本の瘦せたる樹の姿を捉へぬ。梢には綠葉深く茂りて殆んど幹を被ひ隱しぬ。われは樹陰に瘦せたる一個の顏を見出しぬ。そは曾てかの小さき楕圓の鏡に映りたるわが顏を回憶せしめぬ。われは再びそを眺むることを敢てなす能はず。

わが眼の痛むことよ！　野は飢渴に逼れるがごとし。數週の間降雨全く絕えぬ。今日もまた空は澄みに澄みぬ。驟雨の襲ひ來たる景色微塵もなし。われは長き幾夜をかの白き姿の爲めに待ち明しぬ。されど容易に再び來らざるものの如し。恐らく終極に至るまで遂にわれはかの偉大なる秘義を知らずして過ぐるならん、さりながら、われかの樣々なる光景を見たりしは何故ぞ？

或夜の事なり。星辰燦爛たる空に無數の黑き蟲のその花に集まるがごとく群れ初め須臾にして黑雲の空一面に蓋ひ擴がるがごとく思はれぬ、われはかの姿を待ち詫びぬ。されどそは來らざりき。不思議や何處ともなく忽然として太陽現出し暗黑は瞬く間に拭ひ去られぬ。われは新らしき日の來るを今にして驚嘆すべく初めぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

オヽ、われは疲れぬ。待ちに待ちつつ疲れぬ。わが四肢痛み深く、わが體瘦せ衰えぬ。手の皺のごときもの顏面にも顯はれたる心地す。わが美は失せ、わが生は春の宵、その聲の鶯の調べの中に消えゆくまで深く深く悲しみ嘆きたる乙女の夢に漂ひつつあり。灌木の小枝かしこここに廣がり、日光更に淸く美はしく輝き渡りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

かの姿、わが傍に在り。再びわれ等森の中にあり。

樹は悉く大木にして鬱蒼たる木の葉茂りに茂りぬ。梢は挺々として天空を摩する許り、枝は參差錯綜して連なりぬ。

日の光密葉に遮ぎられて微かに木の間を洩れぬ。われは丈高く黑き幹に對せり。仰ぎて見ればその高さ幾哩なるを知らず。地上には名も知らぬ植物幾千萬とも知らず生ひ茂りぬ。樹の根は深くその中に廣がりぬ。

强き土の香あり。靜寂の氣四顧を領して萬物死せるが如し。われは又刹那に發育しゆく植物の生命を感ず。新なる萠芽刻々に頭を地上に擡げぬ。

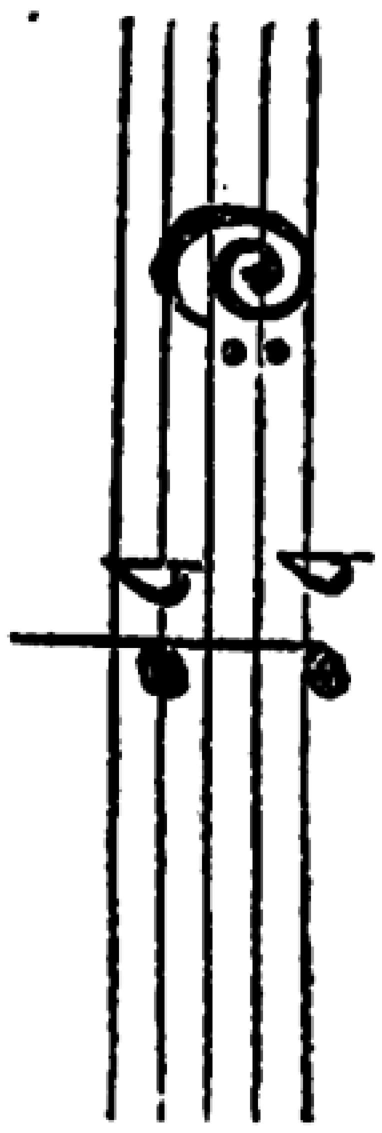
大靜寂以然としてつづきぬ。植物は見ることなく、聽くことなく、話すことなし。かれ等は唯だ只管に生きんことを欲するのみ。かれらは生慾を知る……

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かの姿わが傍にあり。われ等は以前のごとき光景の中に漂はず。今はわれ偏にある音響を捉へんとわが耳を澄しつゝあり。されど聞ゆるはたゞ靜寂そのもののみ。

…　…　…　…　…　…　…

その時われはかの姿に物訊ねんとするかのごとく振り向きぬ。かの姿は何物にか耳傾けそを見出さんことを努めよと言ふがごとき相圖をなしぬ。かくしてわれは再び窓の方に打向ひぬ。空氣更に濃厚に樹木も愈々その丈を延ばし植物もまた密生しぬ。われは唯だ只管耳傾け忽ち數年を閲せるごとく感じぬ。その時極めて微妙なる音響き來りぬ。われは辛じて最後の一節を捉へぬ。



＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

愈々島に近づきぬ。一道の光わが頭上に覺醒し初めぬ。やがて、やがて、われはかの秘義を知る事を得ん。

われは再びわが生涯を憶ひ、その甚だ夢に似たるを切に感じぬ。われは夢より醒めぬ。わが生涯に親しみし全ての人々はわが心より生じたる幻のみ。われに對して生ける唯一のものはたゞ音樂在るのみ、自然は幻影に過ぎず。

ものはただ音樂在るのみ、自餘は幻影に過ぎず。

白き姿何處に在りや？

われはすべての意義を識らざるべからず

われは島に近づきぬ。われはわが島に打寄する澎湃たる水のどよみを聞くことを得。されどわれは唯だ一人にてかしこに至ること能はざるべし。

恐らく永劫に達すること能はざるべし。

わが前に檣壁を置かれたる如く、われは徒らにかの窓外の鳥の如くわが身を悶えつつ羽搏(はた)けるにあらずや？

生(ライフ)の歴史悉くわが前に開展せられぬ。人類の高遠より植物の生命の曙にいたるまで。次に來るべきは何物ぞ？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

幾億萬年の昔なるを知らず。世界創造の時、星辰碎けて散亂しぬ。われは今その碎くる音を耳にせり。

これより後生命なき時代現はれぬ。萬物悉く遲鈍にして鉛のごとく重し。そは花崗(エージオブグラ)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

石(ホワイト)の時代なり。きけ！ そこにまたこれに對する響あるを。さなり。白き姿われを助けつつあり。

そはわれの嘗て耳にしたることなき最も深遠にして晦澁なる重き低音(バス)なり。かくのごとく深き音はわが想像をすら超越せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

わが島に、われただ獨り、太陽我が爲に輝けり。

われ暗黑なる水底をくぐりて遂に光ある陸に達しぬ。

白き姿わが傍にあり。空は歌にみちぬ。奔放なる美はしき歌！ 塔上の樂の音またきこゆ。歌調とおぼしきものあり。

「巨なる金屬製の鏡あり。透明にして美はしく輝けり。

「外面に偉なる力(パワー)あり。

「鏡中に映ずる力(パワー)の反影(レフンクション)を——世界といふ。

「鏡面に於ける力(パワー)の影響は金屬より音響を流出せしむ。これ樂なり。

「反響(レフンクシヨンオブサウンド)は音響に屬せず。

「兩者はともにともに力(パワー)に從屬せり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「力はなにものにも屬する事なし。そは絶對（アブソリュート）なればなり。

「卿は塔上より流れ出る樂の旋律を聞き給ひしならん。そは鏡中に映ずる生命の最高なる形より發し來るところなり。

「まのあたり卿に示されたるが如く、嘗てかの建築者にも力の內部生命は示されぬ。

「世界はさまざまのものによりて造らる。

「そこに日月星辰あり。

「そこに水陸、禽獸、虫魚、並に限り知られざる幾多の存在あり。それらは悉く大音樂中に於ける音符のごとき關係を有す。

「この世界に意義を求むるは徒なり。樂中に意義を求むるも等しく徒なり。

「奔流の響は美はし。誰か克くそを理性に訴へて解かんと試むるものぞ？

「世界は卿の前に展かれぬ。卿はその美はしさを知れり。

「そは一大詩篇なり。

「樂ありてそれに適ふ。短知絃（マイナーコード）中の一和音（コード）のみ。

「和音は不可解なり。」

* * * * * * *

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白露夙朝の光におどりぬ。歡樂百鳥の合唱（コーラス）に充ち溢れぬ。風あり、そことしもなく靜かに吹き渡りぬ。深き滿足わが心に湛へられぬ。

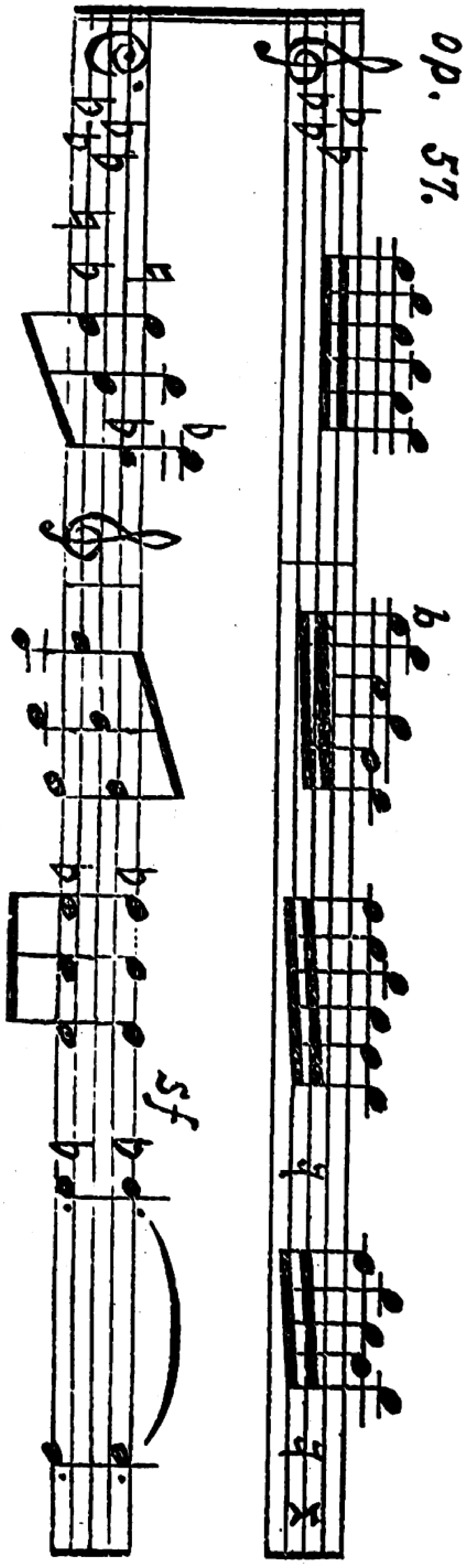
われは今わが塔上に建築者のごとく立てり……われはかの樂の音に耳傾けつつ高きより世界をば眺めぬ。空氣自由にして輕やかなり。

われ今逝かんとす。われは努力しぬ……かくしてわれ一子を得ぬ。その名を「眞理」といふ。

＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊
＊　＊
＊

ここで日記が終つてゐる。最後の頁（ページ）にセヴエラインの脚註（フートノート）がある。それは大概ショーペンハウエルやワグネルから引照されたものらしい。またベートーウエンから左の一節が引照せられてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



その傍に佛蘭西語でこんな註が書いてある。無論「S、M」といふ頭字が記されてある。

「ここにサラ、カフタルがかの窓外より種々なる光景を打眺めつつありし間腦裡に喚起せられたる一節あり。されどその音符は全くその順序轉倒せるが故に彼女は恐らくその由つて來たりし源を認めざりしならん。」（をはり）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

朝霧 ——杉本正生——

九

阿兄の書齋には二三人の來客のある日である。鶴子は剪りたての前髪の下から黑い眼を剝き出して怖々の手つきで珈琲を運ぶ。カステラも菓子鉢に入れて持ち出した。顏馴染のない人々の中に、去年であつたか一度田舍の鮎狩りに出かけて來た事のある立派な學生が混つてゐた。此人ばかりは豫備校時代から秀才として通した志操の緊つた男だとよく阿兄は母に語つてきかせた人だ。

『洛陽女學校へ入れたらどうだ。』恁う言ふ言葉が其人の口から洩れた。

『洛陽女學校か女學院だらふ。』と阿兄は眉を綺せて考へ顏をする。

『何方だつて同じだ。……何だい彼方へ連れてつて遣らふか。』

『君の女(フラア)が彼方にゐるのか。道理でよく慈善市に行くと思つた。』と今一人の側の男が混せ返す。鶴子はカステラの殘りを母の手許まで貰ひに行くと己う其話を語つてきかせた。

其日も母は髪を結び襦袢の半襟などを替へて着込んでゐた。

『なあおつ母さん。』と遠くで阿兄が呼ぶ。母はセルの上に羽織をひつ懸つて出て行くと、

『何か皆さんお樂に………』と母らしい威嚴と若々しい態とを作りながら細い煙草管を取出して來る。

『洛陽女學院つてね、耶蘇臭い學校ですが好がせうか。尤抑私立女學校の方では優れた方です。』

『私立かい？。』

『私立でも好でせう遊ばせて置くよりはね。而して後から高等女學校の試驗を受けさせるとして。尤鶴子では豫備科へ入れる資格しかないんですからね。』

『女學校の方が順しくつて好でせう。小學校に入れた方が好いは好いんだがね。』と其人も母と阿兄とに語つて、一度規則書を貰つて來やう、序手に鶴子を連れて行つても好い、などと折々鶴子の眼の處を見て笑顔した。五月の陽氣立つた日である。庭の繁みからは絶えず匂はしい緑の香と沈丁花を吹いて來る微風も這入て來た。よく屋根廂の樋の中で雀の群がかさかさと竹の音をさせた。少時く話が途絶でもすると眠氣を催す様な日である。間もなく來客の友人は歸つて行くと、丁度其閑な時間を琴の復習に潰されて行つた。近來で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は身を切られるやうな悲しさも覺えず記憶のままを一時のがれに彈けば足りると心得た。琴が辛じて母の威色にも障らず濟ませて貰ふと、又カステラを貰つてお雪と二人で庭先きの遊びを許された。小婢のお雪は京都へ來てからまるで新らしい着物ばかりを着込んでゐた。何うかすると姉妹とは見えずとも友人位ゐには見えたのである。

彼岸櫻には巳う薄ら紅い實を付けてゐた。夫れが吹きみだれた風のために木の葉と共にばらばら青い芝生の上に撒かれてゐる。細い手を伸べて夫れを拾つて行く内に一疋の青黒い毛虫を見付けた。醜い小さい背をむくむくとさせて散り落ちた櫻葉の椽を這ひ歩く。鶴子は拾つた櫻坊を一氣に拂ひ落して、お雪の手に噛み付いた。怖さ見たさに巳う一度そつと眼を遣ると黄色い聲を立てて仰山にもお雪の手に握つた櫻坊まで奪ひ返して冷たい虫を目がけてぱつと投げ付ける。わるく沈着た醜いものの姿を見ると身慄ひせずにはゐられなかつた。

『何おしやす。』とお雪は折角拾つた美しい實を口惜げに見送りながら白い眼を剝いて睨んで見せる。鶴子はぐつと涙ぐみ乍ら荒らかに右の手でお雪の肩の邊りを强に打叩く。お雪は叩かれた儘で直ぐに其毛虫を一枚の葉の上に載せると鶴子の胸元近ぐ持つて行くのである。わつと鶴子は泣き出す、お雪は狡猾にも秘と裏庭の方へ逃げ込んで行く。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十

静粛な御苑内を斜に通り抜けて烏丸下立賣の角の洛陽女學院の門を潜つたのは月曜日の午前である。何時でも入學の折は老婆が尾いて來て呉れた。此日は腦病で保養をしてゐる三木とか言ふ阿兄の友人に連れられて來た。其人は月謝、會員、而して事務室で貰つた書籍代などを收めて怖えてゐる鶴子を女教師の一人に預けると金椽の眼鏡をきらりと光らせて青葉の中を歸つて行く。

『小學校は已う卒業したのですか。』と年齢をきいてから女教師は優しい首を傾けて見る。

『え丶?夫れで入學が屆きましたかね。』と言ひつ丶第一教室と白木札の懸けられた處へ連れて行つた。

授業は已う二時間目である。南と西との開けられた硝子窓の蒸風の教室で鶴子は國語の教科書を擴げた。豫備科一年生は鶴子を合せて十六七人にすぎなかつた。只無暗に暗愁な子供達を狩り集めた如き田舍の小學校の教室と比べると鶴子は言ひ表せない壓迫を感じた其三分の一にも足りぬ人數ではあるが、敏捷な眼付と輕快な言語とは鶴子を次第に何うする事もならない樣にさせて行つた。其頃、豫備科全級では大抵前下髮は少なく桃割が過半を占めてゐた。次の時間は裁縫である。洋館の教室を出て日本室の裁縫手藝場へと通はね

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ばならぬ。棟續きではあつたが矢張り上草履を脱いで下駄箱から各自の下駄をはき替へて行つた。

裁縫の教室の二階は丁度寄宿舍の二階と橋一本で交通が出來る樣になつてゐるから上級の寄宿生は筆記帳に文具箱を添へて教室の廊下を往復した。上級の生徒の髮はみな束髮で、中には大きな揚卷の根元に熘える樣な緋のリボンなどをかけてゐた。手藝室の隣室は又六疊程の小坐敷に小さい床などを設けて琴の師の居室にも兼ねた。午後からは其處で一人宛琴を敎はつた。でも入つてゐる人は一級に二人位ゐで而も寄宿生が多い、通學の人達はみな夫れ夫れ我家の師匠を撰んで持つてゐた。

二時間の裁縫を了つて自身の敎室に歸らふとすると入れ替つて來た普通科の生徒に逢つた。然うした人達はみな芳麗な體軀を輕く取扱つて娘盛りの美しい聲をあげて學科の話なぞを爲ながら並んで行く。入口が混雜と豫科の生徒はみな上級の生徒に讓つて立塞がつた。全校の最下級、恁ういふ可憐な念が絕えずある壓迫を感じてゐた。

岡崎町の市の端れから下立賣町までの里程は隨分あつた。夫れに電氣鐵道の便はなし、遲刻する程朝の支度に手間取る時は阿兄の注意で俥なぞに乘つて其上で豫習をする事もあつた。歸途の友人は可なりある。次第に上級の人達の名も知り聲も覺えて行つた。御苑内

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を斜に拔けて歸途に就く人々の中には迎への俥を或る町で待たせて夫れ迄仲の良い人と步いて來る氣の優しい人もあつた。其人は中京邊の大商家の娘だといふ噂もあつて、黑友仙の被布に折々文金なぞの島田に結つて來た。其人ばかりでは無く裁縫科の上級の某級なぞでは殆日本髮で一切袴なぞ用ゐず付の少ない長い袖を競つたものである。

何うしても裁縫科の人達と通學生とは優美に成てゐる。なぞと友人に敎つはつたり、見識なぞは寄宿生の分けて普通科の人々の方が高からふ、とも言つたりした。次第に何に拘らず贅澤に心持ちを養つて行く事ばかりあせる樣になつた。

祈禱會、聖書講議、なんかは上級の殊に信者ばかりのものかと思つてゐると、間もなく一般の生徒にも一週に一度修養會といふのを起させることになつた。

『無理に信者にさせられるのなら退校する。』と云つた人達も知らず識らずの間に讚美歌を歌ひ、主のいのりなぞを平氣で口づさむ樣になつた。

十一

上級の誰彼の噂が出ると、絶えず同じ人を引出す人のために、夫れを全然ある心を通はす戲れの如く言ひ立てる習慣が何時の間か出來上つた。中には然した事をきいても平氣でゐる人もゐた。そんな人は控室のボールドの端に小く上級の相手の名をローマ字で記き止

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

める様な大膽な事をした。其頃七寶燒の小さなピンを賣りに來る雜貨屋があつた。まがれつとの上にそうしたピンを挿す人は多く相手の人の頭字を使つた。

上級でも思はれる樣な人は何處か締つた心持をもつ人で男の樣な凛とした處が備はつてゐた。元より裁縫科には一人もなければ普通科でも寄宿生に限られてゐた。崇拜者は多くとも相手は少ない、勢い一人に四五人の下級生を有たものである。

鶴子の友達は二派に別れて一派は英文のよく出來る三谷と云ふ高等科生を取捲いた。今一派は運動家とでも云ふ風な康かな體質を備へてゐる定村といふ色の白い人であつた。其人は獨唱(そろ)で名を賣つた事もある人で、西洋婦人の敎師の室に始終日を暮してゐる樣な異つた考をもつた人であつた。

『一體京都の娘さん達は優しい一方だから不可せん、ちと遊戯でもなすつたら好でせう。』

と、巧みな表情で如何にも下級の人達を可懐しむ、といふ意を現した。豊麗な黒い艶のある髪を大きく揚げ捲なぞにして裝飾と言つては時計の紐位なものであつた。

其頃本堂の一隅で薙刀の稽古をやらせた。武德會のある老體の先生が敎へに來たものである。例の定村と今一人裁縫科の通學生に絶えず高島田に結つて來る人とが常に最高點を採つてゐた。其人は八捲にした布跡のくせを直す爲めに寄宿舍の洗面場へ來ては楊の解き

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

櫛で鬢の毛を豊らませた。

運動場は廣い方で樹木は繁るが儘に欝蒼と枝葉を伸ばした。小さい泉水には土橋が架つてゐて其處は豫科生の好い遊戯場所である。無邪氣に草むしりばかりをした連中も一學期の中頃では全でふるまいを變へて行つた。中でもみな唱歌が巧みになり、毎日一時間を費す體操のために姿勢に著しい變化を示した。然ういふ烈しい中に混つても依然として、人々の花やかな聲に壓倒されつつ鶴子は背丈けばかりを伸ばせて行つた。

鶴子に取て第一怖ろしい體格の檢査が毎月一回宛行はれた。體操の教師が體量やら視力なぞの試驗をした。

器械の周圍に全級の生徒は立塞ぐ、蒼白い顔をして鶴子はそつと人々の肩に隱れた。

頓て春は全く往き盡し、薄着では少し肌冷えの覺える常夏がやつて來た。朝の清々しい大氣の中を歩いて青楓の繁る御苑内を斜に拔け道をとる、白いパラソルにはまだ日光が弱すぎた。丁度さう言ふ頃が鶴子の健康に適つた。『小杉さん、まだあなたネルを着てゐるの？』などと調戯ふ人もゐた。激しい遊戯の疲れで、まだ課業の始まらぬ内から汗を覺えてゐる他の友人の明快しい顔色を見ると何の遊びが催されても仲間入り爲やうといふ氣になれない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

唱歌の臨時試驗が折々やつて來た。友人はみなそつと寄宿舍へ忍んでおばさんの手で砂糖水を貰つた。然うした捷こい人達の背方の方で音階をすませると、頓て一人づつピアノの前に立された。鶴子はひよろ長い身幅の餘る樣な衣物を着た姿して五線紙を凝視ながら聲を震はせた。一時に他の生徒達は笑ひ出した。

十二

『喧しい。』と叱りつけた敎師も、審しげに鶴子の方を見た。

『やり直してあげませうか。』などと優しく言はれても鶴子は汗を覺え乍ら俯いてゐた、何と答へて好か、それが鶴子の頭では思ひ付けない。頓て元の坐に無言つて歸つて來ると已う眼を潤ませてゐる。

『先生。やり直して戴き度いと仰しやいます。』と突然隣の腰懸にゐた生徒が口を出す。

『ぢやお立ちなさい。』と先生は眞顏になる。已う激しい鈴の響きが校堂の頂きから傳はつて來るのである。

控室が食堂と兼てあつたから、其廣い一室では通學生は各々の樂しい午餉の鈴を待つた小使が大きな藥鑵の口から湯氣を立てて机の一脚づつに一個を置いて行つた。鶴子も其處の一隅に腰懸けて他級の人々の快しげな談話にきき惚れなぞした。幾ら靜かに、と心得て

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐても拭き込んだ卓の上には湯呑の底も當れば箸も觸れる。高く眞白な天井を有つた明るい一室の多くの窓には若い女の心の底から自然と流れ出る樣な歡聲に充ちた聲音が洩れて行つた。其室の前は廣い菜園となつてゐて揚弓場から見る事が出來た。早く我勝に食事を終つた人達は圖書室に行き、編物に行き遊戲に行き、中には靜かな祈禱に校堂の窓の下を撰ぶ人さへある。鶴子は大抵稗弱な人達の群に這入つて愚かな談話で樂しむ可き時間を浪費した事が多い。

『遊放時間には教室へ這入る事を禁じます。』と云ふ指示がボールドに貼られた日から鶴子は淸しい綠蔭に來て控え目に花やかな人達と手を列ねた。

普通科の上級には小さい會が設けられた。其人達は一人づつ下級の人々を集めて自分の信ずるに足る考へをある物語の樣な形式を借りて喋るのであつて何の事はない野外講話を小さく眞似た樣なものであつた。夫れは健康の爲めにもならふとて樹蔭で殊更ら椅子も持ち出さず立つた儘で二十分ばかり續けて行つた。定村なぞは自分自身で快しみを感じながら高く袴の紐を締めた胸を突き出し氣味にして可憐い豫科生の顏をみつめては聲をつゞけた。其人は必ず片手に小さい聖書を握つてゐた。若い心の自ら昇つて行く樣な娘達は眼を潤ませ胸を悸はせ乍ら惚りとして耳を傾ける。理解の力も何もない鶴子までも、妙齢に達

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した純潔な此處女の心持から流れて來る言葉は、自然とある快いりづむを有つてゐて、獨唱できく樣な美しい聲が身にも心にも浸んで行つた。やがて高等科生の三谷といふ人も引張り出された。此人は又沈痛で、或るさびしい刺戟を與へて行く樣な質の話しぶりである。一度英文を續んで、而して夫れを譯してきかせて、更らに其處から拓いて行つた自己の處信を布衍すると云ふ風にやつて行つた。此人の話がすむと人々はみな沈默を守つて眼を見合はした。

其處へ行くと定村の人氣は全校を壓するといふ力であつた。

講話をきいてからも長い時が殘つてゐると、鶴子は四五人の人達と共に西洋婦人の教師の室の前を歩いて行つた。其處は寄宿舍と並んで棟も別になつてゐた。色彩の濃厚な西洋の花草が數多く鉢に植えられて並んでゐる。其前に蹲踞で輪廓を描してゐる普通科の人がある。鶴子の連中は其人の背から蔭を作つて立塞がつた。巧みな手つきで其人はわき見も振らずに花と白紙の上を片身に凝視て描して行く樣に蹲踞んでゐた。鶴子の息で紙にかゝつて其人は始めてはつと身を捻じた。友人は眼を視交して笑ひ會つた。

十三

或る日臨時試驗をやつて後、唱歌は一段と難しくなつた。熱誠にピアノに向つて傾聽す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る音聲の美しい友人も恨めしさうに敎師の生白い顏を覩詰めた。唱歌は三十分づつ毎日やる事になつてゐたから鶴子は同じい苦しみを毎日定刻に繰り返さなければならなかつた。其翌日七八人ばかりは唱歌には出ないと云ひ出した。其中には何れの敎師にも信任されてゐる質の良い娘もゐた。

『妾も休みます。』と鶴子は其人達の背方から小い聲で言ふ。間もなく二階の音樂室では聞き慣れた物怖ろしいピアノの音が響き出す脫走した連中は流石に心を震はせ乍ら裏庭の菜園へ出た、其處には深い綠蔭に青々と成長した草が小さい白い花を頭につけて繁つてゐる。其處でも鶴子は田舍の夏の匂を嗅ぎ出した。

『先生憤つてはるやろか。』と頰の紅い可愛い眼付をした片山と言ふ娘は又しても高い建築物の二階を見仰ぐ樣な心持ちを見せる。菜園に入つてもピアノの音は木立をわけて傳つて來るのであつたから。誰人か鬼ごつこを爲やうと言ひ出した。

『わん、つう、すり。』と小さい拳を突き出しながらも誰一人走り出すものもなかつた。其內一人が昨日敎はつた譜を記憶に辿つて低い聲音でうたひ出す。不思議にも自由に聲はまわつて行つた。

『已う一度始めから。』などと一人が加はると他の連中もみなお互に顏を覩交しながら異

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

面目な眼付をして足拍子を踏み出す。

正午の鈴が響き渡つてから控室へ返つて行くと、

『豫科の一年生で今日唱歌に出なかつた方達はお辨當を召つてから敎室に這入つて下さい。』然ういふ聲が控室の入口から或る上級の人の口を借りて傳つて來た。頓て八人は敎室に歸る。明るい窓には放縱に枝を伸した青楓が手の屆く處まで來てゐた。其處に八人は固まつて顏を視交しては淋しさうにひそひそものを語つた。ふと入口の開く音がする。定村が這入つて來たのである。

『其處に入らしやい。』と兩手で靜止させながら、一番手近な鶴子の頭を片手で撫でて遣ると、成可く聲を低め乍ら、

『飛んだ事をしたんですね。だつて爲て了つた事は仕方がありませんからね、よくお詫をお言ひなさいよ。』

『定村さん。妾し怖いわ。』片山は不意に恁麼事を言ひ乍ら軟かい大きな女らしい手を自分の肩に持つて行くと潤ませてゐる眼を伏せて顏をすりつける。

『怖かありません、よく斷りをすれば好御座んす。無言つて突立つてちや不可せんよ。乾度ですよ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其處へ先生は這入つて來た。同じ色の袴をつけた定村は先生よりもづつと大きい體格をつゝまやかにふるまい乍ら、一度向つてお辭儀をして而してそつとして出て行つて。『何卒罪ある者をお手軟かに。』と言ふ風な視線を送りなら。

『休んだ理由をお述なさい。』此言葉が出ると直ぐ立たされた片山が聲を震はせながら只謝罪ばかりを述べた。次第に同じい形式で五六人は言ひ終る。鶴子は順序に依つて机の前に立上ると、口元が震えた。教師の視線を避けるために室の一角をみつめながら次の人が立上る迄茫やりとして突立つてゐた諳ふ言葉が思ひがけない。是れで腰の折れた後の二人も無言つて濟ませた。少し訓戒を言ひ渡して先生は出て行くと其のドアーの半ば開かれた處から廊下を通る上級生す姿が見える、大きい定村の揚捲の頭が多くのリボンの間から見えがくれに通つて行く。許された娘連は慌たゞしく其後を尾つて行くのである。

十四

學校を了つて歸つて來ると、直ぐ琴の師匠へ出かけて行つた。琴は引摺られ乍ら「六段」が終つて「歌戀慕」に移らふとしてゐた。此夏頃には已う「椿づくし」に追ひ尾かねばならぬ、此麼事を言つて心を急せらさうとした。其師匠の皺ぶかい可愛い眼元をみつめながら「是れ以上彈けない。」といふ樣な顏付をして見せた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

琴が終つて歸ると灯がついてゐて夕餉には辛じてお雪が待つてゐて呉れる位にであつた。夜に入ると大抵は近所に下宿する阿兄の友人の許へ算術を見て貰ひに行く。其處で夜を更かす。京極へ連れられて來る事もある。次第に家の狀體に接近しなくなつて行つた。でもお雪の口からは留守中に起つた種んな事を耳にした。夜を更かせて歸つて來る阿兄を翌朝母は捕まへて、或る時なぞは懷劍なぞ振り廻してゐたとか感情の過激な狂的な母の發作は何れだけ故鄉の家で見せられたか、夫れが子供心では老婆の言ふと同じやうに無益な暗い行爲としか思へなかつた。

其處へ行くと何時でも笑つて其場を濟まさうとする阿兄の容子が可懷しい。阿兄はいつも態と小くなつて母の前に媚びる樣な言葉を使つた。

『あないに謝まつて可愛さうに。何も阿兄さんの財產を阿兄さんがお使るのにあまでお母樣が偉さうにせいでも好え。元々通りにお醫者はんになつてから歸しさへすれあ大事ないがな。』老婆はよく鶴子を相手に此麽事を言つてきかせた。母と阿兄の喧嘩となると鶴子は是れを思ひ出さずにはゐられなかつた。

お雪は又種麽話をきかさうとて鶴子の歸途を熊野神社の前まで迎ひに來たりした。

『まあ嬢さん。』とお雪はいきなり眼を丸くして驚かさやうとした。

次第にお雪は年下の鶴子に仕へて行かうとする様な容子を見せた。日曜日を終日遊び暮す様な事をしてもお雪の控目な調子は別に喧嘩にもならなくなつた。

『お雪、恁麽事を敎へてやらふ。』などと言つては舞踏の眞似の様に肩と肩とに手をかけて足拍子をとり歌を唄ふ。此子供二人の眼には何しても母より阿兄の方が高く見え至當の様に思へるのである。二人はよく裏の田甫から小い溝を飛び越えて花の着いてゐる草を探しに行つた。其處は廣く豆畑になつてゐて白い反射を持つた豆の葉はきらきらとよく光つた。お雪は自身の薄汚れた前垂を顔に引懸け其木綿の粗雑素地を透かせて地上を見た。まるで月明の様な白銀の光りが畑といひ、溝の水と云ひ、自分の影法師までが黒く浮き出す程に白日の姿を變へた。

『好いお月夜さんどすえ。』お雪は前垂の下で眼を剝きながら歩いて行く。鶴子は指を染め乍ら豆の葉を毟り採つては夫れを軟かく揉みつぶし口に當てては膨らませやうとした。幾つしても夫れはみな途中でさき破れた。『お雪、』と此呼んで鶴子は其靑臭い液のついた二本の指で袂の先きから白墨を探し出した、丁度、二人の後には黒板屛が長く隣の家を取圍んでゐる。

「女、神、大根、手紙、筆、」と云つた風な覺えたばかりの文字を白々と書いて見た。夫れ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は學校で書より遙かに優れた字であると思はせる程好く出來てゐた。負けずにお雪も何か書いた。頓て文字を止めて二人は繪をかいて見た、丸髷の頭ばかりの女の繪は母のつもりである。二人は興奮して眼を充血させながら其丸髷の肩へ持つて來て『男ぐるい』と言ふ字を書いた。

十五

阿兄の友人の美術學校の生徒の家で長い間欲しいと需めあぐんだ美濃礬砂を一杯貰つて來た丁度繪の具もある。鶴子は細い筆を洗つて來ると母の挿し餘して捨てた白い小花を拾つて薄暗い机の前に坐り込んで、いきなり筆を執り初めた。其頭腦には甞て寄宿舍の横の西洋婦人の草花の花壇蹀踞つて寫生をしてゐた上級の生徒の姿があり〳〵と記憶を呼び返した。輕く握つた細い毛筆の先端で複雜な花の輪廓はすら〳〵と流れて行つた。「あゝいふ風に書き度い。」と鶴子は思つてぷたと墨を含ませた毛先きで其形像を描さうとした。

『鶴。』と云つて阿兄は夏服の鼠色の姿をして這入つて來た。

『夫れあ駄目だ。畫になつてやしないぢやないか。』恁麽生意氣な事を此子供に行せるのかと阿兄は思つた。

『恁ういふ風にするんだよ。』と其昔嗜好んだ筆を輕く運ばせて描いて行く。其花の深く

刻んだ葩の中へ持つて來て阿兄は何時の間にか蜉蝣の一疋をこしらへて行つた。
『孝吉、』恁う言ふ聲がつい廊下の向方でした。頓て母の派手なネルの單衣の裾が鶴子の眼に映つた。ふと見仰ぐとひやりとして直ぐ俯いた。然う言ふ怖ろしい嫌な眼の光りを阿兄も覺つてゐるからして些しも相手にならうとは爲ずに平氣で又新らしく何か描き出した。
『おい。遊んでゐるのなら些と此方いおいで。』
『繪を敎へてやつてゐるのですよ。ね、學校へ出す繪だね。』と平氣に心を沈めてゐる。
『學校の畵ではない。眞似をしてゐるのだ。』恁う鶴子は心に答へ乍ら思はず阿兄に向つて頷いて見せた。嘘はそればかりでなく、學校に於ける暗く小さい自分の影を蔽ふために、その輪廓の中に繪具を入れて先生の前に出す、といふ樣な事をつけ足して言つた。阿兄は母と語る可き責任を一分でも後へ晩らせるために此愚なる腦から出る空想を眞顏になつてきいてゐた。
『お汝より上手な人ばかりだらふね。』
『いゝえ。私より下手な人ばかりです。』
『此れでお汝、畵が上手なつもりか、ちや丙だとか乙だとか貰つてる奴は何麽もんだらふな。』

『そのかわりあたし算術が上手です。書は下手ですけれども。』と、恁う言つた眼には複雑な數學の並列したボールドが映つた。其前に小さい悲しげな自分の使ふ机がある。算術ばかりではなく唱歌だつてきかれゝば好ましい學科だと答へて見たい。

『品行もな。一等賞を貰ほうか知ら。』「恁う息が奮んだ。此間、無言つて突立つてゐた母は、いきなり持つてゐる煙草管を振り上げて見せた。

『何時までぐず〳〵してゐるのや。些とこい！………』

『何の用事です。』と阿兄は笑顔で振り仰ぐ。此茶化して了ふ、と云ふのが阿兄の手であつた。

頓て二人は書齋の方へ這入つて行く。鶴子はお雪を手まねきしてそつと襖の影に忍だ。

『さあ、私が不品行やと云ふ立派な口があるのなら言ひきつて御覧。此れ程心配をかけ、て置いてよく其麼惡口が言へたものやな。』此語に總いて阿兄の嘲弄的な笑ひ聲がすると、矢庭に物を投げつける響と共にまるで組み伏せる樣な酷い音がした。ふと表に訪るらしい人聲がする。お雪は嫌な顏をして這入て來ると、其來訪者はよく近來阿兄の不在を見込んでは母と酒を汲み交して行く島田だといふ事を言ひ告げて眼をしかめるのであつた。

十六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

學校に行く迄は夕暮となると染々と涙が流れた。其涙は遠い故郷の追懐である。廣い古い家の生垣の前に淋しい風を浴び乍ら後手をして、行く雲を仰いでゐる老婆の前へ、不意に飛びついて見たなら、老婆は頓狂な聲を擧げて何麽にか喜ばだらう。只一人寂しい故郷に殘されてゐる老婆、と夫れを思つて見るだけでも火の付く樣に泣きたてた。夫れも然し長くは續かなかつた。

然ういふ感情の薄らぎは直ぐ子供心に生育て行き、複雜な白晝の光景が充分にものおもひの料になつて行く樣になると、眠の醒めて寢苦しい夜半の頭には却つて辛い悲しい嫌な故郷の前にある小さい自分が思ひ出された。鶴子は夫れを何れ程打拂はうとしてもやつぱり根深く心の底に成長して行く思ひ出は不思議にも、次第に其數を倍し繁つて行つた。まるで大人が新らしい智識の一つを見出す時の如き形して、行爲つた其時其場よりも更らに鮮かな色彩をもつて思ひ出は不意に頭を擡げた。香い愚かな小さい頭の中に深く埋沒つてゐた其記憶は他の部分の發育と共にむく〳〵と現はれて來るのである。人々の寢息の寂しい聲をきゝながら鶴子は茫と犬の事を思ひ出した。四五疋の野犬の子が何うしたのか我家の椽の下から暖かい春の日光を浴び乍ら生れ出た。けれども其育ちかたを見れば他所で生れて親犬に連れられたのであらふ、と平さんなどは言ひ言ひした。而して其四五疋の中に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

左の腋下から細い首へかけて固く紐をかけられてゐる一疋の毛白の犬が混つてゐた。

『可憐さうに、解いてやらふ。』と阿兄は啣へてゐた莨を捨てゝ両手で此薄汚れた木綿の紐を解にかゝると、生え密んだ其軟かい肌は無惨にも薄紅い肉を現して、深い溝をして斬れ込んでゐるのである。其處へ引縛られた木綿の紐は喰ひ込んで來てゐる。紐を解かす處、か小狗はきやん／＼と泣て走り廻る。少時く鎮めるために手を控へると小狗は疼痛を忘れた樣に又他の兄弟等と同じい圓い眼を働かせて戯れ廻る。其酷たらしい汚れた紐は小狗に取つて丁度深い痛疼を抑制する餘儀ない繃帶の樣なものであつた。けれども、風の吹き荒れる夜、村火事の野末に仄見る淋しい夜などに何處とも知れぬ床の下で泣き立て親の夜遊びに待ち焦るゝ子狗の聲は家内中のものを悩ましきつたのである。

野犬の畑荒の多い中へ又此五六疋が倍へて行く事を思へば、自分の家ばかりか隣村へ追ひ放る事も考へものだ、恁う平さんは言つたりした。長く食客をしてゐる平さんは此村の何家と何家とに何色の犬が居る、此な事まで數へてゐた。夫れへ考へる事も閑なれば手も爲す事を持たぬ空しさは、暇があると此犬を日當りの庭間に連れ込んで戯れ廻る。

『殺して仕舞へ。』散々玩弄んだ後の眼で見た醜さに此麼事を云つて、小さい色艶のないちゞれ毛の背を干してゐる子狗をぐつと抱き上げると前の谷川の瀬の中へまるで小石を投げ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

込む様に岩角眼がけて投げ付ける。小狗は微に泣き叫び乍ら岸邊に向つて這ひ上らふとする。夫れへ重石程の大きさの小石を拾つて、白い子狗の頭をめがけ幾つとなく打擲けると强烈に頭の骨を粉碎された悲慘な半生の肉塊は緩やかな水の瀨に浮かびつゝ流れゆく。

『此度は私の番え。』懲う言つて鶴子も小石を拾つた。斯うして其正午頃には醜惡く哀れな子狗の姿は已う床の下に見當らなかつた。杉の太い幹の前に眼の霞んだ汚い親犬は幾ら追ひ遣つても又やつて來て坐り込むと、凝乎子狗のゐた床の下を見つめてゐた。

十七

午後に友人と一緒に出掛けて行つたなり阿兄は夕餉をも外にして仕舞つた、廣い家の何の間も何の間も陰氣に潤つぽい夜が音もなく襲つて來た。母とお雪とは各々の雨戸を閉めやうとして干し忘れてある足袋など取り入れたりした母は薄衣の單衣に肌寒むを覺ふると言つて羽織を引かけながら冷きつた廊下を素足で戸を引きながら往復する。裏庭に向つてゐる此房には廊下の突き當りに細かく竹で編んだ連子窓がついてゐた。其處からは溝の向方の籔やら、豆畑やら、聖護院御殿に通ふ細徑なぞが見える。戸を閉め終つてから母は少し背を僂めて其處から淋しい薄暮の色を覗いて見やうとした。鶴子は鼻を鳴らして母の羽織に摑まり乍ら、同じ樣に覗き込む。栗鼠か鼬か暗い籔の根際を姿さへ抹して掠ゆ走る。丁

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

度、獲物を求め探す樣に鼻を突き出して來る犬がふいに笹叢の中から飛び出すと我家の床の方をめがけて走り込んで來た。何處からともなく木を燒く樣の香が冷え冷えしいそよ風に混つて窓を掠める其香は丁度田舍家の風呂を焚く折湯殿の匂を思ひ出させる樣に自然と鶴子の泣き易い胸に這入つて行つた。

『やつぱりお汝は田舍の方が好のか。』と母は懷手を爲ながら、其顋を鶴子の軟やい頭の髮の上に持つて來た。而して我子の他愛のない顏を見てから、

『夫れでもなあ、阿兄さんが偉い人になつてからやないと恥しふて田舍へは歸れません。』と然う言ひ乍ら頓て窓を閉めて人氣のない臺所へと來た。お雪は小さい手を働かせて膳の上に茶碗を並べ鳥鍋を火鉢にかけなどして夕餉を急ぐ。

『お母樣は何したんか知らんが腹が空かん。』と恁麽事を言つて膳に向ひ乍ら漬物などの淡薄な味を貪りながら、茶ばかりを飲んだ。子供二人の腹はまるで勞働をした人の樣に饑え空くのを覺え乍ら愉快さうに眼で笑つて食べつゞける。幼い頭の中には箸を鳴らし嚙み味ふ樂しさより他に何の影も映つてゐない事を思ふとお光はふと其中の淋しい自分を見出した樣な氣がするのである。

亡夫に別れての七年間を思ふと、暗い淚を感じるのである。指こそ七年を數へるけれど

も其間何をなしたといふ事もなく苦勞つゞきの月日でありながら、忍びきれぬ辛抱といふ事の一つをも爲なかつたのを、思ひ起すと思ひ出はみな苦しい苛責だ。改めやう改めやうとして初め出す事がみな深い路へ迷ひ入れて了つた。其間が已う七年だとは些と思へなかつた。夫れに亡夫が長い期間をしばりつけてゐた、其肩の繋縛が未だ軟かい肌に時として感じる事がある。自分自身は死んで仕舞つても纖弱な妻の一生を貫かうとする樣な恐ろしい酷烈な力が不思議な壓迫を以て見えない處で苦しめてゐる、とお光は然ういふ風に何處までが自分の罪であるかを思ひまどふ樣な息苦しさを感じた。けれども深い考察などゝ云ふ樣な忍耐的な事は能る質ではないお光は、音もなくしめやかな夜に這入つて行く寂しさを思ふと、恁う我家以外の何處かに灯と色彩と響きとの群がる激しい中へ飛び込み度い樣な、罪もない誘惑を待つ心を覺えて行つた。恁う云ふ寂しい目に遇はして置く孝吉が歸つて來た時、何う云ふ面當をして遣ふか、恁う、思ひる耽つてゐる樣な眼付きをして煙管の首で軟かい灰の面を撫でたり固めたりするのだつた。而して何時の間にか涙を感じて子供の眼に止らぬ樣にそつとふるい落した。まるで若い妻が覺える樣な輕い嫉妬の花やかな我子の外の振舞に及ぼして行つた。

十八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

孝吉は島田を連れて歸つて來た。已う鶴子は寢卷と着更へて悄然便所から房室に這入らふとする時であつた。廊下の中央に大きな姿で立塞る樣にして島田はそつと母の房室を覗いてから客室へと這入つて行つた。丁度廊下に向つて母さんの上にある洋燈が明るい光を放つてゐた。島田の差し覗いた折の眼付と、圓髷を仰向かせた母の顏とが此方から鶴子にはよく解つた。

『阿兄さん！』悳う云つて可懷しげに鶴子は客室まで尾いて行つた。貰の空箱の中には色彩した西洋婦人の寫眞が這つてゐる。咽喉が痛いかして阿兄は其日薄絹の幅廣布を卷いて行つた。夫れが已うなかつた。

『彼はな、雨森のすみさんに遣つたよ。此度好物を貰つて來るから我慢おし。』などと孝吉は義理一扁に頭を撫てやる。鶴子は已う胸を一ぱいに爲ながら態と無言で床の伸べられた仄暗い房へと來ると、其處でしく／＼と泣きだしたのである。何時の間にか其床の中には母の軟かい息が通つて來る。眼を開いてそつとして眺めると温かさうな長い身體が被衾の上に俯伏しになつてゐるのである。

『お母樣。』ふと、悳う言つて阿兄が這入つて來た。其開けた襖から送り込む次の間の明りは、床の上の母の背を照らす。鶴子は阿兄を見ると、態と小さい身體を起して衝と立上る

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さなほも暗い片隅の方へ行つて蹲まるのであつた。

『お母樣。晩くなつた理由をお話しますから些と座敷まで被入して下さい。島田と少し相談したい事もあつて連れて來たんです。あの一件の事です。』謝まつてゐるのか強請してゐるのか解らぬ樣な事を言つて阿兄は母の肩の肉を掴み上げて引起さうとする。其處へ島田も顏を出した。

『如何です。頭痛でも爲るんですか。少し御相談が爲たいんですがね。』などと重々しい事を言つて孝吉の傍に中腰して手をかけんばかりの態度を示した。

『此麼男に何を御相談おしやしても駄目へん。況て學生の身で自分が商賣をするなんて、出來る事ですかいな。』

『ですからさ。僕がやると言つてやしませんよ。立派にお母樣がやつたら好でせう。幸、島田君は會社を止して仕舞つたんですから手傳つて貰つたら頂上だし。……』

此島田と母との間に成上つてゐる諾、夫れを何處までも孝吉は知らぬ事として過さうとした。頓て母も極り不可な顏を爲て、少し風邪氣味な咳もしながら起き上つて行つた。

鶴子はひとりで床の中へ這入つて行くと、又身にもちぎれぬ程の悲哀が波を打つて來た。此麼夜となると何より故郷の老婆が戀しい。あの皺だるみのした眼元を火かげの方へ

向けて、當惑した樣な聲をしながら、何うして此悲しみぶかい兒の心を樂しく笑はせやう、と云ふ樣な心持ちが垢汗れのした袖に抱きすくめられ乍らよく呑み込めた。忝けないと思ふあとから理のない同じ樣な涙が流れて出る。頓て鶴子は其寢卷の上へ平常着の被布をはづして被るとおづ〳〵として客間の次の間の方へ忍んで行つた。

『誰だい。』と中音で物語つてゐた阿兄は振り返つた。

『田舍へ歸り度い。』恁う言ひ告げ樣として鶴子は身體を固め乍ら大きな眼で大人の姿を睨付けてゐる。

『大事なお話中やよつて邪魔おしなや、已う二三日の間に大きな店でお商賣が初まるのえ。而したら鶴ちやんも賑やかになる………』恁麼事を母は言ひ言ひ立つて來た。

十九

小學校が午前授業でなほ日數多く通學せねばならぬ七月に入つて間もなく、鶴子は上級の人々から已う暑中休暇の近づいた事をきかされた。何の級にも試驗が始まつたやうである。頓て上旬のある二日間は鶴子の級の試驗日だ。作文、數學、ばかりか例の體操と唱歌までも平常點を乘り越えねばならぬ、など丶他の敏捷な娘等と同じ事を考へさせられた。恁う胸の張つた、次第に深い肩揚げの下から伸びわたつて行かうさする樣なすこやかな腕

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

步調たゞしいあるきぶり、夫れ等を考へると迚も體操は駄目であらうと思はれた。夏草の繁る廣い運動場の片隅に二組を一緒にして何時も體操の時間は始まつた。黑く、細長く並列する場所は丁度花壇の正面になつてゐた。花壇の右手には又背高い葡萄棚がある。白く青芝の上を光る夏の日は此葡萄棚の上を照らし、其下は實に清い綠陰を作つてゐた。上級生の頭は丁度其邊となつてゐる。鶴子は單調な芝生にきら〳〵と光りわたる日光を凝視てゐた眼を頓て背後の花壇に移す。色鮮な西洋草は强い日射の中を絢爛として咲き亂れてゐる。

『わき見をする人!』と注意する高い敎師の聲も耳に來ない。垂直に伸ばすべき兩の手はいつの間にかだらりと力が拔けてゐる。頓て鶴子は其順番に呼び出されて多くの前面をひよろ長い首の細い、背丈より他の發育の總てを怠つた樣な姿勢をして、今一人の友達と共に步いて行つた。

此苦しい一時間ばかりか、頓て發表された成績表には極めて低い處を傳つて行く藍色の線の終點に小さい名が朱で書かれてあつたのを見出した。けれどもまだもう少し低い處を傳つてゐる線が二三本ある。其線の所有者の名を讀んでから鶴子はそつと人々の影にかくれた。校堂では間もなく終業式と祈禱とが始まつた。敎師はみな一人づゝ檀壇に上つて輕

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い別れの辭を述べ、又は祈禱をする人もある。受持教師に別れるといふ事が長い月日を親しんで來た人達には堪へがたい事かして中には歔欷く音を洩らしつゝアーメンを唱へる人もある。生徒總代としての答辭を述べる高等科の三谷が袴を長く引づる樣にして生徒席の前に立つた。其顫ふ樣な澄みわたつた聲音を靜な廣い校堂は只一音の語尾さへも洩らさじと息をひそめた。

此終業式が濟んで後家に歸ると、何の間も埃り立つて、道具はあらゝかに投げだされてゐた。小さいお雪までも襷をかけた儘で幾度となく使ひにとて門を出て行く。

『轉宅だよ。』と阿兄は言つてから、須て迎に來た俥に小さい物を出してのせて、夫れへ鶴子の身體も運ばせやうとした。

『先方には母樣と島田とがゐるからね、而してまだお汝の知らない姉さんの樣な人もゐるし、西陣の阿兄さんも來てゐる筈だ。』

此西陣の阿兄さんといふのは阿姉の良人だ。鶴子は學校着を更らに縮緬の着物ときかへて俥に乘つた。錦隣學校の横を通る時、丁度京都へ着いた日に平さんと相乘をして此前を通つた事を思ひ出した。其後の平さんは好きな女と伊勢の國まで落ちて行つた事を大人の口から偸みきいた。眦を細くして兒供になつかしむ樣な平さんの顏は已う見られない。な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どと鶴子は思つた。

頓て俥の止つた家は、電車の通ふ寺町であつた。京極へ通ふ折には必ず通らなければならぬ賑かな町だ、と鶴子は心の踊るのを覺えた。

二十

岡崎から比べると其家は如何にも商家の樣に出來てゐて、庭なぞは僅かに金魚を入れる小さい池をめぐつて三四本の樹が青く繁つてゐた丈だ。夫れでも只賑やかなのと周圍の物音の騷がしさとで陰氣に傾いてゐた子供心は飛び起きたかの樣に俄かに勢氣だしたのであつた。其處で四五日すると老婆は高槻からやつて來た。岡崎の家はやはり借りた儘として其處では只一人老婆を棲まはせて置かうといふ阿兄の考へだと、老婆は鶴子に言つてきかせ淋しげに其方へ歸つて行つた。

寺町の家では島田は已う家人の如く入り込んで來て大きな膝に前垂なぞをかけてゐたりした。島田は單獨に問屋へ出掛けて行つて總てのかけひきをやつてゐる容子であつた。大きな硝子戸棚のは種々美しい色彩をもつた煙草の袋が並んだ。

其頃の煙草の廣告は華美な點に於て遙に化粧品の上にあつた、天狗商會から出す卷煙草の廣告のびらは軒端をめまぐるしくぶら下つた。夫れがみな西洋女優の美しい畵である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

祝開業と白抜きした紅提灯の下で、手傳に來た人々はみな赤い布を八捲にした。其日も祝を贈つた人々を招いて二階の方で小宴を開いた。阿兄の例の女は已う圓髷なぞに結つてゐた。

『菊勇さん。』と人に呼ばれると、

『私は巳う藝者やおへんのすえ。』などゝ云つてゐた。四五人の藝者に混つて、菊勇の家からはお福がやつて來てゐた。北園も二三人の美術學校の生徒と共にやつて來て、

『若さん。若さん。』などと呼ばれ乍ら飲み浸たるといふ様なやり口で坐つてゐる。

鶴子は派手な紺絞りの浴衣を着た母に尾き絡つて店の間と二階とを往復した。而して床を伸べて貰つて寢に着くと、丁度其枕元は便所に通ふ入口となつてゐるため、醉ひつぶれた若い學生は藝者の手燭にすがり乍ら無作法に通つて行く。人のゐない戸袋の前では嘗て見た事のない様な異しげを姿が僂んである。そつと鶴子は起き上つた。女の方は咲松と云ふ藝者だと思ひ出す事が出來る程大きい聲を使つてゐるけれども、囁いてゐる男が誰か少しも解らなかつた。

『咲松さん。』『慈う言つて阿兄は明るい洋燈を有つて這入つて來た。白い衣物の上に荒縞の袴を着けてゐた阿兄は大きな涼しい眼を光らせ乍らそつと其洋燈を鶴子の枕元に据えた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其開けた葭戸の入口からはまた圓髷の菊勇がそつと偲び入りに姿を見せた。

『咲松さんは中村はんとお話しゝといやすのやろ。』恁う言はれて始めて阿兄も男の方が中村といふ美術學生だといふ事が思ひ當つたといふ樣な顔付をして見せた。頓て二階の方で破物を毆付けるかのやうな激しい物音がした。夫れをきくと審がり乍ら廊下の人も靜かに二階へと上つて行つた。鶴子もそつと床を偲び出た。丁度臺所で料理の仕末を言ひつけてゐた西陣の阿兄は鶴子を見ると抱き上げる樣にして髯ぶかい顔を額の處へ持つて來る。

『川元さん、二階では北園さんを撲つた人があるのやさうどすえ。』と告げに來た手傳の男にそつと苦笑を見せてから、

『西陣の阿姉さんとこい行きまへう。今晩は是非とも連れて歸りますせ。』などゝ戯れ紅木綿を捻じて頭に卷きつけると又店の方へ顔を見せにと出て行くのである。まるで逆上る樣な眼をしてゐた母は何かすると島田に對する露骨な語を他人まへを忘れたかの樣に使つてゐた。

二十一

開店式があつて翌日からは島田が例の前垂がけで丁場に坐り仕入と賣上げとの兩方を執てゐた。母は母で水々しい銀杏返しに色繻子なぞの帶を紺地の衣物の上に捲きつけて帷子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の暖簾の前で葉巻の箔を結め替へたりなぞした。

昨日の群衆は拂つて行つた價以上のものを激しい景氣に誘惑されて獲つて行つた而已でなく中には景品棚から崩されて落ちた石鹼をまるで土塊の如く蹈し潰たり、新らしい硝子戶にはこつぽと穴の空いたのや、又は薄ひゞの入つたのやらを出した。夫れを阿兄は高い聲で泊つて行つた友達に面白さうに話してきかせた。

夕餉の料理はお雪と母と岡崎から手傳に來た老婆との手で出來上つた。灯の這入る頃はぼつ／＼客足の增して行く頃である。夫れにも拘らず島田も阿兄も手傳の男一人に任せて新らしい疊の上で膝を崩す。茲では膳を止して大きな食卓一個を替へられた。夫れへ田舍の家で親先から傳つた古薩摩などの大きな皿が並べられた安物の醬油入に隣つて寒山の德利なぞが出された。

『隨分古いものが有たらふね。』と島田は少し眼をかゞやかせて微笑んで見せた。

『死んだ亡父は君、さう深い趣味なんかありさうにもなかつたがね。骨董道樂をやつたのは祖の方だ。此人は君、笛の名人で俳句も面白いのがあるよ。』眼元も巳茫と染め乍ら久しく口にしなかつた古い談を持ち出さうとした。恁う言ふ何げない處で何げないふりに談つても、やはり孝吉の心は咎めた。野心家で實行家で謹謙であつた亡父を思ふと、妙に遠い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

處に自分は離れてゐるような氣がする。と然又島田に語つて見た。

『まだ君は若いさ。』と島田は慰めるやうに云ふと、

『さうだね、亡父の家を持つたのは二十四だらふ。俺はまだ其年齡には二年間あるからね。』恁う言つて又こぼれる樣な盞へ口を當てる。

『お汝まあ、あの葉卷が一番よう賣れるな。』恁う言つて先刻から店にゐた母は這入つて來た。

『一杯何うです。』と島田は眼をあげて母の方に語ふと、孝吉も其盞になみ〳〵と措き注ぎしながら。

『僕か暫く見て來ますからまあ悠然お食りなさい。』と言つて起上る。島田は慌てゝ其大きな手で袂を採り乍ら、押し退けて出て行くのだつた。

『まあお前こそゆつくりおあがり。』恁う母も慰らふやうに語ふ。少量な酒は直ぐまわる。已う飲れないと言つて飯を喰はじめると、母はまた改めて別にとつてあつた鯛の子を取り出した。

『此麼ものがあつたのですか。』

『お汝にだけ殘して置いたの。鶴子が欲しがつてゐるさかい少しおやり。』恁う言はれて孝

吉は自分の箸で鶴子の小さい皿に分けて遣る。

『やつとまあ沈着たな。』と食ひ荒らされたもの丶片付けをして了つて、頓て自分も箸を執り出した母は恁ういひ出すと、暫く無言で眼で答へてゐた孝吉は、

『まあ見て被居やい。是からですよ。貴女の立ち行くだけの事より夫れ以上の事をして見せますからね。』

『まだかい。』恁う言つて島田は這入つて來た。

『いやお待ち遠さま。』と孝吉は踊るように立上ると入替つて出て行く。島田のために熱めてあつた銚子を取つて來た母は、默つて眼で知らせて盃をとらせる。總てに平氣な島田は母の前にある福神漬へ自分の箸を持て行くと、又無言で干した盃を突き出す。恁ういふ夕に向うといふ事が二人には新らしい樂しみを味はせたのである。

二十二

『夏の芝居は犬も食はん。』恁麼事を言つて西陣の阿兄は阿姉の前で憎まれ口を叩いた。

『利さん、夫れは餅の間違いで せう。』恁う孝吉は言つて、まあ一度秋月の藝も御覽なさいと言ふ樣な事を語つた。

『さあ、鶴ちやん。行きまへう。』と阿姉は心持ちを良人へ對はせて急立る樣な風をした。

一日の休日を利用して暑いのに上加茂までも參詣した。而して家族のために賑やかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一日の休日を利用して此暑いのに上加茂までも參詣した。而して京極あたりで花やかな夜を更かせようとて丁度通り路だから鶴子を誘ふ爲めに立倚つたのだと母に挨拶をする。

『まあ、羨望ことわいな。』と愛嬌ぶる母は若々しい眼付をして、娘夫婦、といふよりは親しい人の家庭を見る樣な心持ちを抱いた。

『何どす、御一緒に。一幕でもおつきあいやすな。』とすかさず西陣の阿兄は付け足した。鶴子も輕く化粧して貰つた顏をつき出して、人々の前へ膝を入れる。開演が五時だと言ふのに夕餉も辭退して二人は頓て鶴子を誘ひ出して門を出た。

棧敷に這入つて後も幕間となると、二人の談は寺町の家の狀體へと落ちて行つた。鶴子は珍らしく不可思議な舞臺の樣子に眼を見張り乍ら、此姉達二人の談もきゝ洩らさじとして母に對する二人の評なぞはまるで友人の墮落でも見るように用捨もなく罵つて行つた。

『些とあの髮を見ちやつたか。まるきりお汝より若う見えたやう。』德う阿兄が言へば、姉は姉で、

『まあなあ、然うしてあの言はゝる言葉が何です。がさ〳〵するばつかりで、些とも沈着かすになあ。』

『而してあの島田が嗅い男やろ。』と言ひ掛けて不意に高く笑ひ出すと、何事か姉の耳に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

口を持つて行つた。而してまるで其場の事を眼に描く如く微笑しながら。

『なにもあゝまで見せつけいでも好やないか。流石に下手な處があるけれども嬉しい時はあんなもんやな。』

此れには些と姉も答へる言葉がなかつた。夫れが常から自分の眼に卑しく見えてゐる淫蕩な良人から出る言葉だ、とふと姉は氣付いた樣に口を噤む。

花道をなだれるように往復する舞子の帶、夫れが第一鶴子の眼に入り易かつた。狹くるしい升の方には友人の樣なお下髮も見える。若し此麼處で友人に逢つたら、と鶴子は胸を騷がせた。顏自慢な阿兄に似た男が棧敷の隣の方に占めてゐた。其處へは入れ替り立ち替り藝者が這入つて來る。ふと咲松が其中に混つてゐるのを鶴子ばかりか西陣の阿兄も眼をつけた。咲松は薄絹織の褄をもち乍ら棧に添て來て顏を差しつける阿兄とひそ〳〵物語つてゐた。頓て咲松が立つて行くと、阿兄は淋しげな顏をしてゐる姉に向つてひそ〳〵話はみな寺町の孝吉の近狀をきいてゐたのだと言つて、

『あの菊勇の他にまだ二人あるのやさうな。』などゝ聞たばかりの妓の名を言つたりした。

頓て夏の夜も冷え冷えと更けて行く。大詰の場は止して三人は外に出た。木屋町に廻つ

て菊水まで歩いて行つた時は已う高瀬から來る風もぞつと肌に浸みた。歸途は姉夫婦の伜へ二人の膝の上へ割つて這入つて寺町まで送つて貰つた。歸ると店を閉つたばかりの家人はみな次の間に集まつてゐた。其處では花が始まつてゐた。咲松の事を言つて聞かせると、阿兄は苦笑して、

『我家の客だと思ふから咲松だつて採つてゐたんだ。川元の奴失敬な。』恁うみなの前で輕く吐き出すように言つて笑つた。

二十三

休暇中に親しんで勵んだ琴は驚く位に進境を見せて、茶音頭なぞは樂に獨りで調べる事が出來る樣になつた。

店を開いてから訪ねて來る友人は妙に岡崎時代と違つて行つて、美術學校の方よりは醫學生の方が極だつて增えて行つた。然麼人達は阿兄のゐるとゐぬとに頓着なく狹くるしい店先きで腰を下し高聲を擧げる。そんな連中は高價な葉卷を平氣で買つて行き、惜しげもなく良い匂を燻らせる。

次第に阿兄は家に姿を見せなくなつた。岡崎の家へ勉强室を作るからとて出かけて行つたなり二日も歸つて來ない事がある。元より岡崎へ訪ねに行つた使は老婆の只一人寂しく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

留守居してゐた事を告げたきりである。最初の内こそ珍らしかつた商賣も、次第に其刺戟を失つて行く容子である。然ういふ風な處へ、何ういふわけであるか島田の姿も家內から遠ざかつて終には已う悉かり見せない四五日も出來た。極稀にやつて來ても母の方を深い惝恍でさう輕やかな心持にはなれぬ、といふ風なそぶりをあの大人たお雪が見いだした。お雪も此頃では然ういふ事ばかりに眼を光らせてゐる手傳の男の輕い口から陰言として敎はるのである。母と此男とでは迚も店の激務がきれ廻りさうにもなかつた。丁度さうした頃島田が始め家庭に入つて來たような調子とは少し異なつた意味で、多田といふ阿兄の友人が、稀に見る親切と而して何故か心を惹かれる、と言ふ風な態度で接近して來たのである。他の親しみに近よる友人が遊樂の友として阿兄を訪ねに來るとは違つて、多田は阿兄の居ぬ時でも靜かに家內の方へ這入つて來た。午餉を一緒にしたり、夕餉の卓には持參の葡萄酒を拔いたりした。次第に泊つて行く日が出來た。注文の小包を發送したり、丁場に坐つたりした。尺八も少しやる人で鶴子の六段に合奏する時もあつた。

『氷を飲みに行きまへうか。』恁う言つては京極へと連れて行く。子供の好きさうな曾我の家の二輪加なぞを撰んでは這入つて行く、然うして夜更けて歸つて來ると中の室で家族と共に床を並べて貰つて寢た。夏季休業には毎年故郷で暮す人ださうなが、今年は自から進

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んで遊びに耽けるつもりだ、などゝ言つては喧しい工場の机に筆記を擴げて見たりしてゐる。遠慮がちで阿兄に一つ下と言ふ若々しい處が紅んだ頬や眼元に漲ぎつてゐるけれども、其控ひ目な沈痛な調子が何うしても子供に好かれる質ではなかつた。

或る日なぞは多田が花菖蒲の美しいのを一束持つて來て少時く裏口の桶に浸して置いた。其處へ島田は何の氣なしに遣つて來ると、鶴子は其懐を覗く樣にして可懐しがつた。店の室で語らふとする人をお雪と二人して裏口まで引ぱつて行つた。丁度、岡崎の椽端で面白い話をきいた、それを二人は思出して話をせがむだ。

『今日は多忙いから此度來た時してあげる。ね、多田さんにしておもらひ。多田の方が上手だらふ。』此麼事を言つて追つ拂はうとする。

『あら、多田さんみたいな淋しい人は大嫌ひですよ。』

などと鶴子は戯れて桶に浸つてゐる菖蒲の花芭を叩きつける。

次第に島田が遠ざかつて行くと、同じ樣な形で次第に阿兄も足繁く外に出て行く。中の間で母と鶴子と泊つて行く多田とが簞笥の方へ枕を揃へては二三夜續けることもあつた。曉の寒さば子供の眼は明晰りとめざめることがある。まだ豆洋燈が消えずにある。ふと母の軟かい肩に大きな手の垂れ下つてゐるのを見つけた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二十四

赫と熱りかゞやく眞夏の日中は、臺所の柱まで乾燥いでゐた。何處に坐つても、自分の身其者が熱體かなぞのやうな氣がして家中行きどころがない、と云ふ樣な目に逢つた。午の前後はさすがに客足も稀薄だ。其間はみな井戸端へ椅子を運んで腰かけたり、風通しの好い暖簾の下へ寢轉がつたりしてうす〳〵と眠つたりした。手傳の男と多田とは莨を飮む間をあける位ゐで氷塊ばかりを口に啣んでゐた。怯弱な母の身體はさうなるとめつきりと脆くなつて輕い腦病の樣な調子で只うつ〳〵して暮して行つた。でも夕から夜になると俄に氣力を覺え出して深夜を更かす、と言ふ樣な事は普通の事のやうに一時をきくまで鶴子の眼も塞がらない。

土用がすぎても暑氣は何處かの町中の隅にひそんでゞもゐたかの如く、一層度を加へるような日さへ來てゐると氣が付いた頃には已う九月が來てゐた。上旬が夢心地で過ぎて仕舞ふと、直ぐ鶴子は又女學院へ通はねばならぬ事を知つた。

始業式の翌日から先學期の讀きとなる處を開いて國語、數學、其他の事を敎はらうとした存外他の友人はみなまるで習ひ終つた事のように調子輕くやつて行く。びく〳〵してゐる内に鶴子の番は來た。づゝと末席になつてゐる順番は大抵人々の讀み盡し、口拍子をと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

辿て行つても讀み易すがらねばならぬ筈だ。夫れが鶴子には出來ない。暑氣と戰つて何れほど勵み又は怠るまゝに暮したかと言ふ事が此一を以てしても解る、と云ふような眼付をして敎師は生徒の一人一人の顏を見つめた。

數學の方は分數を悉く終つて次に比例に這入つてゐた。敎つた通りに眞似てゐるようなものだと思つてゐるのに夫れがみな正確お答を得てゐる。此數學の時間ばかりが鶴子の息をつぐ時であつた。

先學期に親しんだ友達もづゝと良好な成績でおさまつてゐる人と思ふと僅かな事にも懸隔をとつて行つた。知らぬ間に未席連の團群を作つてゐた。而してお互ひに何處となく幼氣な調子を離れて過戲場に出ても前の樣な愚かな戲れも出來なくなつた。永い夏の間を別れてゐた運動場の銀杏樹は悉かり暗く繁つてゐた。嵐の吹き止んだ朝なぞは軟かい芝生の上を一面に葉を撒き散らしてゐる、夫れが敎室の窓から見えた。天鵞絨模樣にあるような可憐な葉の正しい精細な纖維までも、其窓の處から見える樣である、時間が終るとみな我勝になつて其下の處へ集つては拾ひ上げた。拾ひ上げたのをみな敎室へ行つて見せ會つた。夫れへ言ひ度い事を少しづゝ墨で書いてそつと次席から次席へと廻す。殊更らそれを授業時間に撰んでやつた。敎師の眼を偸んで廻つて行く靑い銀杏は面白い字を載せて來た。中

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

には「男と女とが戀をしました。」なぞと誰れが發出したか解らぬ樣な文字も來た。

午の休みの時刻が來ると、

『隱ん坊する方は、好い會話を敎へてあげますから例の談話のあつた運動場の方へおいでなさい。』『惡う上級の寄宿生が傳へて行つた。發起者は定村であると云ふ。『何うかして會話の力をつけ度い。』といふ西洋婦人の希望が定村の苦心を待つてゐた。夫れには興味のある遊戲の中へ艱難な辭を入れゝば、尤も面白い結果を見やうといふのであつた。だけど誰一人行かうとは支ない。

『隱ん坊なんて、つまらない。』『惡うみなの眼は高く止つてゐた。次第に刺戟は大人びた處へと向つて行た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

藝術と春 ―加藤 綠―

華やかな温泉場の晝は靜かであつた。

悦子は上氣した顔を下向けて澤山の白い布を膝の上に亂して針を運んで居た。

直ぐ目の下を流れて居るM河の水の音が間斷なく快い調音（メロデー）を悦子の茫とした頭腦に運むで來る。靜かな眠氣を催させるやうな眞晝の音色が悦子をして總ての意識を不明させた。

悦子は過去も現在もはた未來も思はなかつた。唯五里霧中に逍遙ふと云つたやうな理由の判らない氣持がして茫然と榮樓の樓上で明日の夜自分が扮する女王の服を縫つて居た。永い間女の平凡な務め、母と云ふ妻と云ふ名の許に暮すに馴れて來た悦子には、自分を生かす爲めの藝術の滿足を得るべく舞臺に立つと云ふ事は、什うしても不思議な奇蹟のやうな氣がして信せられなかつた。

既う大方服が出來上つた時重い足音がして這入つて來たのは古内さんであつた。

『まあお早う御座いましたこと。』悦子は笑顔を上げた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『是れを持つて來ました。』
大きな白木綿の風呂敷包みを古内さんが重たさうに座敷へ持ち運むだ。
『まあ貴君が持つて來て下さつたんですか嘸ぞ重う御座いましたでせうね。』
『鬘屋に賴むでもどうせ電車賃を出さねばなりませんからね、人車を奢つて梅田迄持つて來て、あとは何、電車でしたから。』と云ひ乍ら左内さんは風呂敷包みを解いて巾から鬘や其の他佩劍、帽子など取り散らした。
『此の鬘御覽なさい大變良くなつたでせう、貴君の御注文通りになりましたよ、』と云ひつつ女の鬘を自分の頭に載せて太つた指で顏にかかる毛をかきやつて
『私によく似合ふでせう。貴女は顏がお小さい方ですから此の鬘が一寸大き過ぎます私に丁度いいですよ。』と大きな脂ぎつた顏に愛嬌笑ひを浮べて
『私これで寫眞を映つて見やうと思ひます』
『エヽ、よくお似合ひですわ』と悅子も微笑した。暫くして
『坊ちやんは?』と左内さんは悅子の子供の春雄が見えないので思ひ出したやうに斯う聞いた。
『女中が連れてお隣室の軍人さんのところへ行つたやうです』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『さうですか。』

『眞當に今度は大變お世話樣になりますのね。子供など手におつけになつたこともおありじやないでせうのにね。』

『でも此の頃よく私に馴れていらつしやいましたよ。然しまあ有難いことに皆心が一致して居ますからね、何私が坊ちやんをお守りする位何でもありませんよ。貴女の努力をお願ひするより他ありません。』

悦子は古内さんに斯う云はれると、何だか急に不安になつて來た。

『あら男の鬘が一個多いやうですね。』と悦子は西洋風の男の鬘を取り上げた、

『ああそれですか、石田君のを一個餘計に借りて來ました。何だか帽子より鬘にしたい風でしたから。』

『ああさうですか。おや蒲見さんの大變良うなりましたこと、これなら申し分なしですわ。』

『鏝を當てたらすつかり良くなりましたでせう。』

縮れて垂れた男鬘を悦子は滿足相に手にして居たが古內さんが手に渡す女の鬘を自分の頭に載せた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『額の生え極が先日髮屋で貴女がおつしやつたやうになりましたでせう。』

悦子は鏡をとつて見て居たが

『ほんに日本流の造つたやうな富士額が直りましたわ。まあこれで我慢しませう。おや髮も長くなりましたこと、道理で隨分重いですね。』

悦子はこれを冠る時の心持ちにならうとしたが何だが其の氣になれなかつた。

『服も出來ました。』

悦子は立つて眞白い長い長いゆるやかな服と鬘を脫つて頭から着て見た。

『何ですか變ですのね。』

『變なことはないですよ。鬘を冠つて王冠を載せて御覽なさい』

『王冠出來ましたのでせうか。』

『福澤君が今日持つて來る筈です。旣う來て背景を描いて居るでせう。』

『兎に角稽古も今夜限りですから、眞式にして見度う御座いますのね』

『徹夜ですね。今夜は、』

『エヽ。』

這麼話をして居るところへ悦子の良人公一が這入つて來た。

『古内さん、お早かつたですね。』と公一は稍いつもより蒼白い顏をして古内さんに挨拶した、

『什うでした?』

『駄目です。仕方がない僕と日比谷君とがやるより。』

『まあ高井さん駄目!?』

悦子は鋭い聲で呼ぶやうに云つた。

『矢張忙しいのですね。それなら早くさう云つて下さるといいのに。貴君には御迷惑ですね。社の方の首尾が惡くなると、』

『何、構いません。』

公一は稍物思はしげな顏をして硝子越しに河の水の流れるのを茫然見て居たが、

『今日家へ一寸行つて來たんです。さうしたら大變なところへ行つてしまつて。』

二人は公一の顏を見た。

『昨夜盜人が這入つていろいろの物を取つて居たので巡査が來て居たところでした。』

『まあ。』と悦子は顏色を變へた。

『それは大變でしたね。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『何、捕られたつて知れたものですけれど。』

公一は平氣を僞うとした

『隣で今朝見付けて公番に告げた相です。』

『私が出る時にお願ひして來ましたから。』

『お氣の毒だつて大變同情よせて居たよ。』

と公一は悦子に云つた。

『それで何々とらたんでせうね。』

悦子は驚きと悲しみとに惜しさに聲も亂れた。

『洋服を着て來やうと思つて歸つたのにそれがないんだ。玄關口に掛けて置いたマントやショール、而して時計もなかつたし、押入の中の行李が引き出してあつたが僕には何が失くなつたか判らないんだ。』

『まあ、あれが私等の財産ですのにね。』

古内さんは氣の毒相な顔して何とも云へなかつた。

『まあ過ぎ去つた事は仕方ないさ。幾度繰り返しても。』

公一は既う普通の顔色に返つて諦らめたやうにそれよりも今は重大な用事があると云つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たやうに他の必要な話を古内さんと始めたのであつた。

悦子は廊下に出て日影が落ちて行く冷たさうな薄い光を河の面に見て居た。櫻の白い影が松林の間に見え隱れして、新温泉場の大きい建物が軟い春の空氣に包まれて物靜かに河の岸に聳えて居る。緑の松林の間にチラチラと萬國旗が飜つて白いベンチや東屋なども見える。幾千と云ふ人々が此の狹い山の間の小さい温泉場に居るとは思はれぬ程靜かに、山は默し、河は絶えぬ響を流して居る。

悦子は亂れに亂れた心を押し鎭めやうとした。明日の初舞臺の事を思ひ、又盗まれたものを思ふと何だか判らなくなつて不安、悲歎、小さい心は暗く暗くなつて行つた。

『藝術の爲め何事をも犧牲にするのだ。』と心に叫むでも見た。良人が結婚以來藝術の爲めには何物をも犧牲にせよと自分に强いた事も思ひ浮べた。それ故に有る物も無くし、それ故に苦しい目もして來た。良人が非藝術な生活をせぬと頑張つた爲めに貧しい貧しい生活もして來た。その爲めに父とも爭つて來た。文藝と生活とを一致させやうと如何程努めて來たことか、それを思ふと悦子は今度の事業を最も悦ばねばならなかつた。

夕方迄に背景畫家や役者も大方榮樓の三階の一室に集つた。發起者の田西君は始めて出

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て來て眞面目な相談にも乘らず女王の扮裝などして見て騷いで居た。春雄はともすると皆の熱心な會議を遮つて兵隊の眞似などして皆の緊張した心を緩ませた。

皆が不參の役者の噂をして居ると噂の主人公の間野君が見馴れない黑紋付にセルの袴と云ふ姿で女中に導かれて一座の前に現れた。

『やあ、やあ。』と云ふ叫びが起つたが間野君は普通より小さい身體を堅くして入口に坐つた。而して自分は今奈良で興業して居る何うしても出られないことを濟なさ相に詫びるのであつた。

役者が足らないので困つて居た人々の顏には一時喜びの色が現れたが、又失望の色に返つてしまつた。

間野君は間もなく歸つた。新温泉にはいつの間にかイルミネーションが點いた。河に面した涼み場にはポツポツ人の姿が電燈の光に浮いて影のやうに見えて居る。河の水は赤く流れて長い橋の上にも人影が繁くなつて來た。悦子は春の夜とは云へ身に泌みるやうな河風に兩袖をかい抱いて欄に凭つて河を隔てた繪のやうな黃昏の景色を眺めて居た。其の心は和かに呼吸は極めて靜かに、眸は新温泉の樓上に向いて居た。背後では元氣の良い青年等の聲がして居る。星は皆一樣な思ひを囁くやうに漸く青みがかつて行く空に瞬いて居る。

悦子は急に自由な華やかな「青春」と云ふものに乘つて限りない空を馳つて行くやうな陽氣な心になつて來た。

夕飯が濟むと皆賑かに榮樓を出た。鬘や其の他の道具を皆分擔しながら暮れた道を明い方へと橋を渡つて行つた。

田舍茶屋には相變らず客が賑つて居た。其の前を通つて新温泉の入口の方へ廻つた。其處には客が立て込むで下駄番が騷しさうだつた。大方歸り客のみであつた。

『何だ、明八日午後三時よりとあるぜ。又變更したのか。』と背の高い日比谷君は入口の柱に掛けられた廣告の紙を見て佇むだ。

『午後三時より女優中心新らしき劇『幻の海』と誰かがそれを讀む。

『電氣を使ふのだからなるべく夜にして貰ひ度いなあ。』と日比谷君の悲しいやうな聲がした。

『そんな筈はないがなあ、』と公一が不審がる。

『でも夜だと見物人がないでせう。』と古內さん。

『何、構ふものか、見物人なんか一人だつてなくつてもいい、僕等は僕等の藝術慾をさへ滿足させれば足るさ。』石田君が演說口調で叫ぶうちに暗い露路を廻つて事務所の前へ出

た。

日比谷君が事務所へ這入つて何か小言を云つて居たが直ぐ出て來た。

家族温泉の廊下から普通温泉の廣い廊下へ出てパラダイスの舞臺の方へ行つた。温泉内の婦人博覧會は丁度日數の半分を過ぎたところ、既う客も少く大方湯に入る目的の人のみが休憩室の美しい人形などを見て廻つて居た。

色々な滑稽鏡の前を過ぎて圓形廊下を渡つて行くと既う陳列場は閉ざされて居た。

舞臺には誰も見えなかつた。

造花の櫻が棧敷の四方に飾られ赤い提灯の火が電燈の光と相ひ照らして人氣のない舞臺をあかるくして居た。

化粧室の大きな鏡の前に立つて悦子は髮を解いた。蒼白い顔に亂れた髮が重さうに眼が大きく輝いて映つて居る。今日は顔は別に作らず鬘衣裳をつけてして見る事にしたので、人役者は各々自分の仕度に忙し相、悦子は何とも云へぬ滿足と希望に胸がおどつて居る、人々の顔にも藝術に對する憧憬が現れて元氣が快いほど誰もの心に溢れて居るのが知れた。

『おい加賀君、君高井君の代りをやるんでせう。』と今迄舞臺の方へ行つて居た日比谷君が悦子の衣裳をつけた姿を見て居た公一に聲をかけた。

『やらねば仕方がないよ。君。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『やらねば仕方がないよ。君。』

『やりませう。僕もやる、今夜中に暗誦しませう。』

『僕の持場は一番容易なところだからね。』

『今夜は徹夜だ。しませう、しませう。何君、僕は此の位の事には馴れて居ますよ。』

斯道には最も經驗のある日比谷君は元氣よく云つて又忙し相に舞臺へ行つた。舞臺からは鐵鎚の音の間に賑かな聲も響いて來る。手傳ひに賴むだ大工の高い聲もする今迄の稽古とは異つた一種の「芝居」の空氣が滿ち滿ちて、人々の顏にも歡ばしげな色が現れた。

『おい、帆をもつと引け！　おい大工さん、此處のところを打ち付けて下さい。君、福澤君、』

日比谷君の忙し相な聲がしたと思ふと化粧室に這入つて來た、

『福澤君は？』

『舞臺でせう。』と公一が自分の仕度をしながら云ふ。

『居ませんよ、電氣の具合を見度いんだが……電氣係りは居ませんか？』

キョトキョト見廻して去かうとする日比谷君を捕へて

『既う私仕度が出來ましたわ。未だですか』と悦子は白いゆるやかな洋服姿で鏡の前に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

立つて斯う聞いた、

『幕を張つてしまへばいいんです、』

石田君は蒲見君と二人で既う海賊姿になつて劍を拔きはなつて「早く其の劍を拔き放て！返事は其の上だ！」なんかと科白の稽古や見振りに苦心して居る、蒲見君は畵家だけに船長の衣裳に工夫を凝らして居る。四月とは云へ未だ夜などは冷氣が身に泌みる頃、其の夜のみは電燈の光も暖く身を包むやうに感ぜられた。

『さあ出來た、出來た。』と日比谷君や福澤君其の他舞臺係りが這入つて來た。

『初めやう、さあ。』と先づ石田君が舞臺へ飛び出すと蒲見君、公一などが出る。

電氣の月の光が青く舞臺に落ちて、魔術の琴が丸柱に懸けてある。

日比谷君は電氣や何やかやと、稽古は餘りしなかつた、舞臺監督は公一がした。

春雄は此の間古内さんに連れられて温泉場を出てお鮨を食べたり菓子などを買つて戴いて居た。

二廻ほどした。既う十二時が過ぎて居たのであらう夜氣が何となく身に泌みて、あたりが空虛のやうに淋しくなつて來た。夜番の五十位の男が折々出て來て覗いて居た。稽古を濟まして悦子は春雄を背負つて人氣のない、唯京人形のみが薄絹を被せられて立つに居る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何となく物淒い室を通つて事務所の前から外へ出た。冷氣がヒヤヒヤと肌に當る。河風が元氣よく喋舌つて行く一行の中を幾度か吹き通つた。

暖いと思へば寒く、寒いと思へば暖い定めない日が續いた爲め悅子も春雄も風邪をひいてしまつた。公一は尠なからず心配した。聲が出なくなつては困ると種々と注意した。悅子も咽喉の痛むやうな氣がして首卷などして寢た。

四月八日、春闌に、櫻は今を盛りと咲き揃ふて一夜の雨風を憂ふるばかりになつて居た。朝より夜までの箕有電車は滿員、又滿員、美しい人々を大阪から運むで來ては運び去る。寶塚の温泉ある爲めの電車の活動と人出、萬國旗、祝ひ提灯は櫻と櫻の間に程良い色彩を添えて人の心をそそる、悅子は晝の間旅館に心身を休めて夕方五時頃新温泉に行つた。開幕が六時過ぎと定つたので何となく踊る心を鎭め乍ら春雄を連れて又も電燈眩いパラダイス場裡の人となつた。

役者も其他關係ある者は大方揃つて居て悅子を見ると公一は何となく落ちつかぬ面もちして直ぐ仕度を命じた。公一は唯だ悅子の成功を心に祈つて居た。悅子の女王は此の劇のヒロインで大役なので、それだけに又公一は心を傷めた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『おいしつかりやれ！』と良人に肩を叩かれて悦子は落ちついて完爾して見せた。

電燈の眩い大鏡の前に悦子は坐つて先づ髮を鬘下地に結むだ。春雄が母ちやん母ちやんと肩に手をかけて搖すぶる、

『まあ春雄、其麽ことしちやあ仕方がない』

焦る心を押し鎭めたが子供の爲めに容易に鎭まらぬ。

『貴郎どうしませう。』と眉皺を寄せて悦子が公一に訴へるやうに云つた時古内さんが這入つて來た、

『さ。坊ちやん、小父さんといい所へ行きませう。』と大きな腕に抱き上げられて二三度母を呼むだが其の聲は扉(ドア)の外になつてしまつた。

悦子は漸く安心した。見物人は既う騷いで居る。舞臺では忙し相に鐵鎚の音をさせて居る。皆興奮した顏をして化粧室と舞臺を往復して居る。

『おいもう活動寫眞が濟むだから早くしないと八ケ間敷いよ。』と一人が注意して來る。

『既う六時過ぎですが未だですか！』とパラダイス舞臺係員が六づケ敷い顏をして催促に來る。見物席では子供が騷ぎ出した。

人々の心は焦立つて來た。

日比谷君が化粧役で物馴れた手つきで、丁度畫家が繪具を塗るやうに船員や船長の顏を造つて居る。

『一度して貰へば明日から僕がするから』と畫家の蒲見君は日比谷君の手の下で叫ぶ珍らし相に這入つて來た知人友人は立つて見て居る。髯もない二十歳前後の青年の顏は忽ちに髯だらけの赤い恐らしい顏になつてしまつた。

『未だですか。早くして下さらぬと困ります。』と又監督が催促に來る。

『今直ぐです。』と公一は申しわけをする。

『さう早く早くつて云つても無理さ。初日だもの。』と誰かの落ちついた聲もする。

『さあ。君達は服を着るのだ。悦子さんの番ですよ。』

悦子は白い肌を出して日比谷君に向つた。チックを首と顏に塗りつけて固煉りの白粉を羽毛で塗つたすると

『まあ汚い！人形の顏を洗つて白粉をつけたやうだわ』と悦子が云ふ

『今奇麗になります。』と日比谷君は母親が娘の化粧でもするやうに無雜作にポットでポンポンと悦子の肌を叩いた。

『ホー美しい』と誰かが背後で叫ぶ。

『そら白く延びたでせう。』と眞白に群なくなつた悦子の顏と首とを見て日比谷君は得意相にポットを置いた。

『ほんに美しくなりましたわね。』

『これで作りあげたら驚きますよ。』

頰紅をさし、眉を西洋風に書き、目の巴に暗い影をこしらへた。而して目に張りを入れ口に紅を含ませて墨を入れたら全く變つて終つた。

『ほら變つてしまつたでせう。』

悦子は自分の鏡に映る顏を見た。而して忙し相に仕度をして居る友人達の役者を鏡の中から見て何となく人事のやうで不思議に感ぜられた。

『困りますなあ。お客さんが騷ぎますから早く願ひます。歸つてしまいますぜ。』と又催促に來た。

『歸り度い人は歸つて貰つて下さい。どうせ子供や老人が見たつて判らない芝居ですから。』日比谷君か誰かが斯う云つた。悦子は怒つて去つた其の人の後姿を見送つた。

『全くだ。解さない千人の見物人があるより解して吳れる一人の人を望むね。』と物靜かな蒲見君の聲がする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

日比谷君と公一は漸く自分の仕度にかかつた。

大きなピアノの前に音樂係りのKさんが立つて此方を默つて見て居た。

『おい。うまくやつて吳れないといかんよ。』

人々の心は此の言葉に一層緊張してしまつた。

『君しつかり演つて吳れ。君眞違ふと困るよ。』と石田君は船長の蒲見君に云つて居る。

『僕等は危いものだね。』と公一と日比谷君は斯う云ひ乍らも平氣相に見えた。

背後を付ける人を二人定め、電氣の方も具合よくなつて漸く開幕までになつた。田西君が何もせず遊んで居るので開幕前に一寸劇の內容を見物に話すやうに願むだ。

外國でも餘り六づケ敷くて氣受けがなかつたイエッの神秘劇「幻の海」は斯くして初めて日本の素人なる若き藝術家によりて演ぜられた。

其の日は初めての事とて全く稽古になつた位のもの、付けて居る人の聲を受けとるさへ馴れないので出來なかつた役者は稍失望らしく見えたが。それでも魔術の琴の電氣を借りて漸々と、月の光が魔術の琴の爲めに暗くなるところ、眞靑い背景と靑い衣裳の船員、靑いのみの舞臺に立つた白い姿の女王は月の光に凄く見えた。

『加賀君は隨分間違つたよ。而して僕の科白を先へ云つて敎へて吳れるんだものハハハ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

、、、』

『ハハ、、、』

『ハハ、、、』

『まあ先へ云つてしまつたのですか、ホ、、、、』

『舞臺は實に成功だ。實に月の光がいい。』などゝ感心して見て居る役者もある。

『ピアノが靜かに彈つて幕がスーと上る時は實に心持がいいね。月の光が眠つて居るところに蒼く斯う映してくるところは、ね君出て居ても氣持がよくつてね。』と嬉し相に日比谷君が云つた。

寳塚の夜は櫻の花に朧に、人通りも少くなつた頃、新温泉の中のパラダイスの舞臺で演じ終つた試演會の連中は揃つて河沿ひの畦を電車の方へと歩いて居た。

『三日目に成功した。愉快、愉快。』と石田君が飛び上るやうにして云ふ。

『今日は私も二階で見て居ましたが、大變皆さんも舞臺に馴れて來て難なく演られたやうでしたね』と古内さんが例の如く丁寧な物靜かな云ひ方をする。

『什うしても舞臺に幾度も出なければ駄目です。舞臺を平氣で演れるやうになれば從つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て科白も自然の儘が出ると云ふわけですからね。』と日比谷君の經驗らしい言葉

『あれで見物人が幕を開けた時は然くんだ而して殺すの殺さぬのと云ふものだから冷々して居るが終ひには愛だの戀だのつて云ふものだから厭になるんだね。』と日比谷君は云つて白い齒を出して笑つた。

『全くですよ。デクトラが氣狂ひになる迄は舞臺に變化があつていいですけどデクトラがフォーゲルを戀して來てからいけませんの。』

悦子は後の方で斯う云つて櫻の花を仰いだ。

『キッスの爲めのキッスを此の身が許す迄』とデクトラが云ふ時「あ！汚い」と云つて立つたお婆さんがあるからね。』と公一が微笑すると皆が

『ハハヽヽヽ』

『ハハッハヽヽヽ、其の位なものだね。』と笑ふ聲が靜かな夜の空氣を徹して櫻の花片が一二輪ハラハラ慄て散つた

『唇と唇とをつけ合ふより他何にもない』なんか云ふところが可笑しいんですよ。私も終ひには厭になつて演る氣が失くなる時もありましたわ。』

『判らないんだね。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『一體這麼所で演るのが間違つて居るんだ』

各這麼話をしながら櫻の並木の下を行つた。人々の心は樂しい幻を追つて居るやうに藝術と云ふものにしたつて心が浮々して居る。唯々藝術の滿足が同じやうに各の心に滿ち滿ちて其の夜は一層「春」と云ふ感じを軟い櫻の薫りを吸ひ乍ら身に泌みるのであつた。

悦子は何とも云へぬ若やかさが胸に溢れた。而して其の感じを聲に出して思ふ樣笑つて見度かつた。

四人ばかり先に並むで歩いて行く、其の後に日比谷君が一人細長い身體をのそりのそりと運むで行く、古内さんと公一と同じやうに肥え太つた影を二つ並べて地に落して行く悦子は公一の左側を春雄を負つて櫻の花の影が折々電燈や提灯の光に地に横樣のやうに映つて居るのを夢のやうに踏みながら前の若々しい青年の樂し相に歌つて行くのを心ゆくばかり聞きながら歩いて行つた。

間近の山も下を流るゝ河も花も人も大自然の「春」に吸ひ込められて恍惚たる有樣である演劇後祝つて貰つたビールに醉が皆の顔に現れて唯々浮れに浮れて、一人が呂昇の聲色で壺坂をやれば又一人が其の頃浪花座に演せられた「思ひ出」のケテーになりまする。さうかと思ふとフオーゲルやエブリックの科白が突いて出る、果ては俗歌が誰かの口から出ると

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

皆一致して歌ひ出す而していつの間にか櫻の並木道から明い停留所の方へ出た。

電車の中でも此の人々の歌聲が高く桃の花や菜種の花の野や山に流れて行つた。

悅子は其の夜公一と共に電車を降りて小暗い淋しい道を行きながらつくづくと云つた。

『あゝ、今夜のやうな若々しい氣分にしたつていつ迄も居たい。子供も家も何にもない唯一つの藝術あるのみの國に居たいわ』

『全くだね。僕等の生命は藝術にあるんだ藝術があつて家庭あり、子供ありだからね。』

公一が春雄を抱いて急ぐあとから悅子は其の夜の心持を凝乎と抱くやうにしてついて行つた。（完）

戀愛の進化（つゞき）――エレン・ケイ――

二

中世紀に於ける如く、十九世紀に於ても、戀愛の權利の宣言の指導者となつたものは婦人、詩人及騎士――騎士は社會の理想家といふ名義のもとで――等であつた。獨逸に於ては、其最初のものはまづ Romantic School 次は Young Germany 英吉利に於ては Shelley Byron Browning 其他多數の思想家。諾威に於ては、Camilla Collet 其他男子の大詩人であつた。佛蘭西に於ては、――離婚し得ざる結婚が再び輸入されたその反動の眞只中にあつて――Madame de Staël が Delphine に於て始めてこの問題に着手した。元來フランスの學識ある社會は、婦人の天才が社會的勢力として働くことを妨げられてゐるのだが、Mme. de Stail は Corinne（彼女の有名な小說――譯者）や Coppet（彼女の埋葬されてゐる處――譯者）によつてそれを世界的勢力となしたのである。婦人に對する尊敬なるものは只戀愛を勝ち得んが爲の手段を意味するに過ぎないといふ彼女の確信と人生は天才の婦人に對しその何ものより

も美しい夢と、結婚に結ける戀愛の成就とを拒むといふ彼女の不滿とが婦人の世紀を貫く無數の悲劇の序幕であつた。彼女の後に St. Simon の學徒と其他の社會改革家就中佛蘭西革命が戰場に、はた斷頭臺上に注いだ庶民や中流人や貴族や王などあらゆる階級のもの丶血潮がその血管の中を混流してゐる Rousseau の精神的娘などが現れた。有らむ限りの力をもつて眞理に從はむとするこの多數の娘達の勇氣と少女時代の熱烈なる信仰と血の默想と、永遠に對する魂の憧れと、經驗に對する噴火山的情熱とその火山灰——是等凡てのものは George Sand の敎會と國家によつて擧げられたる結婚に就いての告訴に於て吐露されてゐる。この結婚は彼女に云はせれば「法律的强姦」若しくは「誓言のもとに行はれる賣婬」であつた。ずつと以前から戀愛の權利は只特異なもの丶場合丈けは主張されてゐた。ところが George Sand の新しき勇氣は總てのものに對してこの權利を要求し、又ふたりの人間が結合しやうと望むだ時、彼等を結合させるに何の制限もいらぬのはもとよりのこと、彼等がそれを望まないのに强て結合させるのは彼等人間の權利と威嚴を侵害するものだといふことをその時代の良心に刻み付けた。

此時以來戰といふことがオリンプスの山から地上に移された。爾來あらゆる社會救濟者はその影をひそめ、「社會の敵」はいづれもその火の手を擴げることに努めるやうになつた。

George Sand の如き婦人が傷つけられたり、汚されたりした足で途中から引き返すやうな路を空しくも求めた戀愛、Rahel Varnhagen の如き婦人が惱みもし、生きもした戀愛Camilla Collet の如き婦人が懇願し、Elizabeth Browning の如き婦人が實現した戀愛——是等は亦新時代の婦人が等しく夢想するところの戀愛である。

George Sand は St. Simmn の學徒又は近代女權論者の如く戀愛に於ての自由を婦人問題の中心點と見倣した。現時の女權論者はまた彼女の如く萬般の問題に亘つて權力者の信條に反對して自由思想の權利を、武士氣質の愛國心に反對して人類の一致合同及び平和の本原を、或は現在の社會關係に反對して、その改革を主張する。英米、並にスカンディナヴィアの婦人問題は——その信仰告白の最上なるものは矢張り千八百五十四年に出版された「婦人の服從」と題するの J. S. Mill の著書である——單に市民としての婦人の權利を主張するのみで、戀愛的宗敎的乃至社會的の解放を甚しく無視してゐた。斯くの如くして特にスカンディナヴィアに於ては、戀愛の新福音は今や解放運動の指導者のために、冷淡と憤恚とに遭遇せねばならなくなつた。

しかのみならず男子側からの嘲弄と憤恚とはまた新戀愛に對する婦人の全要求の上に落ちて來た。Schopenhauer と Hartmann が曾つて哲學的法式を與へた或論證を以て、靈的

戀愛は自然の幻影であり、婦人が現に男子に要求する戀愛による結合は男子の生理的並に心理的本性に反する犧牲を要求するものだといふことが示された。

とは云へ、新時代の婦人は、嘲弄や憤恚に妨げられることなく彼等が夢想せる戀愛――それはまた詩人が夢想する戀愛である――を說き續けた。

幾千年の間、詩は戀愛を神秘的な悲劇的な力として描いてゐた。然しその同じことを平易な散文で語つたなら、そしてその上人生はこの偉大なパッションなくば無色、貧弱なものであらうと附け加へたなら、其時こそ不道德と呼ばれるに極つてゐる。幾世紀に亘つて詩は戀愛の高尙なることを示してゐる。然るに若し通俗な散文で戀愛は常に高尙なる情緖となり得るものだと敢て云はうものなら、其時こそ無法と呼ばれるに極つてゐる。何故なら、今日の人々にとつては、詩を預言的なものとして考へるといふことは思ひもよらぬことなのだから。

新戀愛は今もなほ種族の維持に對して男女相互間に行はれる自然の牽引である。それは今もなほ打解けた親交によつて自他の辛苦を同時に救はうとする強い人間の欲求である。然るに戀愛のこの永久的本質や、結婚の第一目的を超越して、別な憧憬が非常な力を以て成長して來た。それは種族維持に向ふものではない。實に男性の特質中なる寂寥の感に由

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來してゐる。(その寂寥は心靈の特異なるもの程大きい。)即ちこの孤獨の苦痛から自己の心靈を釋放すべき人間の魂に對する憧憬である。嘗ては神によつて和らげられたこの苦痛も今は同等なるものによつてその安息所を求める。即ち同じ渇望に熱したる眼瞼を見開ける心靈によつて、又はこの世の他國人だといふ感じから自己の心靈を救ふ奇蹟を、戀愛の力で成就する心靈によつて、(その心靈も亦自己の心靈によつて救はれるのだ)又は自己の心靈がその暖さの前にこの世の冷たさによつて欺かれたる外被を去り、何の憚る處なくその秘密と榮光とを表すやうな心靈によつて求める。

かの Kichard Dehmel はこれを左の不朽の詩句の中に約言してゐる。

戀愛とはこの世の迷妄より、はた自己の精神の束縛より離脫せる姿なり。

これと同じ感情は既に前代の多くの人々によつて懷かれてゐたが、その中の一人は Eugene Delacroix であつた。彼は自分の雜誌で、彼が有するどの友達にもその友達が理解してくれた彼自身の姿より外示し得ず、從つて、各の友達に對して別な者とならねばならぬ苦惱に就いて語つた。しかも彼はこの苦痛に對する唯一の醫藥として「汝の力の內なる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妻」といふことを知つてゐた。

然しこの感情が一般に普及し、多數人の意識内に形づくられるに至つたのは新しいことであり、時代の精神にその印象をとゞめたのは現代をもつて始めとする。

此間、人類は絶えずその戀愛の意識的要求の下に深く横はれる戀愛の衝動によつて導かれむとした。人間の官能は心靈の欲求を度外視する肉的欲求によつて刺激される。しかも戀愛の理想の教養は戀愛の本能よりも遙に進歩してゐる。斯くの如くして現代は戀愛の矛盾爭鬪に溢れむばかりである。

その上、なほ附言せねばならぬのは近代人はその鋭敏なる可感性のため益々假面を被つたり假裝して身を守つたり、藝術的に裝飾された鎧を着けたりする傾向を有することである。誰しも他人の惡い場所、例へばいつもむきだしになてつゐるやうな傷、又は何人かによつて動かされた自分の感情などをあまり屢々見せつけられたら生き苦しくなるだらうから隱蔽するといふことも必要ではある。まだ人生は人間の運命及心靈に於て信せられたり、疑はれたりする秘密なしにはその興奮の大部分を失ふであらう。併しそれと同時にこの隱蔽するといふことが戀愛の爭鬪をして其風貌を看破することを益々困難ならしめる。是に於て或種の祕弄（フラアテーション）もその假面を剝奪し、戀愛を目さましめる一つの試みとして役立つ。

併し試みは多くは失敗に終るものである。そして人生はいよ〳〵誤られたる運命を以て滿され、人々はいよ〳〵さもあるべき孤獨のために悲嘆にくれる。戀愛が抱擁の中に身を投ずる外何ものも持來されなかつた場合、人は人生が貧しき天分しか彼に與へなかつたことを以前よりも更に痛感するものである。大多數の人は常に次の如きことを知つてゐる。即ち戀愛とは自己の心靈がみづからの自由を失はずしてその中にみづからの足場を發見するが如き心靈に、自己の心の中なる不安動搖を和らげられるが如き心に接近することに、或は又語らざることと、若しくは語るべからざることを聞くが如き鋭き耳に、出來得べき最善なるもの、實現を見るが如き慧眼に、死期の近づけるを感ずるが如き手の感觸等に熱中するものだといふことを知つてゐる。

二個の心靈が官能の分つ喜びを抱き、官能が心靈を高める歡びを有する時に當つては、其結果は欲求でもなければ友情でもない。この二つのものは一つの新しき感情の中に吸收せられ、恰も空氣がその組成分と別物なるが如くいづれをいづれとも比較し得ないものとなる。窒素は空氣ではないが、酸素でもない。官能も亦戀愛でもなく、同情でもない。彼等は化合することに於て始めて生活と戀愛の空氣となる。今もし一方の成分が他方のとよろしき割合を得なかつたなら、戀愛も亦空氣の如く、濃厚に過ぎるか稀薄に過ぎるかする

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のである。併し酸素と窒素間の割合は、何の支障なく、廣き域内に於て變更し得られる如く、戀愛の成分も亦同様になし得る。心靈の結合は疑ひもなく戀愛の最も永續的なる要素である、併しそれだからといつて唯一の價値あるものではない。眞に人生を陶然たらしめ終る戀愛はかの傳説の印度と功利的のアメリカを分つ如き深き太洋をもつて最も高尙なる友情と區別されてゐる。——友情の一生涯は僅に戀愛の一日にも相當しないであらう。

偉大なる戀愛はひとり異性に對する欲求が自己の所屬の心靈に對する渇望と結合する時に於てのみを生ずる。それは火の如きものである。熱するに從つて淸淨となる。しかもそれはかの鎔鑛爐の白熱の如く欲求の情熱とも、又かの街々に運ばれる炬火の赤く燻る焔とも異る。

（未完）

らいてう譯

藝術座の初演を見て

木兎女

比較的、長い時日の間多大の努力を以て、含蓄されて居たといふ此團體の所謂藝術と、在來の團體よりも、より多く情實的振れ込みの盛んなので、期待せられた此新劇團の初演は、私にとつては、どれ程待たれたことでせう。

私が、藝術座の芝居を見る爲に、有樂座階上の一隅に腰を下したのは、初日の夜の六時を廻わつた頃でした。メーターリンクの氣分をつくつて、先づ觀客をその感じに誘つて幕を開けるといふ、オーケストラの樂を聽くことの出來なかつたのは、一寸殘念でした。

幕は明いて居ました。薄暗い場内は息を凝らしてゐるやうに靜まり返つてゐます。比較的淺い舞臺に、大きな窓が露骨に出て居るのは、如何しても、此作に相應はしい氣分が表はれて居るとは思はれません。第一此の棧もなにもないノッペラボーのモザ張りの窓は、人の住む家―しかも「古い庭には、おつかぶさるやうに揚柳が生へてゐる。庭の奥に一つの家がある」といふメーテルリンク一流の瞑想的な、奥深い趣きは出て居ませぬ。そして何か觀る者に暗い恐怖の心と強い好奇の念とを看させるに力ある裝置だとは似ても似つかぬ感じがありました。如何に有樂座の舞臺裏が淺くても、もつと奥深さうに、そして小く舞臺の兩袖を小さく追ひつめて、見せたらば、もつと感じの迫つたものになるのでせう。誰れが何と云つても、私には木立が明るい窓の外にないといふことが全然失敗だと存じます。と申したら、舞臺の左右を見切つた緣(?)の幕が木立の象徴（シンボル）とお氣がつきませんかと仰られるかも知れませんが、兎に角、茂みを洩れる燈火でなくては面白くありませぬ。作者は有繋に內部と外部とを劃然と隔てる用意がありますのに……。

私には甚しく此舞臺裝置があき足らぬるのでした。

中井氏の老人は殆ど調子を、なさぬほどの內密話、陰にばかり籠つてつッこみが足らず、見知らぬ人との對話も沈痛のチンとも云へぬは、確かに困つた部類に屬するものでした。

怖しい死の知らせが、窓硝子一重の外に來てゐるなどゝいふ凄味はすこしも表現しません。が、それでは此戲曲の全部失敗に歸した譯ですが、要するにとりで社主催の「內部」よりは幾分かよかつたかも知れません。窓の內の人々も人形ならばもう少し効果があつたかもしれませぬ。窓の外の人々の形は、一口に舞臺に附いて居ないとでも申せばいゝでせう、二つの黒影が揺れるやうに徒だフラ〳〵と動いて居ました。此幕の開いてる間、平和な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眠りを貪つてゐたのは必ずしも室内の子供ばかりではありますまい。

開幕劇の幕が下りると、皆んな近くの椅子の人達はホツと息を吐いて廊下に逃れてゐるのでした。或劇通家の頭痛膏を張つた處も見受けました。まあ何といふ皮肉をなさる方でせう。

次に「モンナ、ヷンナは」三幕物の史劇で此作家のものとしては珍らしいほど明るい出來事を取り扱つたもの、しかし空想的な分子の多い作です二幕陣營に於て、ヷンナと敵將プリンチヷルレとの物語から最高調に達して行くのですが須磨子のヷンナは、淺い愛嬌を振りまく爲めに深みとか強みとかいふ點に甚だしく欠けてゐました。それか何となく纖弱な調子の低いメルドラネチツクな効果を収めたに過ぎませぬ。河合を眞似て、技巧に走る末端な藝は、もう一轉化してよい時期が到來して居ます。それに一番困つたことは輕い淺い愛嬌を振りまけば、振りまくほど或種の賤しい(媚を賣る種の)心の女になつて了ひました事です。到底司令官ギドーの奥方らしい氣品といふもの丶少しもないといふ事です。殆んど靈と靈との抱擁するやうなロマンチツクな味は全然見られないで却てヷンナとプリンヷルレとの相觸れぬ—何故か氣味の惡いものにでも觸れるやうな、動作などの物足りなさは繃帶を巻きなほし乍らのヷンナの物語などに於ても飽足らず思はせたので、却て何とも云へぬ厭な感じを與へました。澤田氏のプリンチヷルレと鎌野氏のギドーとは倶に役柄にまけて居て役者には却てお氣の毒の氣がいたしました。しかしプリンチヷルレは妙に臭い藝である丈幾分かまだ場の保てると思つた處もありましたが、鎌野氏のギドーなどはてんで舞詞に粒が立たず、動作もまさつで動きが取れず全く見て居るのが御氣の毒でした。其他の役々は申すまでもありません。とに角此の劇を見て酷く神經を勞らせた所は、家に歸つて眠に入つても餘りよい夢を見る事は出來ませんでした。メーテルリンクの靜寂なしかも、物凄いやうな味はひは、やがて一本調子（モノトナス）な波瀾のない藝風によつて、抑も何物を暗示（サゼスト）したかは、頗る興味あることかと存じます。

編輯室より

□九月號の「編輯室より」で申しました通り又過日皆樣に一々御通知いたしました通りいよ／＼社の規則が變更いたしました。（本社規則參照）そして在來の社則によつた社員を一まづ全部解散し、新社則のもとに新しく、改めて入社を申込んでいたゞくことにしたのです。今迄のよりも社員は或意味で狹いものになり、又責任の重いものになりました。只文學愛好の女子ならば、そして一定の社費さへ納めてゐればいいといふやうなものではなく、又淺薄な寧ろ輕卒な考から入社し、周圍の攻擊がひどいからといつてはすぐ退社するやうなそんな自信のないものではなく、少なくとも本社の精神やその仕事に自己の生命を見出し、社と共に自己を成長させて行かうとする人でなければならないのです。ずつと社と深い、親しい關係を有つたものとしたのです。そして青鞜はそれらの人の思想及生活を發表する機關となるのです。

□又社員に對しては社費を請求するやうなことはしないことになりました。ですから今後の社員は社に對して直接經濟的の負擔などから全然離れてゐます。只私共は社員の方々がひたすらに、ます／＼勉强なすつて、一つでも立派な作品を示すやうにして頂きたいと思ふからのことです。

□もう御承知でもありませうが、補助團の會員の方は專ら經濟上の關係の上に成り立つて居ます。（補助團規則參照）尤もこの會員でも「青鞜」に寄稿することが出來ます。そしてその作物が數回誌上にのせられたものは、入社して社員となることが出來るのです。（これは係員等の協議と當人の希望とによる）

□補助團は出來る丈廣く會員を募集したいと思ひますから、せい／＼骨を折つて、皆樣に御紹介、御勸誘下さるやうに御願ひいたします。

□規則は色々變りましたが、贊助員の方々にはいつもながらの厚い御同情をもつて御助力をいただきたいと存じます。

□新社員の姓名や、補助團に入會された方々の姓名は規則の後に確定した人の丈發表いたして置きます。あとのは次の月に掲載いたします。

□補助團への入會希望者は申込書（本誌卷末に挿入してある）に記入して十月卅日迄に社に申込んで下さい。

□今度の編輯室は野枝さんが見えないのと、雨のふるのとで一層淋しいものです。歌津さんもまだ來ないのですから、靜かです。硝子窓の外にはひどい雨になりました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□野枝さんにはこの廿日午後九時に可愛い坊ッちやんが出來ました。ふたりとも大變丈夫です。野枝さんの手紙にはこんなことが書いてありました「母として子を育てて行くことが自分に出來るかどうか不安です。さう思ひますと、何だか悲しくもなつて來ますこの子のためにこれから私がどの位までに左右されるかと思ふと情なくもなります。何だか恐ろしい氣がします。けれど私は今迄のコンヴンシヨナルな情實から世のつれの平凡な、子の犧牲になつてしまふ母にはなりたくないと思ひます。なつては大變だと思ひます。」

□白雨は靜座に熱中して居ります。そして毎早朝日暮里で欠さず出掛けて行きます。人に逢ふとは靜座の御利やくを說いてゐるやうです。

□エリスのセキシユアルインヴアーシヨンは譯しかゝつてはゐますが、又どうもお上の御厄介になりさうなので、その儘出せさうもありません。それやこれやで來月に廻しました。少しばかり掲載して止められてはつまりませんから出來ることなら全部一回にして出したいとも思ひまして。

□それからエンマゴルドマンの「少數對多數」といふ小論文も來月號に廻しました。

□林千歳さんはこの秋の舞臺協會で、腕一杯と云ふところを見せて下さるそうです。そうしたらばその時には、私もせめて好きな源之助の半分程は千歳さんを好きにして連中をこしらへて見に行く約束をして了ひました。出し物がシヨウなのも、少しは嬉しいことなんです。但しその日は惡口を封じられてあります。そうかと云つて「千歳さんは天下の名女優ですね」何て云ふと、にらまれるそうですから、私はだまつて見てゐさえすれば、いゝんだと今から思つてます。

□惡口と云へば、岩野さんはひどい人です。もう一月ばかり前でしたか、御自慢の、うらなりでない茄子を御ちそうになつたことがありました。ほんとうに結構なので、前言を平におわびして了つてから、實はその茄子は、お隣の百姓のを、一柵かつたのだと、云ひなさるんです。——私よりはたしかに清子さんの方がたしかにうわてにちがいありません。

□私は今度「享樂」と云ふ雜誌を手助つてゐます。一年中遊ぶことばかり考へてゐる私には、大變に相應な仕事だそうでございます。私の編輯法よろしきを得てゐるかどうだかは、御覽になつたらわかりませう、——なんて自慢が云いたいんですけど、實は創刊號が、出來上つたばつかり、まだ、ものたらないだらけです。二號は、びつくりするやうな、いゝものをきつとこしらへます。（哥津）

□森ヶ崎に病を養つてゐられる茅原華山氏かららいてう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

宛にこんな葉書が二枚來てゐました。

「日本や朝鮮や支那の女を見ると唯可愛いと思ひます近づいて一枝を折つて見やうといふ氣分にも成ります、西洋での所謂中性の女は話しをしてゐると今にも鐵拳が飛んで來さうで畏ろしく爲ります、私が獨逸と佛國とて會つた女―一人は令孃一人は奥さん―は何うしても女とは思へません性を超越した女です去りとて畏ろしくはない唯尊敬が出來る、私しが相對する時は私も男性といふことを忘れて人間に爲つたやうな心持かします、人間と人間と相對して私は唯女の臭氣ではない人間の芳香に襲はれるやうな心地がします人間と爲つたのでせう、日本の理想の女は女たるを失はず、然しながら性を超越したる女即ち人間でなければならぬと思ひますが何うしたら斯かる女が出來ませう。」

「新聞記者だの文士だの所謂ライターの生命は實に短いものです私が、十八九から筆を執つてから幾人活きながら死んだ人を送り、更に又活きながら死んだ人を送つたか分りませぬ、新しき人も竟には亡びぬと感に堪へません、今や二三の大木は將に復た杜死せんとしてゐます、十年前婦人界の花形役者たりし某々女史も今は聞えずたりぬ、自愛を乞ふ、與謝野さんも貞操觀などに囚はれてゐるやうです。」

青鞜社概則

第一條 本社は女子の覺醒を促し、各自の天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條 本社を青鞜社と稱す。

第三條 本社の事務所を東京府下巣鴨町一ノ一六三に置く。

第四條 本社は係員、社員、贊助員よりなる。

第五條 本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。「青鞜」には係員、社員、贊助員の生活及思想を發表す。(但し補助團員の寄稿を發表することもあるべし)

一、圖書出版

一、時々係員、社員の修養及研究會、並に事業上の相談會を開くこと。(但し贊助員は出席隨意たるべし)

一、毎年一回大會を開くこと、大會には贊助員を招待し講話を請ふこともあるべし。

一、時に旅行を催すこと。

第六條 係員、社員、贊助員は女子に限る。

第七條 係員は本社の目的に贊同するのみならず、本

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一、本社の事業を遂するため別に補助團を組織す。社の事業を自己の生命とするものにして專ら幹部にありて、直接本社の事業に從事し。自己にその責任を負ふものとす。係員は毎月「青鞜」の配布を受く。

第八條　係員は在京社員の中より選擧す。

第九條　係員は四人とし、內二名は經營に、他の二名編は輯に從事す。

第十條　毎年九月在京社員會議を開き、係員を改選す。但し再選することを得。

第十一條　係員には本社の經濟の許す限りは其勞力に對して多少の報酬をなすものとす。

第十二條　社員は本社の目的に賛同するのみならず本社の事業を自己の生命とするものにして雜誌「青鞜」の配布を受く。

第十三條　社員たらむことを希望する者は住所、姓名、年齡の外に履歷の大體と現在の境遇と入社の動機に十枚以上の原稿と（小說、戲曲、感想、詩歌、評論、飜譯いづれにてもよろし）最近の寫眞とを添へ本社宛申し込まるべし。

第十四條　賛助員は本社の目的に賛同し、雜誌「青鞜」に寄稿することを快諾せられたる文壇の諸先輩とす。賛助員は毎月青鞜の配布を受く。

第十五條　本社の事業を經濟的方面より助力するものを補助團員とす。

第十六條　補助團員は補助團規約によつて募集す。

青鞜社

青鞜社新社員（いろは順）

岩野清　　伊藤野枝
岩淵百合　林千歲
西崎花世　小笠原貞
岡本かの　片野珠
保持白雨　安田皐月
牧野君江　小林歌津
青木穰　　淺野友
坂本眞琴　三ヶ島よし
柴田かよ　平塚明

御返事のまだない方は御手數でも成べく早く願ひます。整理の都合もありますから。

現在係員

庶務會計主任　保持白雨
編輯主任　平塚明
補佐　伊藤野枝
　　　小林歌津

青鞜社補助團規約

一、青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんがために經濟上の補助をなすを以つて目的とす。

二、本團は其目的を遂行せむがために理事一名、外に會計主任及係員を置き一切の業務を處理せしむ。

三、本團は左の方法により十月一日より同月卅日迄御二期會員募集をなす。

1. 甲種會員　一ヶ月會費　壹圓
2. 乙種會員　一ヶ月會費　五拾錢

四、本團の會員たらむとするものは其目的に贊同し、第三條の會費を入會の月より滿貳ヶ年間納むるものとす。

(但し會費領收は青鞜紙上に發表し、別に領收書を出さず。)

五、本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を毎號贈呈す。

六、甲種會員には會費全納後なほ貳ヶ年間は雜誌「青鞜」と青鞜社出版圖書とを其都度贈呈す。

乙種會員には滿貳年間雜誌青鞜のみを贈呈す。

七、本團會員は甲種なると乙種なるとに拘らず、女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの持權を有す。

但し寄稿が數回「青鞜」紙上に掲載されたる場合は本人の希望により相當の手續き(青鞜社規定參照)を經て青鞜社の社員たる事を得、

八、入會申込者は期日内に左の書式により府下巣鴨町、一一六三青鞜社内青鞜社補助團宛に申込まれたき事

會費は毎月廿日迄に同じく本團宛便宜の方法を以つて拂込まれたき事。(但し郵便切手は一割増)

在京會員のみは本團より集金人を差向くる筈。

九、會費は大凡三ヶ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞜社に寄附するものとす。

一〇、會計報告は年一回以上便宜の方法を以て會員に發表す。

一一、この規約は理事、會計主任、係員によつて人務の細則を定め、又會員多數の意見によりて變更する事を得。

大正二年九月廿日

理事　保持白雨

會計主任　岩野清

補助團員名簿(申込順)

小林歌津　岩淵百合

青木穠　柴田かよ

安田皐月　木村政

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

乙

御勸誘
御入會

會員募集

青鞜社補助團規約

一、青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんがために經濟上の補助をなすを以つて目的とす。

二、本團は其目的を遂行せむがために理事一名、外に會計主任及係員を置き一切の業務を處理せしむ。

三、本團は左の方法により十月一日より同月卅日迄第二期會員募集をなす。

1. 甲種會員　一ケ月會費　壹圓
2. 乙種會員　一ケ月會費　五拾錢

四、本團の會員たらむとするものは其目的に贊同し、第三條の會費を入會の月より滿貳ケ年間納むるものとす。

（但し會費領收は青鞜紙上に發表し、別に領收書を出さず。）

五、本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を每號贈呈す。

六、甲種會員には會費全納後なほ滿貳ケ年間は雜誌「青鞜」と青鞜社出版圖書とを其都度贈呈す。乙種會員には滿貳年間雜誌青鞜のみを贈呈す。

七、本團會員は甲種なると乙種なるとに拘らず、女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの特權を有す。但し寄稿が二回以上「青鞜」紙上に揭載されたる場合は本人の希望により相當の手續きを經て青鞜社の社員たる事を得。

八、入會申込者は期日內に左の書式により府下巢鴨町一一六三青鞜社內青鞜補助團宛に申込まれたき事。

九、會費は每月五日迄に同じく本團宛便宜の方法を以つて拂込まれたき事。但し在京會員は本團より集金人を差向くる筈。郵便切手代用は一割增の事。

一〇、會費は大凡三ケ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞜社に寄附するものとす。會計報告は年一回以上便宜の方法を以て會員に發表す。

一一、この規約は理事、會計主任、係員によつて事務の細則を定め、又會員多數の意見によりて變更する事を得。

大正二年　月　日

理事　保持白雨
會計主任　岩野清

入會申込書

私儀青鞜社補助團の主旨に贊同し、甲乙種　口加入いたし候間此段申込に及び候也

大正　年　月　日

住所	
姓名	
拂込方法	每月拂 / 三ケ月分拂 / 六ケ月分拂 / 一ケ年分拂 / 一時拂

青鞜社補助團員殿

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大原秀　坂本眞琴
丸島夏　齋藤琴
市原久惠　岡本かの
片野珠　平塚明
保持研　伊藤野枝
清川六葉　柳清美
西﨑さかゑ

寄贈書籍紹介

少女物語 なゝ姫　河井酔茗著

若き婦人の心は毎に美しく、毎に優しく、毎に淸く、而して毎に新しくなければならないといふ、著者の心で書かれたもの。十五六歲から二十歲位までの女子達や其の父母達によませたいさうである。

少女物語十二篇、少女對話四篇、少女史談二篇、少女小品六篇からなつて居る四六判の奇麗な本である。

（定價六十錢）同文社發行

戀の眞理　意表者

戀愛は世界の大問題である、昔から西洋では之を有益な哲學者等によつて眞面目に研究されてゐるにも係はらず、日本では悲しい哉之を淨廉なものとして取扱はれ眞面目に研究された本がないといふ處から、ショーペンハウエルやプラトーン、トルストイ、フインク等の作品を參考して尙著者自身の思索によつて書かれたものである。戀の勢力、戀の發作、戀の目的等なり情死、夫婦の愛情、男女交際可否論等の二十三篇より成る。

（定價六十錢）地球堂書店發行

大戀愛學　純一方主人著

一、國家社會の諸問題より、思想宗教の諸條件と完全に、明確に解決するもの、善は之を戀愛に求むべきを說く、

二、戀愛は吾等人類が經驗することを得べき一大歡樂にして、同時に又、一大疑團ならずや

三、歡樂に生れ歡樂に生せむとするものは、須らく「戀愛の奴隷」たらず、して「戀愛の王者」たらざるべからず、本書の敎ふる處は意義に於て「帝國の光」也

之主意に於てこの本は生れたものである。〆切間際で精讀する暇がなかつた、何れ後日。

（正價八十錢）梁江書店發兌

肉食亡國論　純一房主人著

これは矢張り大戀愛の著者です。弱肉強食を非難するに過ぎぬと謂つてもよいのです、「弱者の肉」と「強者の食」とすることは無智と嘲笑する文明國人の爲し得ない次第ではありませんか、肉食を恥ぢないで、人道を論じ、平

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

和を議するのは、空中に畳かる様なものです。熱病患者でなければ精神病者でありますと云ふのが本書の要である。

（正價二十錢）同店發兌

翠溪歌集（非賣品）

故前田翠溪氏の遺稿である。若くして逝つた君の歌は、ものかなしい調子を讀む人の胸におぼへさせる。

病めるもの世に用はなしかくの如我は思へり汝も思ふや、

みおや等のみ名を彫りたる石塔の道に倒れてわれあるこころ。

寄贈雜誌

中央公論	早稻田文學	三田文學	スバル
ホトヽギス	モザイク	層雲	女學世界
婦人評論	婦女新聞	眞新婦人	心の花
藝文	帝國文學	白樺	六合雜誌
新人	婦女界	メヅハ	假面
生活と藝術	創造	新小說	日本圖書新報
大橋圖書館第拾一年報	ちさせのひゞき		サンデー
新文林	みづゑ	人生と表現	ヒトシ

公衆劇團

第一回興行

十月一日より
二十日間
帝國劇場にて
毎夕五時開演

當興行狂言

(一)マクベスの稽古(喜劇) 一幕
ベアリング作　駿河町人譯
此脚本は春陽堂發行「現代文藝叢書」第十九編に在り
役者の内幕を遠慮なくひつぱいだ諷刺劇、そこらで噓をなして居るのは誰だ?!

(二)茶を作る家(現代劇) 二幕
大久保二八子作
此脚本は十月一日發行「演藝畫報」卷頭に在り
此狂言で河合武雄は得意の藝妓に扮します、新代劇で藝者の見られるのは此劇團ばかりです。

(三)エレクトラ(悲劇) 三幕
ホフマンスタール氏作　松居松葉氏譯
此脚本は美本となりて鈴木書店より發行す
本職の俳優が數ヶ月間の練習、舞臺監督は伊太利人ローシー氏、これが眞實の鬼に金棒。

(四)女がた(喜劇) 一幕
文學博士　森　鷗外氏作
此脚本は十月一日發行「三越」文藝欄に在り
背景衣裳の不思議なので膽をつぶし、作の奇妙なので顚をはづす、餘程變つた狂言。

座席料

特等	御一名	金貳圓
壹等	同上	金壹圓五拾錢
貳等	同上	金壹圓
參等	同上	金七拾錢
四等	同上	金參拾錢

座席券は帝國劇場で發賣致して居ります
御電話で御申込下されば自轉車で御宅へ御届致します

(登場俳優)(いろは順)

岩田祐吉　英太郎
小河幸雄　岡本五郎
河合武雄　川村桂一
加藤桂二郎　武村新
田中榮三　谷澤時之助
中尾米次郎　上杉芳雄
上田史郎　野澤英一
久保田甲陽　松本要次郎
東辰夫　櫻井秀太郎
小織桂一郎　篠塚太郎
鈴木清隆

興業主任　大谷竹次郎
俳優總代　河合武雄
同　小織桂一郎
舞臺世話役　松居松葉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自十一月廿一日至同卅日
近代劇協會第五回興行

十日間 於 有樂座

イブセン作
ノラ（一幕）

ダヌンチオ作
秋夕夢（一幕）

御承知の通り**ノラ（人形の家）**は北歐の文豪**イブセン**の代表作で先年文藝協會が之を江湖に演じてから世に**新らしい女**と云ふ言葉が生れた、先回の演出では女主人に扮した女優が一躍當代一流の名を博した様に、今回も亦女主人公に扮演すべき當協會の新進女優**衣川紅雀**も特殊の舞台効果を齎らし得べきか？？？？

此脚本は南歐の精華**ダヌンチイオの作**で此夏本協會がマクベスの前に上場すべきであつたのを突然の故障で見合さなつたもの、**戀にやむ大統領夫人（山川浦路子）**に配するに、**魔女、蠟人形、船火事**等の色彩をあしらひ登場者十名**悉く女優**で白羽の豐麗、不思議な香木を焚する様な雰圍氣は一時間の一幕中必ず**人を魅する**ものであらう。

入場料金壹圓 均一
三階金四拾錢

近代劇協會顧問
醫學博士 文學博士 森林太郎
近代劇協會主宰
上山草人

近代劇協會事務所
芝區日蔭町一丁目一番地
電話新橋三四〇五

附屬試演場
芝區烏森町一番地
電話新橋三三七五

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文藝飜譯期を永遠に記念する最大最高の小説

石川戲庵氏譯
藤島武二氏畫

全譯 死の勝利

菊判八五〇頁
新裝幀全壹册
パステル彩畫
定價 金壹圓八拾錢
郵税金拾二錢

是實にダンヌンチオの私淑者戲庵氏が伊佛の原書に依據せる「死の勝利」の全譯也。往年『スバル』誌上に其一部の揭出せらるゝや芳烈濃艶殆ど比類無き情調譯として既に定評を得たるもの。近代精神の權化南國氣分の表象たる此大作家の綜合藝術は美酒と香水と色彩と音響との間に讀者を喚喝せしめ生の創造を企圖しつゝアドリアチコの海角に死を貪る主人公の巡路に神秘の威嚴を暗喩し盡せり。今や藤島畫伯鏤骨の餘に成る女主人公の豐麗なる彩畫を加へて製本出來せり。一擧近代文藝の最高壇上に立たんとする諸氏の精讀を希望す。

發兌 東京京橋區銀座一丁目 大日本圖書株式會社 振替東京二一九番

■文壇の驚異■

■藝苑の偉觀■

ホフマンスタール作

松居松葉先生譯

エレクトラ

世界の一大悲劇

譯者より原作者に宛たる書簡三十四頁載せて卷頭にあり。

原作者より譯者に贈りし書簡の肉筆及泰西の舞臺面コロタイプ數葉挿入。

第一回
公衆劇壇上演

日本の文壇に紹介された泰西の近代劇作家の中について、此維納の劇詩人ほど獨特の位置に立つて居る人はない。而して此詩人の作の中でも『エレクトラ』ほど變つた味の劇はない。其文字は絢爛豐富奔放自在、而して其材題はさながら日本武士的觀念を取扱つたやうにも見える。今や此大劇詩は、斯道に定評ある松葉氏の筆に譯され、河合小織其他の公衆劇團俳優によつて、來十月一日から帝國劇場に演せられる。洵に是れ文壇の驚異にして亦藝苑の偉觀、新らしき文藝に志ある人々に此一大名篇を奬む。

杉浦非水氏裝幀

箱入布製極美裝

定價九十錢送費八錢

發兌　日本橋區數寄屋町九　振替東京二一二二七　鈴木書店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

佛蘭西文學の神髓

新秋第一の好讀み物出現す

新刊

第一高等學校教授 石川剛先生譯

ドクトル、エス、レツトル

ルクサンブール

ルクサンブールは佛國巴里書生町の小公園にして先生が巴里留學中愛讀せる短篇十餘種を譯出せられたるものなり收むる所アナトルフランスの處世觀あり、プロスペルメリメの御伽噺あり、ピエル、ロチの若き水兵の最後は人を泣かしめヂユマの死刑囚は奇想天外より落つるもの其他ゾラ、ドーデ、ユッベ、モウパッサン等何れも代表的傑作を蒐む譯文頗る忠實にして而も流麗以て月下散策の伴となすべく、又佛文研究の師となすべし、請ふ必ず御一讀を給へ

[illegible] 郵税內地 金八錢

趣味横溢せる

大正唯一の女子記事文範現出す

新刊

青木歌子女史著 五島格員畫伯裝

新體趣味 女子文範

附錄＝送假名法句讀法 材料索引附

洋裝美製全一冊 正價金六拾錢 郵稅內地 金八錢

新しい時代に生れ、新しい教育をうけた人は新趣味を解し新思想を有してゐる、從つてそれを表すには新しい文體によらねばならぬ。然るに悲しい哉大正の世には、また女子の爲に其手本を示したものがないので世の風潮は自ら索めて危地に進みつゝある、今にして據る所を示さなければ噫危い。著者は此見地に立ちて新に筆を執り若い人々の爲めに新しい文例を示された、眞に意義ある新文章を書かんとする人は是非此書によつて法を學び時世に後れぬが肝要である

發行所 東京市日本橋 大倉書店 振替口座東京二三八

賣捌所 全國各地書肆

村上專精先生序　藤岡勝二兄跋
久津見蕨村兄跋　田中治六兄跋

高島米峰新著

噴火口

三六判美裝
定價八十錢
郵稅八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散すこれを慘狀と言ふべきかこれを偉觀と稱すべきか敢て讀者の批判に待たむと冀ふ嗚呼華嚴の瀧壺か淺間の噴火口か人生の激戰に疲れたる青年は本書に就いて慰安と活力とを求めよ

▲高島米峰著（好評四版）
廣長舌
定價七十錢　郵稅八錢

▲高島米峰著（好評五版）
一休和尚傳
定價九十錢　郵稅八錢

▲高島米峰著（新刊）
現代青年論
定價十五錢　郵稅二錢

▲高島米峰著（好評二版）
理想的商業
定價廿五錢　郵稅二錢

▲高島米峰著（好評四版）
惡戰
定價八十錢　郵稅八錢

▲高島米峰著（好評十三版）
學生參考東洋史
定價十三錢　郵稅二錢

東京小石川區原町六　振替東京一五六八六
丙午出版社

東京小石川區原町六　振替東京一三五三
鷄聲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

詩集

白き手の獵人

三木露風著■阪本繁次郎畫

今や高華なる新裝成りて愈々市に出づ!!

著者年來の信條たる象徵の奧ふかく進み入りて、未知の世界に對する鄉愁、精髓に達せんとする努力、これらをうたへるもの實にこの一卷の詩集なり。三年緘默の間に著者の苦悶とともに成れるもの、げにも怪しき韻律と、蠱惑の形畫を描く。謹みて本集を新秋の詩壇に奬めんとす。

内容

詩五十二篇、散文七篇
白と金の表紙、挿畫三葉
定價金壹圓、送費八錢

發行 東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

國木田獨步著　岡落葉裝及畫

獨步詩集

新刊發賣

新形頗美裝
挿畫一葉
定價金七十錢
送費八錢

獨步氏は詩人也。其眞面目は寧ろ詩に於て窺ふべし。明治詩壇先覺に乏しからずと雖、眞にその聲心靈より出でゝ珠玉の調をなせるものは稀也。獨步氏の詩醇正素朴、優に傳へて明治詩壇の珍寶となすに足れり。今散佚せるものすべてを輯めて玆に一卷を編む。敢て故人を愛慕する諸君に奬む。

■一人の最も眞卒なる祈禱と願求

發行所　東京市日本橋區檜物町　振替東京五六一四　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

齋藤茂吉著

〔アララギ叢書第二編〕

歌集 赤光

製本出來

四六判三百二十頁
挿畫三葉
金と赤の裝幀
定價金九十錢
送費八錢

本書の『赤光』といふ名は佛說阿彌陀經から採つたのである。書く迄もなく彼經には『池中蓮華大如車輪靑色靑光黃色黃光赤色赤光白色白光微妙香潔』といふ甚だ音調の佳い所がある。予が未だ童子の時分に遊び仲間に雛法師が居て切りに御經を暗誦してゐた。梅の實をひろふにも水を浴びるにも『しやくしき、しやくくわう、びやくしき、びやくくわう』と誦してゐた。（序より）

挿畫

蜜柑の收穫（木下杢太郎氏）（彫刻……伊上凡骨氏）

通草のはな（平福百穗氏）（三色版……田中製版所）

佛頭（木下杢太郎氏）（寫眞版……田中製版所）

發行所 東京市日本橋區檜物町 振替東京五六一四 東雲堂

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三版

北原白秋著
木下杢太郎畫

東京景物詩

金と紺と青の表紙
本文二度刷三百四十頁
定價金壹圓　送費八錢

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片戀の薄着のねるのねるのわがうれひ。
「曳舟」の水のほとりをゆくころを。
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

—東京夜曲—

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番）　東雲堂

らいてう著

再版印刷出來
定價金九十錢
送費金八錢

扃ある窓にて

「圓窓より」改版發行

さきに著者「圓窓より」一卷を世に出すや、風俗を害するの故を以て不幸發賣頒布禁止の厄に逢ひぬ。今、そのうちより忌避に觸れたる一篇「世の婦人達に」を割愛して、之れを世に出す。敢て自己の問題に思ひを潜むる篤實なる婦人達の熟讀を望む。

東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店　電話本局一八一七番　振替東京五六一四番

石川啄木遺著

啄木遺稿

新刊

四六判四百頁美本
總洋布著者肖像入
定價金九十錢
郵稅八錢

「あこがれ」以後の詩作四十篇と、著者の社會批評、隨筆、感想十五篇を收輯して本書を成す、何事かを爲さんとして常に奮鬪しつゝありし著者の辿れる足跡及抱負は本書一卷に名殘りなく現はる。吁彼何事をか爲さんとしたる、然してその筆端の何ぞしかく不平に滿ち、何ぞしかく銳利なる！　蓋、本書は彼を知らんとする好個の資料なり。

啄木歌集

三版

四六判三百五十頁
著者自筆歌挿入
定價金八十錢
郵稅八錢

「一握の砂」「悲しき玩具」の二歌集は蓋し歌壇の珍寶也、本集は右二著を合册させるものにして、溢るゝばかりの氣力と多くの不平とを抱き乍ら早くも病歿せる著者の日常生活の苦悶の聲なり。著者つねに自らの歌を「心の滓なり」「悲しき玩具なり」などと稱しつゝも、而もその眞摯なる姿の強く青年の胸を撲つは、また一奇とせざるべからす。敢て青年の机上に本集を奬めんとす。

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂藏版書目

歌集	桐の花	北原白秋	定價金壹圓
歌集	水莊記	吉井勇	定價金壹圓
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢
歌集	啄木歌集	石川啄木	定價金八十錢
歌集	馬鈴薯の花	柿人 憲吉	定價金八十五錢
歌集	赤光	齋藤茂吉	定價金九十錢
歌集	涙痕	原 あさを	定價金六十錢
歌集	早春	岡稻里	定價金七十錢
歌集	かろきねたみ	岡本かの子	定價金二十五錢
英詩集	The Pilgrimage.	野口米次郎	定價金壹圓
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢
詩集	東京景物詩	北原白秋	定價金壹圓
詩集	白き手の獵人	三木露風	定價金壹圓
詩集	霧	河井醉茗	定價金五十五錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢
小說	青鞜小說集	青鞜社	定價金八十錢
戲曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓
戲曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢
隨筆	扇ある窓にて	らいてう	定價金九十錢
隨筆	啄木遺稿	石川啄木	定價金九十錢
隨筆	歐洲美術遍路 上卷	石井柏亭	定價金貳圓
隨筆	歐洲美術遍路 下卷	石井柏亭	定價金貳圓

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌『生活』社主催

高村光太郎
木村荘八
岸田劉生
岡本歸一

油繪展覽會

右四氏の製作を展覽致します。皆さんが來て下さる事を望んで居ります。

生活（第十月號）
前月休刊、本月出來
內容は前月廣告通り

十月
自十六日
至二十二日

一週間
自八時
至五時

於 神田區仲猿樂町
ヴイナス倶樂部
（三崎町停留所と水道橋の中間、電車通）

生活社同人

吾人の藝術をして
實生活に驀進せしめ一渾せしめよ

■第二號發行■

生活と藝術

第一號初版忽賣切再版發行

■

菊判七十二頁
定價一冊十八錢
送費一錢
三ヶ月分五十四錢

■彼れは殺された（評論）……土岐哀果
■世の中に告ぐ……哀果
■秋風の中に（歌）……高山辰三
■ある男の死（小說）……佐藤緑葉
■[illegible]（歌）……大熊信行
■偶成三篇（詩）……西村陽吉
■鷗外先生を論ず（評論）……伊庭孝
■[illegible]せる銀座（詩）……德永宗之助
■影像の獵人（紹介）……仲田勝之助
■女菩薩論（評論）……笹川潔
■家族を連れて（通信）上司小劍
■空席（感想）……陽吉
■倉の中の男（ミルボオ）……大杉榮

發行所　東京市日本橋區檜物町九（振替東京五六一四）　東雲堂

第五年
第拾號

スバル

定價參拾錢
郵稅貳錢

拾月號要目

刺絡（森鷗外）小說
浮彫（竹友藻風）詩
朝の影（中島清譯）小說アルチバセフ
歌五十首（原田瑟）
生さ花（高瀨俊郎）詩
むく鳥通信
太陽の方へ（萬造寺齊譯）小說ストリンドベルヒ
歌十五首（原阿佐緒）
開の花（水守龜之助）戯曲
詩（與謝野寛）
濁酒（五百歌左二郎）小說
歌（與謝野晶子）
消息—紹介

東京市芝區芝公園五號地十二
昴發行所
電話芝四七七二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■■ 叛逆者の藝術 ■■

十月號

近代思想

金十錢

□自由（詩）……寒村
■生の道德（評論）……大杉榮
□「出發前半時間」の人生觀（評論）……伊庭孝
■裁判（詩）……寒村
□都會小詩（詩）……土岐哀果
■胡麻鹽頭（雜錄）……堺利彥
□郊外生活（短歌）……安成二郎
■いやな顔（詩）……德永保之助
□「ある日」（小說）……筒井吉久
■「内部」と「モンナ、ヷンナ」（批評）……佐藤綠葉
□暴風雨（小說）……荒畑寒村
■大久保より（雜錄）……榮
□六雜誌管見（批評）……寒村

東京府下大久保町
近代思想社
振替東京一七一六三

毎月一回

音樂

ヱルディ百年祭記念號

一日發行

十月號要目

■樂壇時評……同人
□聲詩の三句法を論す……吉丸一昌
■象徵詩と音樂的情趣……柳澤健
□箏の調子を容易に正しく合す法……田邊尚雄
■デュウゼッペ・ヱールディ……犬井英夫
□ヱールディ作品の概評……高安百合子
■歌劇「ヱルナーニ」……藤田愛子
□歌劇「リゴレット」……山内彌生
■歌劇「イル・トゥルヷトーレ」……長坂好子
□歌劇「ラ・トウラ弁アータ」……二條厚基

口 デューゼッペ・ヱールディ數葉
繪 ミラーノにあるヱールディの胸像 其他
アイダに扮せるヘムペル

■ヱールディのレクイヱム……黑田誠
□ヱールディがエフ・フイリップに送れる書……弘田龍太郎
■ヱールディの小傳と彼れの作品概評……小田島次郎
□ヱールディの參考書……同人
■歌劇「マルタ」の音樂的略解……黑田誠
□歌劇「マルタ」の中の小唄一つ……小林愛雄
■悔悟なき生（詩）……高辻秀宜
□青要路（歌）……永田龍雄
■海内樂壇……
□音階の話（六）……田邊尚雄
■音樂教授談（二）……草川宣雄

■發行所 東京音樂學校學友會 振替東京二〇六二番
■賣捌所 神田雉子町 東京堂

■會友募集
半ヶ年會費 一圓[illegible]
以上前納者は會友となり本會所催の演奏會に[illegible]し得べし
■十月廿五日廿六日の兩日ヴヱルディ[illegible]を開く。
會友は東京音樂學校所催の演奏會にも土曜日に於て入場の權利を得べし。

■定價 一部 二十五錢
郵稅 一册 一錢五厘
半ヶ年分稅共 一圓三十錢
一ヶ年分稅共 二圓五十錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊演劇雑誌

とりで

論評鋭利機敏

エレクトラ號

とりで社一派

松居松葉先生の新研究

定價參拾五錢
十月十日發行
挿畫數葉

マクベス號

平田禿木
松居松葉
淺野馮虛
伊豆四郎
原信子

附録

葱の話

戯曲――村田實

定價四拾五錢
九月廿日發行
挿畫七葉

▷十月一日發行◁

毎月一回
一日發行

美術新報

第十二卷△第十二號

價三十錢
郵一錢五

要目

(時言)地方的特色の發揮……森田龜之輔
アルフォンソ・ルグロ……高橋太華
支那發掘の彫刻に就て……河野桐谷譯
ヴヒナス像に……清見陸郎譯
ワトオの新研究……黑田鵬心
新建築印象記(一)愛國生命と保險協會……三兵衞
伊太利の田舍町シイニヤ

繪畫

人物(原色版)……アルフォンソ・ルグロ筆
支那製壺(原色版)……
ミロのヴヒナス(アートタイプ)……
シテラの島への船出(網目版)……ワトオ筆
デッサン(網目版)……アンリ・マルタン筆

要目

和漢風景畫の概觀……坂井犀水
岡倉覺三氏逸事……斯波淳六郎
石川光明先生……朝倉文夫
名家訪問記(二)津田信夫氏……碧雲居生
アンリ・マルタンに就て……齋藤豐作
新秋の展覽會……雪堂
歐洲通信……萬吾、未醒、鐵也
時報……

發行所 東京本郷湯島切通 畫報社 電話本局二四八三番 振替口座一八一〇六番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第六卷
第九號

アララギ

十月一日發行

□流らふ色……島木赤彥
□なびき藻……齋藤茂吉
□相聞……古泉千樫
□兄は病めり……原阿佐緒
□青木湖……金原よしな
□呼吸の音……中原しつ子
□信濃より……赤彥
□赤城の一月……土屋文明
□宵……平瀨泣崖
□歌集馬鈴薯の花……青五
□最近の歌壇……千樫

短歌

清水謙一郎　湯本禿山　並樹秋人　厳桐軒
松島梧風　兩角七美雄　柳本城西　眞瀨子
岡千里　飯山津涙男　森山汀川　茅眞子
木原蒼平　岡野幸男　吉川かすみ　うし子

■誌友募集■

定價一部廿錢■半年一圓十錢(税共)

東京本所區南二葉町二十三
アララギ發行所

アララギ叢書第二編

歌集 赤光（しやくくわう）

新刊發賣
四六版三百五十頁
定價金九十錢
送料八錢

齋藤茂吉著及裝幀
木下杢太郎畫
平福百穗畫

日本橋區檜物町九番地
東雲堂發行

毎月一日一回發行
一册金二十五錢
郵税金一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

百六十號（十月一日發行）

六册前金郵税共
金一圓五十錢
十二册同上金二圓八十錢

戲曲「ギヨツツ」（ギヨオテ）……鷗外譯
歌劇「マルタ」の上場……小林愛雄
「出發前半時間」と「チヨコレエト」隊兵との上場……伊庭孝
ハルベに就て……島村民藏
霧中語……山崎紫紅
小戲曲の技巧……廣政法天
公衆劇團の日本劇……松居駿河町人
默阿彌著作解題……河竹新水
英國の海濱より……坪内士行
唐人殺しの脚本……青々園
本鄕座の九月狂言と帝劇……芹影女
春木町から歸りて……立花靜子
藝術座の評判……紫蘭、秀雄、芹影
役者の告白……坂本猿冠者
活動寫眞化せる文藝品……吉山旭光
九月の劇場（青々園、春浦）……
續無線電話（歌舞伎座と田村成義）……室田武里

東京本鄕湯島切通坂町報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八〇一三六
振替口座一八一六

四六貳倍版　壹百頁

創作

價廿五錢　郵壹錢半

十月自選歌號內容

競詠廿四家集

全國に溢れる少壯詩人の精、集つて此一冊に在り、命をつくして各その詠を競ふ。

島木赤彥　金子薰園　武山英子　西出朝風　服部嘉香　齋藤茂吉　古泉千樫　前田夕暮　狹山信乃　中村憲吉　土岐哀果　尾上柴舟　若山牧水　菅野哲三　蒲原有明

白鳥省吾　加藤朝鳥　室生犀星　吉川惣一郎　荻原朔太郎　中川一政　三木露風　木村莊八　水野葉舟　内藤鋠策　小川未明　新妻莞　高鹽背山　逸見義亮　中山雅吉

橋口暮山　桐田大亮　小柳江村　樋渡花明　小野葉櫻　西内白穗　森園天涙　指田縫三郎　和田山蘭　越前翠村　加藤東籬　廣田樂　四賀光子　山田邦子　若山喜志子

歌壇の近勢

痛罵となり、鞭韃となり、讚美となり、現代歌壇の鳥瞰圖となる。蓋し歌界空前の一大批評。

發行所　東京市小石川區大塚窪町廿　創作社

發賣所　東京銀座　籾山書店　東京神田　東京堂

文藝雑誌 創造 四週年紀念號

生の創造と藝術

岩野泡鳴
稲毛詛風
石坂養平
本間久雄
片上伸
相馬御風
中村星湖

諸家の新藝術論

内藤濯
福田夕咲
福士幸次郎
阿部次郎
安倍能成
木村荘八
清浦青鳥

第四週年紀念號

詩歌十數篇（挿畫數葉）

毒藥の壺（感想）　相馬御風
沿岸（小説）　八橋有春
永遠の路へ（カスペンスキイ）　米川正夫
平和祭（ハウプトマン戯曲完）　秦豊吉
七年振り（アンドレエフ小説）　播磨楢吉
モンナバンナ劇の評及び其他（感想）　清浦青鳥

第一歩

相馬御風著

之れ新生活の第一歩を踏み出さんとするものの最も切實なる要求の叫びなり最近の文壇に於ける問題の中心點と目さるる著者獨創の感想錄毒藥の壺を初め著者最近の思想起るは悉く蒐めて此の一卷にあり第一步一卷實に之れ現代思想界の一大烽火なり

體裁極美　六十錢

發賣所　東京神田區雉子町三二　東京堂書店

特價卅錢
郵税二錢

新文林

第一卷第十一號　（十月號）　定價十錢郵稅一錢

◉科學の壓迫と藝術（評論）……長谷川天溪
▽しろえつこ（詩）……川路柳虹
▽書齋の話……鈴木三重吉
▽土蜂（歌）……並樹秋人
▽文藝閑話……兎耳子

（口繪）
▼女の顔（ピカソオ）
▼文學者の故[illegible]（上司小劍氏、吉江孤雁氏）
▼ダンヌンチオ
▼臺灣生蕃の合奏及び岸田劉生氏のコマ繪

◉雨の日（小說）……德田秋聲
▽新文範（森田草平氏、フロオベル氏、武者小路實篤氏）
▽小品四篇……佐々木好母
▽ダンヌンチオ（評傳）……記者
▽代表的歌人の歌（評譯）……窪田空穗

（懸賞文）
△小說（秋聲選）
△普通文（雨雀選）
△短歌（通治選）
△俳句（鳴雪選）
△詩（編輯局選）
△短文（編輯局選）

文壇澁谷目黑黨……小旋風

發行所　東京神田今川小路　忠誠堂　振替東京二〇四三一番　電話本局四九六六番

◉第三回新學期（内容見本規則申込次第進呈）會員大募集◉

文章講義

■講師は文壇の大家　■講義は懇切也　■特典は多大也　東京神田今川小路　大日本文章學會

詩歌短歌號

十月一日發行

評論

□歌壇に對する要求……三井甲之
□歌壇傍觀者……三木露風
□國民的情調の變化……服部嘉香
□作歌の衝動と表現……古泉千樫
□破調に就て……細谷明
□思ひいづるまま……前田夕暮
□九月歌壇概觀……詩歌同人

短歌

□たのしき夢……尾上柴舟
□秋日小情……若山牧水
□おひろ……齋藤茂吉
□情話の後……水島爾保布
□川瀨より……熊谷武雄
□太陽に醉ひて……田村飛鳥
□疑室……佐藤朝花
□未練……楠田敏郎
□靈と肉と……奥村博
□深夜……米田雄郎
□海に來りて……矢代東村
□赤花叢……佐々木順
□秋にほそる命……金子不泣
□我が家の生活……中島哀浪
□喘ぎつつ……安藤迷墟
□無花果の葉……寺井義
□八月と九月と……山田邦子

□悲しき戯れ……原阿佐緒
□野木のもと……小野深雪
□草場の秋……狹山信乃
□醉中痴歌……尾山篤二郎
□我が儘ごと……細谷明
□月光……新妻莞
□死の沈默……廣田樂
□九月の外光……前田夕暮

□亡靈(戯曲)……高橋泰
□露臺(長詩)……川路柳虹
□乞食(長詩)……加藤介春
□おちくる夢(長詩)……柳澤健
□埴輪(散文詩)……白鳥省吾
□夢のくに(譯詩)……竹友藻風
□おまへではなかつた……小林愛雄

短歌

□瀧澤謙　□田中白夜
□村田光烈　□清水平三郎
□小谷清子　□久保内星穀
□松島梧風　□栗田正
□平島與志美　□小野健治

露臺より

□矢代東村　□田中白夜
□高辻秀宣

本號特價金參拾五錢（送料二錢）

發行所　東京市外西大久保　白日社　振替口座東京貳六壹六參番

社友募集　白日社清規往復葉書にて申込まれたし。

發賣所　東京神田雉子町　東京堂

心の花

第十七年　十月號　第十號

いちじく　松村みね子
經が峰　印東昌綱
船津村　有島生馬
緋葵　原田謙次
百年後の美術　呉野潮音
萬葉集兩卷說　品田太吉
水戸家と萬葉代匠記　和田英松
小澤蘆庵と香川景樹　佐佐木信綱
悲しき弟　石榑千亦
短歌百首　朝場重三
短歌百首　大河内國子
短歌百首　山尾末子

定價一部金二十錢●六冊前金一圓●十二冊前金二圓●稅共

東京日本橋區　竹柏會出版部　本石町一ノ一
電話本局五一七〇番●振替東京四〇三〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■モザイク■

拾月發行第拾八號內容

追放されたる一夜（小説）……水島爾保布
淋しき笑（小説）……小川未明
困つた絵（評論）……川路柳虹
少年の春（小説）……清見陸郎
沈　默（戯曲）……水守龜之助
春の目ざめの英譯に就て（評論）……野上臼川
黄ろい光の中より（小説）……五十風禎夫
三人の笑（小説）……西田長左衛門
カレマースピーレの春の目ざめ（劇信）……生田葵
札幌より（通信）……武林無想庵
九月の文壇（評論）……モザイク同人
サニン（六月號ヨリ毎號五十頁連載）……武林無想庵

壹冊拾錢郵税壹錢五厘・六冊壹圓八十錢

東京市下谷區中根岸町六九　モザイク社

假面

十月號

定價廿五錢　第二卷第八號　郵税一錢半

▶半年前金(郵税共)一圓四十錢・同一ヶ年一圓七十錢◀

□牢獄へ(フレエザア)……瀬戸義直
□酒倉の壁(和歌)……石井直三郎
□陣痛(小説)……伊東六郎
□坊ちやんの言草(感想)……草太郎
□愛人こその使ひ男(ダンヌンチオ)……田中介二

挿畫

▽假面(表紙繪)……長谷川潔
▽モスコオ美術座の「夜の宿」……ゴルキイ
▽オスカア・ワイルドの碑……エプスタイン
▽「超婦人」……シヨオ
▽神秘の愛鉢羅苑……ピアアズレエ

□高臺から(評論)……本間久雄
□獄中のワイルド(評論)……竹内逸
□赤き枕に(和歌)……永瀬義郎
□一夜(ガルシン)……松田良四郎
□ドラムスコ日記抄(感想)……デスタアテ
□曠野(小説)……西條八十

モウパッサン作
吉江孤雁譯

水の上

新刊發賣

□野口柾夫氏装幀□新式函入天金頗美本□
□感じのいゝ裝釘□氣持のいゝ箱入□
□定價金壹圓□郵税(内地)金八錢□

發賣元　東京神田錦町一丁目　振替東京一四一二三番　中興館

月刊美術雜誌

みづゑ

第百四

十月三日發兌

送料共廿五錢

■挿畫■

□街道（水彩畫原色版）……藤島英輔
□フローレンス（同）……丸山晩霞
□十和田の秋（同）……大下藤次郎
□驛（同）……吉崎勝
□霧の檜林（水彩畫寫眞版）……水野以文
□高知（同）……寺田季一
□其他水彩畫寫眞版數葉……

■記事■

□藝術と社會……津田黄昏
□寫生せむとする場所の撰擇に就いて……織田一磨
□繪ごゝろ……鈴木鼓村
□水彩畫に他のメデアム共用に付て……鵜澤四丁
□初學者に……赤城泰舒
□三脚物語……鵜澤四丁
□會津より……磯萍水
□不寫生旅行……南薫造
□赤倉日誌……後藤工志
□其他……

みづゑは本邦最古にして且唯一の水彩畫專門研究雜誌なり水彩畫を描く人は勿論愛好する諸士は一日も本誌を座右に欠く可からず

發行所 東京小石川關口駒井町三 振替口座東京六九六三番 春鳥會

第四巻第拾號

俳味

毎月一回一日發行

拾月號要目

正に新風の興る時……文學博士 佐々醒雪
この焦心熱情……小栗風葉
私解芭蕉の發句（夏）……沼波瓊音
俳諧圖界標……長尾素枝
海窓錄……吉丸萬古刀
乙字の「虚子の新傾向雑感を讀みて」を讀みて……大西一外
氣分……岩田月葉
洛に入る……岩永涼々居
箆棒な銅像熱……川島風骨
柴胡の原……山本銀杏
お母さんに別れてから……芳賀桑花
何や彼や……都田蟹六
義太夫を……つきのは
中禪寺湖まで……齋藤紫浪
俳詩……素枝
俳諧歌……晉亭萬古刀 瓊音
アンデパンダン しぶ林檎（歌仙）……小杉未醒 山本鼎
壺庭（懸賞俳句）……芳賀桑花選
天の川（同上）……長尾素枝選
喋舌（同上）……岡野知十選
「自叙三條」（同文章）……沼波瓊音選
俳句、俳譚百人一首……諸家
地方俳壇。俳交欄。
俳志一覽。きくらげ。
三角窓。其他……
口繪、蕪村筆奥の細道の一部……（寫眞版）

定價 一部廿錢郵税一錢 三ヶ月分税共 金五十五錢 半年分税共 金壹圓 一年分税共 金貳圓

發行所 東京本郷西片町十番地（振替東京三四三四番） 俳味社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十月一日より

第廿六回新柄陳列會

江戸振髪飾及袋物陳列

懸賞募集ゴム寫眞陳列

寄せ切れ見切反物大賣出し

第四回美術及美術工藝品展覽會

付諸國名産品陳列

右何れも盛大に開會仕候間御誘合され

御來觀被下樣本願上候。

東京駿河町

三越呉服店

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和44年9月15日発行　【第5回配本】

青鞜第3巻　10月号

編著者	平塚らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
v.3
no.10

University of Colorado at [redacted]
[redacted] L744343

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一冊金貳拾五錢 郵税壹錢五厘

■前金購讀料 四ヶ月分 壹圓 六ヶ月分 壹圓五拾錢 八ヶ月分 貳圓 十ヶ月分 貳圓五拾錢 一ヶ年分 參圓

■社費は一ヶ月金參拾錢にして、毎月十五日迄に納附せられたし。取纏め納付せらるゝな便宜とす。

■廣告料 一頁 拾五圓 半頁 八圓

■振替貯金口座は(東京五六一四東雲堂)に拂込まれたし。

■郵券代用は一錢切手に限る、但し一割増のこと。

■編輯事務、寄贈圖書雜誌、及研究會に關する事務は青鞜社へ。

■雜誌購讀、社費拂込、廣告申込、交換廣告其他販賣に關する一切の事務は東雲堂へ。

■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正二年九月二十八日印刷納本
大正二年十月一日發行

東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三
青鞜社内
編輯兼發行人 小野初

東京市京橋區新榮町二丁目廿二番地
印刷人 佐藤保太郎

東京市京橋區新榮町二丁目廿二番地
印刷所 文祥堂

禁轉載

編輯所 東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三 青鞜社

發賣所 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店
電話本局一八七一番
振替東京五六一四番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第三巻

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER